

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第310集

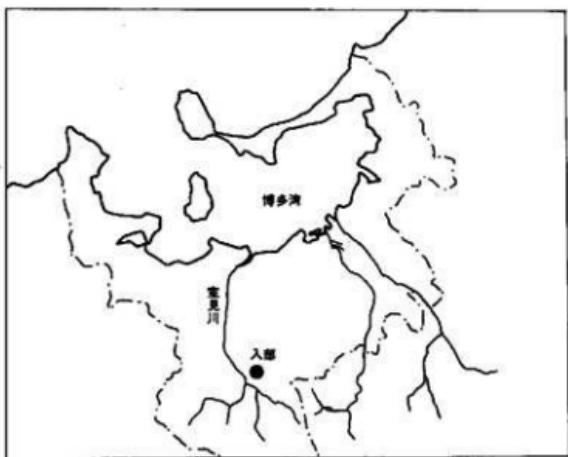
い る べ
入 部 III

1992

福岡市教育委員会

IRU BE
入 部 III

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第310集



遺跡略号 I R B - 4

遺跡調査番号 9006

1992

福岡市教育委員会



圃場整備事業地全景

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されてきました。それらを保護し後世に伝えていくことは、云うまでもなく行政の務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は、昭和62年度から8ヶ年計画で実施されている早良区入部地区の県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、平成2年度の調査概要とその成果の一部を報告するものです。調査では、縄文時代から江戸時代にいたる数多くの遺構を検出しました。特に本書で報告します清末遺跡では、中世の大型建物群と居館跡を発見しました。これは中世の集落や社会を復元するうえで大きな手がかりとなるものと考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が早良区東入部で1990年度に行なった県営圃場整備に伴う発掘調査の概要ならびに報告である。
1. 県営圃場整備（入部地区）に伴う発掘調査は1987年度から継続しており、これまでの成果については次の2冊の報告書として刊行されている。
「入部I」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第235集 1990
「入部II」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第269集 1991
本書はこれに次ぐものであるところから「入部III」とした。入部そのものは遺跡名を表すものではない。
1. 本書で報告したのは西面古川、西面船石（第2次調査）、清末（第2次調査）の3遺跡群である。
1. 本書では各遺跡群ごとに遺構・遺物番号を通しとした。また遺構についてはS B（据立柱建物）、S C（竪穴住居）、S D（溝）、S E（井戸）、S K（土坑）、S X（その他の遺構）の略号を用い、番号の前に付けた。
1. 本書で使用した実測図は、横石哲也、長家伸、榎本義嗣、林田憲三、英豪之、黒田和生、村上かをりが作成した。製図にあたっては上記の他、松尾秋代、入江のり子があたった。
1. 本書で使用した写真は横石、長家が撮影した。空中写真に関しては（有）空中写真企画による。
1. 本書に用いた方位は磁北である。
1. 本書に関わる図面、写真、遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
1. 本書は執筆はI、II、V-1・2・3・7およびV-5-1)・2)を演石、V-6を榎本、残りを長家が行った。
1. 本書の編集は長家が行った。

本文目次

	本文頁
Iはじめ	1
II 1990年度の調査概要	3
1 組織	3
2 調査経過	3
3 潜在遺跡群	5
III 四箇古川遺跡群	7
1 遺跡群の概要	7
2 遺構と遺物	7
3 小結	8
IV 四箇船石遺跡群（第2次調査）	9
1 遺跡群の概要	10
2 1区の調査	10
1) 概要	10
2) 遺構と遺物	11
3 2区の調査	11
1) 概要	11
2) 遺構と遺物	13
4 3区の調査	16
5 小結	16
V 清末遺跡群（第2次調査）	17
1 遺跡群の概要	17
2 1区の調査	17
1) 概要	17
2) 遺構と遺物	18
3 2区の調査	27
4 3区の調査	29
1) 概要	29
2) 遺構と遺物	29
5 4区の調査	41
1) 概要	41
2) 遺構と遺物	41
6 5区の調査	83
1) 概要	83
2) 遺構と遺物	83
7 6区の調査	87
1) 概要	87
2) 遺構と遺物	87
8 まとめ	91

図版目次

図版 1	1 岩本遺跡全景（上空から）	
	2 東入部遺跡全景（東から）	
図版 2	1 四箇古川遺跡全景（西から）	
	2 四箇船石遺跡 1 区全景（南から）	
図版 3	1 四箇船石遺跡 2 区全景（北から）	
	2 四箇船石遺跡 3 区全景（東から）	
図版 4	四箇船石遺跡 1 1 区 S E 0002	2 2 区 S E 0011
図版 5	1 清末遺跡 1 区全景（北から）	
	2 清末遺跡 1・2 区全景（南から）	
図版 6	清末遺跡 1 区 1 S B 1001（北から）	2 S C 0010・0011（西から）
図版 7	清末遺跡 1 区 1 S C 0010	2 S D 0019 遺物出土状況
図版 8	清末遺跡 3 区 1 全景（北から）	2 全景（南から）
図版 9	清末遺跡 3 区 1 西側調査区全景（東から）	2 S D 0060 大溝（北から）
図版 10	清末遺跡 3 区 1 S E 0067・0068	2 S E 0601
図版 11	清末遺跡 3 区 1 S E 0062	2 S E 0666
図版 12	清末遺跡 4 区全景（上空から）	
図版 13	清末遺跡 4 区 1 大型建物群（上空から）	2 居館（上空から）
図版 14	清末遺跡 4 区 1 大型建物群（西から）	2 S B 1003（西から）
図版 15	清末遺跡 4 区 1 S B 1003（東から）	2 S B 1004（南から）
図版 16	清末遺跡 4 区 1 S B 1005（北から）	2 S B 1006（西から）
図版 17	清末遺跡 4 区 1 S B 1008（西から）	2 S B 1011・1012（北から）
図版 18	清末遺跡 4 区 1 S B 1013周辺（南から）	2 S B 1017（北から）
図版 19	清末遺跡 4 区 1 S B 1018・1019（南から）	2 S B 1021（西から）
図版 20	清末遺跡 4 区 1 S D 0102	2 S D 0108・0109
図版 21	清末遺跡 4 区 1 S D 0104	2 S D 0104 土層
図版 22	清末遺跡 4 区 1 S E 0115	2 S E 0274・0290
図版 23	清末遺跡 4 区 1 S E 0274	2 S E 0290
図版 24	清末遺跡 4 区 1 S E 0276 一段目状況	2 S E 0276 完掘状況
図版 25	清末遺跡 4 区 1 S K 0300・0309・0312	2 S K 0112
図版 26	清末遺跡 4 区 1 S K 0266	2 S K 0271・0272
図版 27	清末遺跡 5 区 1 全景（北から）	2 S C 0701
図版 28	清末遺跡 6 区 1 全景（西から）	2 S C 0089

挿 図 目 次

本文頁

第1図	入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡 (1/50000)	2
第2図	圃場整備年次事業地と遺跡群 (1/10000)	4
第3図	1990年度圃場整備事業地と調査区 (1/2000)	折り込み
第4図	四箇古川遺跡群調査全体図 (1/200)	7
第5図	S K0001および出土遺物実測図 (1/20、1/3)	8
第6図	四箇船石遺跡群1区・2区調査全体図 (1/300)	9
第7図	S D0001、S E0002実測図 (1/40)	10
第8図	S E0002出土遺物実測図 (1/3)	11
第9図	S E0011、S D0012・0013、S K0014実測図 (1/40)	12
第10図	S E0011、S D0012・0013、S K0014出土遺物実測図 (1/3)	14
第11図	S D0012出土遺物実測図 (1/2、1/3)	15
第12図	清末遺跡群1区 S B1001・1002実測図 (1/100)	18
第13図	S C0010実測図 (1/60)	19
第14図	S B1002、S C0010出土遺物実測図 (1/3)	20
第15図	S C0011実測図 (1/60)	21
第16図	S C0011出土遺物実測図 (1/3)	22
第17図	S E0008、S K0004実測図 (1/40)	23
第18図	S E0008出土遺物実測図 (1/3)	24
第19図	S K0005、S X0038実測図 (1/40、1/20)	25
第20図	S D0001・0012・0013・0020・0021・0023・0025土層断面実測図 (1/40、1/50)	26
第21図	清末遺跡群2区調査全体図 (1/400)	28
第22図	清末遺跡群3区 S E0063・0068・0069・0601実測図 (1/60)	30
第23図	S E0063・0068出土遺物実測図 (1/3、1/4)	31
第24図	S E0069・0601出土遺物実測図 (1/3、1/4)	32
第25図	S K0062・0066・0602・0603実測図 (1/40)	34
第26図	S K0061・0062・0067・0602・0603・0604・0606・0608・0609出土遺物実測図 (1/3)	36
第27図	S D0060土層断面実測図 (1/60)	37
第28図	S D0060出土遺物実測図 1 (1/3)	38
第29図	S D0060出土遺物実測図 2 (1/3)	39
第30図	S D0060出土遺物実測図 3 (1/4)	40
第31図	清末遺跡群4区 S B1003・1004・1005配置図および柱断面実測図 (1/400、1/60)	43
第32図	S B1006・1007実測図 (1/100)	45
第33図	S B1008実測図 (1/50)	46
第34図	S B1009・1010・1011・1012実測図 (1/100)	48
第35図	S B1013実測図 (1/100)	49
第36図	S B1014・1015・1016実測図 (1/100)	50
第37図	S B1017実測図 (1/100)	51

第38図	S B1018・1019・1020実測図 (1/100)	52
第39図	S B1021・1022実測図 (1/100)	54
第40図	S E0115・0274実測図 (1/60)	55
第41図	S E0115出土遺物実測図 (1/3)	56
第42図	S E0274出土遺物実測図 1 (1/3)	57
第43図	S E0274出土遺物実測図 2 (1/3)	58
第44図	S E0276・0290実測図 (1/60)	60
第45図	S E0276・0290出土遺物実測図 (1/3)	61
第46図	S K0112・0114・0146・0211・0212実測図 (1/40)	63
第47図	S K0112・0114・0146・0211・0212出土遺物実測図 (1/3)	64
第48図	S K0262・0264・0265・0266・0267・0271・0272実測図 (1/40)	66
第49図	S K0264・0265・0266・0271・0272出土遺物実測図 (1/3)	67
第50図	S K0275・0278・0283・0284・0285・0292・0298実測図 (1/40)	69
第51図	S K0300・0301・0302・0304・0305・0336実測図 (1/40)	70
第52図	S K0275・0278・0283・0284・0301出土遺物実測図 (1/3、1/4)	72
第53図	S K0307・0308・0309・0312・0341・0379実測図 (1/60)	74
第54図	S K0308・0336・0341・0379出土遺物実測図 (1/3)	75
第55図	S K0950実測図 (1/60)	76
第56図	S K0950出土遺物実測図 (1/3)	77
第57図	S D0102・0104・0108土層断面実測図 (1/40)	79
第58図	S D0102・0104出土遺物実測図 (1/3)	80
第59図	S D0108・0109・0400出土遺物実測図 (1/3)	81
第60図	清末遺跡群 5 区 S C0701実測図 (1/60)	83
第61図	S C0701、S D0742出土遺物実測図 (1/3)	84
第62図	清末遺跡群 6 区調査全体図 (1/200)	87
第63図	S C0087・0088・0089、S K0091実測図 (1/60、1/40)	88
第64図	S C0087出土遺物実測図 (1/3)	89
第65図	条里製造構(大溝)配置図 (1/16000)	92
第66図	I 期遺構配置図 (1/500)	94
第67図	II・III 期遺構配置図 (1/1000)	95
第68図	居館址類例	96

表 目 次

第 1 表	入部地区園場整備事業地内発掘調査年度別一覧	1
第 2 表	1990年度調査対象遺跡群一覧	6
第 3 表	清末遺跡群 4 区掘立柱建物一覧	54

付 図

付図 1	清末遺跡群 1 区・3 区・5 区調査全体図 (1/200、1/400)
付図 2	清末遺跡群 4-1 区・4-2 区調査全体図 (1/200)

I はじめに

福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示されたのは1985年（昭和60年）のことであった。約100haの耕地を対象とし、1987年度から8ヶ年にわたって圃場整備を行うという計画であった。

埋蔵文化財課では事業地内に重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の8遺跡群と坪塚古墳があることを確認した。しかもこれらの遺跡群は、旧河川部分を除き事業地のほぼ全域に密着するような状態で分布していた。ただ四箇東と清末の2遺跡群の一部がこれまでに調査されたにすぎず、遺跡群の全域が事業地内に含まれる重留、岩本、東入部についてはその広がりを類推する以外はまったく情報を持ち合わせていなかった。

そこで埋蔵文化財課は1986年3月に事業地内の遺跡群と坪塚古墳を試掘調査した。その結果、遺跡群では溝、柱穴などを、また坪塚古墳では周溝と草石を検出した。出土遺物からすると弥生時代と中世を主体としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

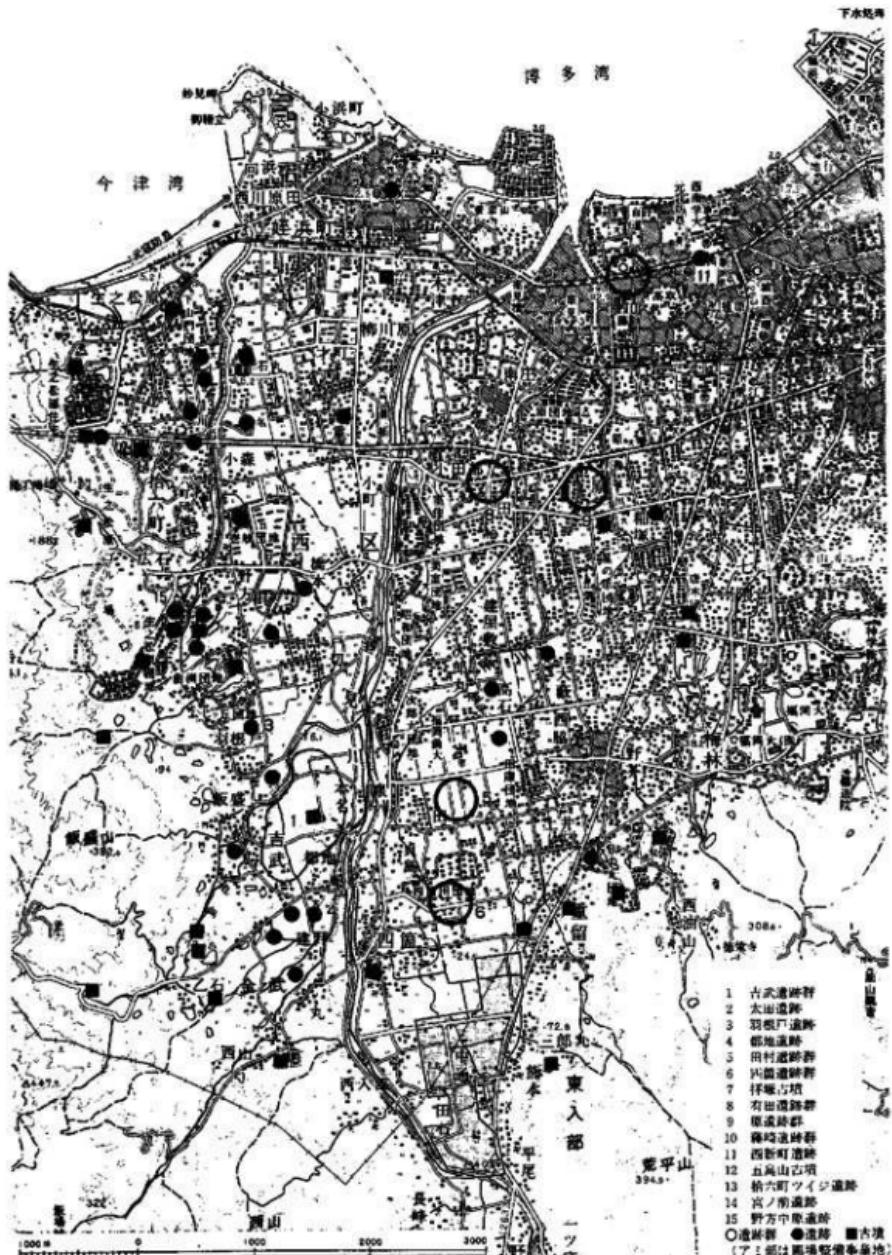
埋蔵文化財課では試掘調査の結果などをもとに事業者と協議をもち、翌年度から工事が造構に及ぶ箇所について発掘調査で対応することとした。実際の発掘調査は1988年1月に開始し、以後今年度まで5ヶ年にわたって調査を継続してしてきた（第1表）。

調査年度	事業面積	調査対象面積	本 調 査 期 間	対 象 遺 跡 群
1987	5.0ha	12,500m ²	1988. 1. 6～1988. 3. 31	四箇東
1988	15.2ha	15,000m ²	1988. 6. 21～1989. 4. 7	重留
1989	15.9ha	16,200m ²	1989. 8. 1～1990. 3. 26	重留(2次)・岩本・四箇船石
1990	15.2ha	22,294m ²	1990. 7. 18～1991. 3. 8	清末(2次)・岩本(3次)・四箇船石(2次)・東入部
1991	21.7ha	34,381m ²	1991. 5. 13～(調査中)	清末(3次)・東入部(2次)・安通

第1表 入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧

発掘調査は事業面積が多くなった1988年度以降、まずその年度の事業地の試掘調査を行い、その結果に基き事業者と調整をはかり、調査対象面積を最小にして本調査に入るという手順を踏んでいる。広大な事業面積に対し文化財課側は体制、期間、費用などの点から調査の対応がきわめて困難であった。そこで事業者と設計や工事方法の変更についての協議事項を取り決め、調査対象面積の縮小をはかってきた。それにもかかわらず造構の密度が濃く、調査は工事と並行し、なおかつ年度末近くまで継続する状況が続いている。協議事項についてはこれまでの報告で詳述されているのでここでは割愛する。

本書では1990年度の発掘調査の概要と、調査した遺跡群のうち四箇古川、四箇船石、清末の3遺跡群について報告を行う。



II 1990年度の調査概要

1 組織

県営入部岡場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備監察課

福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市入部土地改良区

調査主体

福岡市教育委員会文化財部（前文化部）埋蔵文化財課

課長 柳田純孝（前任） 折尾学

第1係長 飛高憲雄

第2係長 柳沢一男（前任） 塩屋勝利

庶務 中山昭則

調査担当 清石哲也 長家伸 池田祐司 小畠弘巳 宮井善朗 菅波正人

調査補助 林田憲三 英素之 黒田和生 村上かをり

なお発掘調査が無事完了できたのは有田吉太氏をはじめとする多数の作業員の方々のご協力のたまものである。深くお礼申し上げたい。また河野明弘氏（県農林事務所）、大田太朗氏（市農業土木課）、鍋山弥三理事長をはじめとする改良区の方々、鶴岡崎産業、㈱西部産業には直接的にご指導、ご協力をえた。

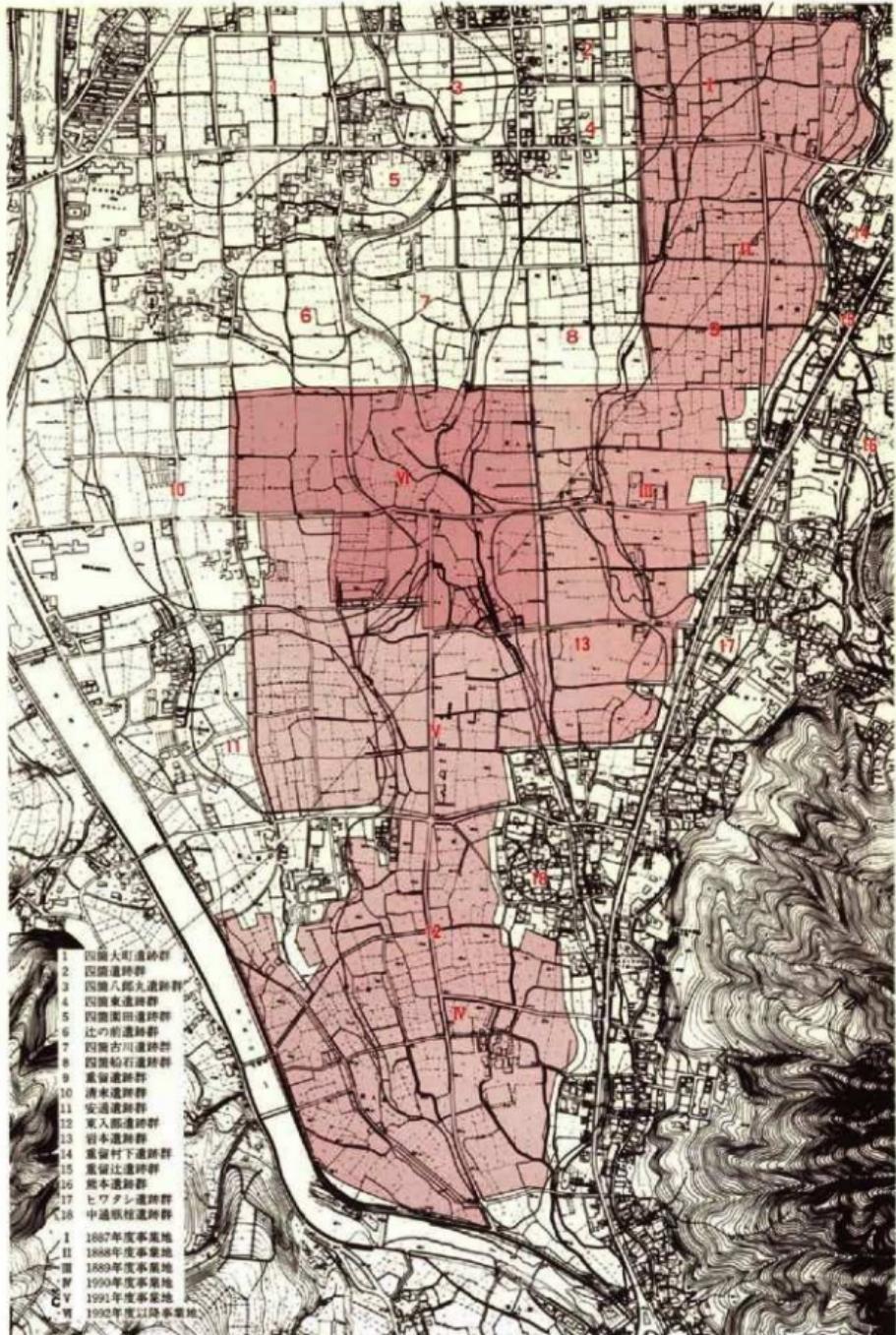
2 調査経過

1990年度の圃場事業地は前年度の西側一帯にあたり、その面積は15.2haであった。事業地内にはその中央を貞島川が東南からやや蛇行しながら北流し、それを取り囲むようにして四箇古川、四箇船石、岩本、東入部、清末の5遺跡群があることがすでに知られていた。前年度の調査状況からみても発掘調査が広範囲にわたることは必須であった。

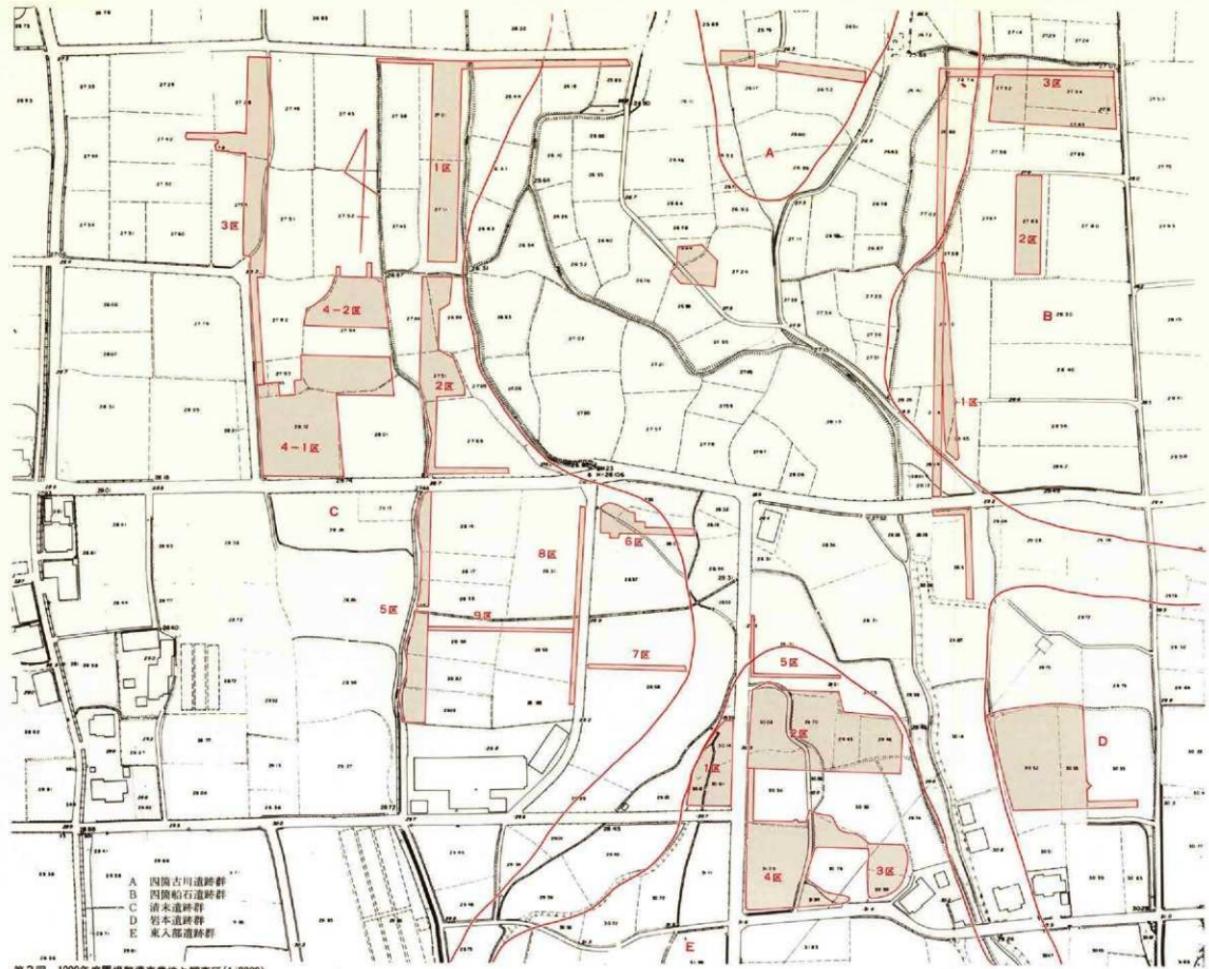
試掘調査 6月18日から7月15日まで圃場整備地内遺跡群詳細分布調査として実施した。この調査は、遺跡の範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、圃場整備事業との調整を行うのが目的である。

試掘トレーニングは、事業地中央を南北に走ると考えられる旧河川の幅などを考慮し、東西方向に44本を設定し、重機（バックホー）を用いて掘削した。

その結果、時代の異なる幾つかの旧河川が対象地の中央にあり、それをはさんで当初知られていた5遺跡群に遺構が広がることが明らかになった。四箇古川遺跡群では中世の溝・ピットなど、四箇船石遺跡群では弥生時代の竪穴住居・土坑・溝と中世の土坑・ピットなど、岩本遺



第2回 地図整備年次事業地と遺跡群(1/10000)



第3図 1990年度園芸整備事業地と調査区(1/2000)

跡群では弥生・古墳時代の竪穴住居・土坑と中世の井戸・ピットなど、東入部遺跡群では弥生・古墳時代の竪穴住居・土坑・溝など、清末遺跡群では中世のピット・溝・土坑が多数あったほか古墳時代の竪穴住居などを確認した。

埋蔵文化財課はこの試掘調査結果をもとに、事業地内の遺構の分布とその性格・深度などとともに当初事業計画による発掘調査面積を事業者に示した。旧河川部分については、弥生時代から中世の流路も認められるものの、ほとんどが疊に覆われ、またそのほとんどが田面部分であることから調査の対象から外した。これに対し事業者は盛土・田面高の変更で示した調査対象面積約30,000m²を22,294m²に縮小した。課では体制および調査期間から発掘調査が可能と判断した。

本調査 試掘調査の終了した直後の7月18日から開始し、翌1991年3月8日に完了した。

試掘調査後の調整期間中、まず変更のきかない道路・用排水路の構造物についてとりあえず先行して発掘を行った。最初は事業地西北側の清末遺跡群から着手した。梅雨明けの後は酷暑で、なおかつ雨の降らない日が続き、調査はきわめてきびしいものとなった。9月には第5区で中世の大型建物と環濠に囲まれた居館を検出した。この区の調査は無数の遺構の重複に時間をとられ、12月いっぱいまで時間を費やした。遺構の重要性にかんがみ12月7日には記者発表し、翌8日には現地説明会を開催した。またこの調査と並行して、10月には調査面積の少ない四箇古川・四箇船石遺跡群の調査を完了した。

清末遺跡群が一段落した12月中旬から、調査職員の増加もあって、岩本遺跡群と東入部遺跡群をほぼ同時に着手した。岩本遺跡群は弥生・古墳・中世の集落が重複しており手間取ったが、2月16日に最後に出土した喪棺を取り上げ終了した。東入部遺跡群は古墳時代の集落の他、繩文時代の包含層の調査を行い、3月はじめに終了した。その後機材の撤収などを行い、3月8日に1990年度の発掘調査をすべて完了した。

この調査期間中、県農林事務所、市農業土木課、地元改良区、また年度後半は工事業者も入れ、月には一度の割合で工程会議をもち、発掘調査と工事の調整を計った。

3 調査遺跡群

事業地のある早良平野には旧石器時代から近世にいたる遺跡群が随所に確認されている。また最近の各種原因による開発で、発掘調査が行われた遺跡もきわめて多い。平野内の遺跡群についてはこれまでの報告に譲ることとし、本書では割愛したい。

さて先述したように、1990年度調査したのは四箇古川・四箇船石・岩本・清末・東入部の5遺跡群である。調査はこれらの遺跡群の中で道路・排水路・用水路の構造物部分と田面のうち切土になる部分及び表土直下に遺構が存在する部分を対象にした。田面については再三触れたように、事業者と埋蔵文化財課で調整を重ねたにもかかわらず、どうしても調整がつかなかっ

た部分のみである。各遺跡群の地区と調査原因などについては第2表にまとめた。

今回報告するのは四箇古川、四箇船石、清末の3遺跡群である、これらについては本文に譲ることとし、未報告の2遺跡について簡単にその概要を記しておく。

岩本遺跡群 荒平山の西麓から西北方向に伸びる遺跡群で、西側は川で区切られる。前年度の圃場整備すでに調査されており、今回は2次調査となる。構造物および田面の切土部分約2304m²について調査を行った。調査地点では遺構がほとんど表土の直下に見られた。北端部分では弥生土器が多く含む黒色土が表土下に2次堆積していた。

検出したのは弥生時代、古墳時代、および中世の集落跡である。弥生時代は円形まれに方形の竪穴住居あわせて18基を確認した。時期は前期末から中期前半にいたる。他に甕棺墓、土壙墓もみられた。住居からの出土遺物は少ないが、包含層からの弥生土器の量が多い。古墳時代はきわめて残存状況の良好な方形竪穴住居15基を確認した。出土土師器も比較的豊富であった。時期は前期に属する。中世の集落は掘立柱建物からなり、その一部は溝に囲まれていた。他に井戸、焼土坑などが見られた。土師器、輸入陶磁器などが出土している。

東入部遺跡群 荒平山の西麓から西北方向に舌状に延びる遺跡群で、北端は岩本遺跡群の西側にいたる。発掘調査は今回が初めてである。調査地点は遺跡群の北端部で、構造物および切土の田面あわせて5945m²について発掘を行った。

検出したのは弥生時代の前期末から中期前半の甕棺墓・土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡、鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、溝、多数のピットなどである。古墳時代および鎌倉時代の集落跡であったものであろう。他に縄文時代後期から晩期の包含層も見られた。遺物としては縄文土器・石器、弥生土器・石器・銅鏡、古墳時代土師器・須恵器、中世土師器・輸入陶磁器などが出土した。

遺跡群名	区	調査対象面積	調査原因	備考
岩本(3次)		2,421m ²	用水路・排水路・田面	(未報告)
東入部		5,453m ²	用水路・田面	(未報告)
四箇古川		440m ²	用水路・排水路	
四箇船石(2次)	1	280m ²	排水路	
	2	3,325m ²	用水路・排水路・田面	田面の一部は上面だけ調査。下面は保存。
清末(2次)	1	2,275m ²	用水路・排水路・道路・田面	
	2	1,119m ²	用水路・道路・田面	
	3	1,102m ²	用水路・排水路・道路	
	4	3,239m ²	排水路・田面	田面は埋戻し保存(裏面は中世時期のみ)
	5	1,240m ²	用水路・道路	
	6	128m ²	用水路・田面	
	7	80m ²	用水路	
	8	741m ²	排水路・道路	
	9	120m ²	用水路	
(その他)		331m ²	田面	江戸時代墓(1基)

第2表 1990年度調査対象遺跡群一覧

III 四箇古川遺跡群

1 遺跡群の概要

本調査区は四箇古川遺跡の南端部に位置し、旧貞島川の分流部分にあたる。遺構は、耕作土直下の黄褐色粘質上で検出した。遺構面標高26m～26.3mを測る。検出遺構は土坑・溝・ピットで出土遺物はいずれも中世に属するものである。

2 遺構と遺物

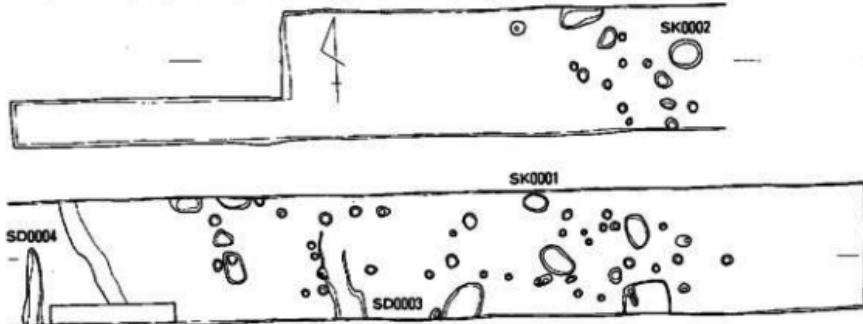
(1) 土坑

土坑は全体で10基程検出した。いずれも浅く、深さ20～30cm程のものである。遺物は中世土器器破片がほとんどである。

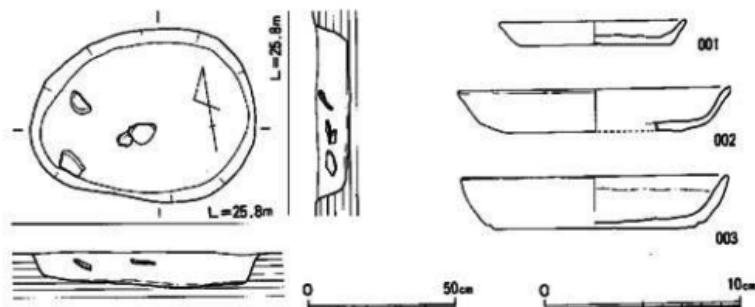
S K0001 (第5図) 調査区中央北側に位置する。長径80cm、短径60cm、深さ10cmを測る。平面卵形、断面箱形を呈す土坑である。糸切りの土器器皿・环・口禿げ白磁細片が1片出土している。

出土遺物 (第5図001～003) 001は土器器皿である。口径9.5cm、底径7.8cm、器高1.2cmを測る。底外面は回転糸切りで板状圧痕を残す。内底面は回転ナデの後不整方向のナデを施す。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。002・003は土器器皿である。2は口径14cm、底径9cm、器高2.2cmを測る。淡褐色を呈す。胎土には雲母を多く含む。003は口径13.6cm、底径10.4cm、器高2.7cmを測る。淡褐色を呈し雲母を多く含む。また口縁部内面に煤の付着がみられる。いずれも外底面回転糸切りで板状圧痕を残す。

S K0002 調査区西側に位置する。径1.1m×1.0mの円形を呈す。深さ30cmを測り、底面は平坦で断面箱形を呈す。埋土は淡褐色～褐色粘質土である。遺物は土器器・黑色土器A類細片、管状土器等が出土した。土器器は回転糸切りのものを含む。



第4図 四箇古川遺跡群調査全体図(1/200)



第5図 SK0001および出土遺物実測図(1/20,1/3)

(2) 溝

S D 0003 調査区中央に位置する。幅80cm、深さ10cmを測る。断面浅皿状の溝である。土師器、瓦器片を含む。

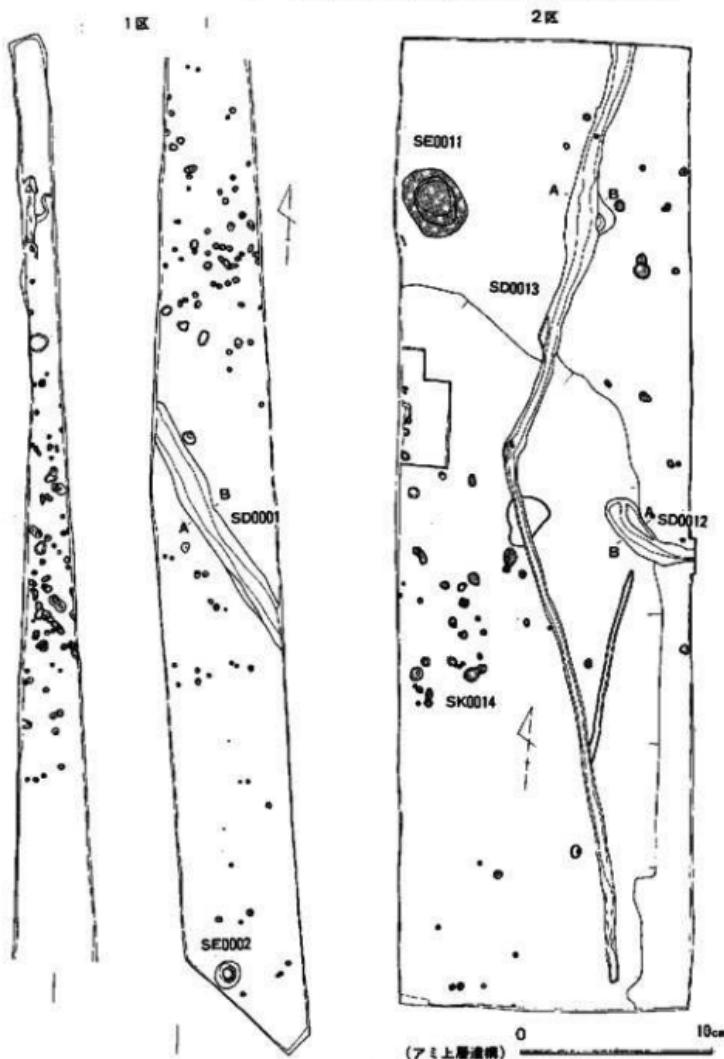
S D 0004 調査区中央に位置する。幅60cm、深さ20cmを測り、北側で緩やかに立ちあがる。断面浅皿状を呈す。土師器、陶磁器細片が若干出土する。

3 小 結

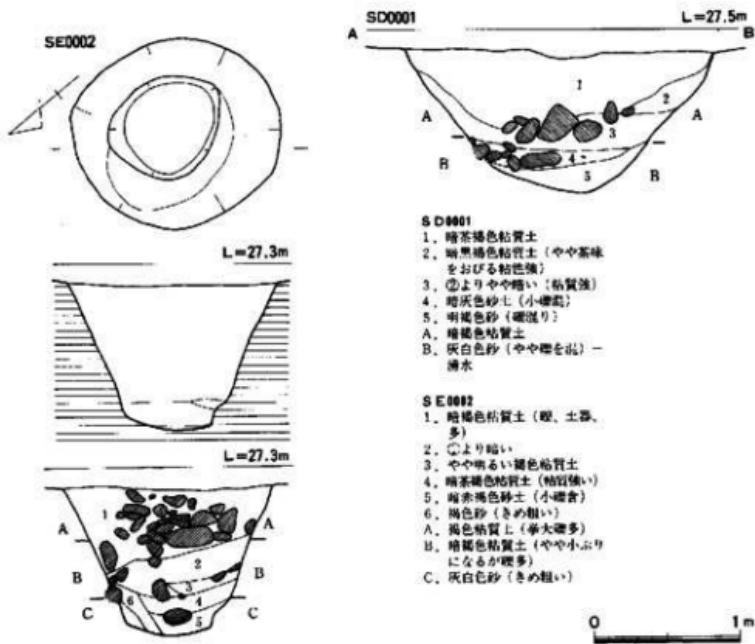
本調査区ではおおむね13世紀～14世紀代に位置づけられる遺構と遺物が検出された。

本年度遺跡群の南端部の調査に限られたものであり、遺跡群全容は明らかにし得ないが、氾濫原面に立地している所から考え、全体に中世期の遺構を中心にして広がっているものと思われる。

IV 四箇船石遺跡群(第2次調査)



第6図 四箇船石遺跡群1区・2区調査全体図(1/300)



第7図 SD0001、SE0002実測図(1/40)

1 遺跡群の概要

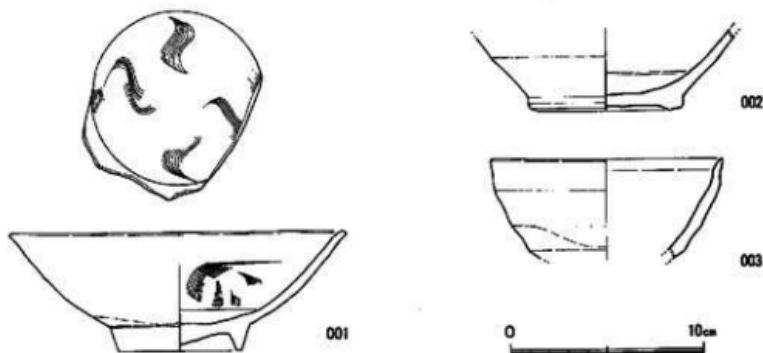
四箇船石遺跡群は貞島川右岸の完新世段丘面に立地する。第1次調査では弥生時代前期の墓棺をはじめ中世に至るまでの遺構が検出された。今回の調査区は前年度の西側に位置し、旧貞島川河道に面する。

調査は道路、用・排水路の構造物及び遺構面に影響を及ぼす田面について行った。

2 1区の調査

1) 概 要

1区は遺跡群北西端に位置する、延長約100mにおよぶ調査区である。遺構面は盛土下50cm程の暗黒褐色土を除去した所で検出した。標高27~28mを測る。検出遺構は井戸・土坑・溝・ピットである。



第8図 SE0002出土遺物実測図(1/3)

2) 遺構と遺物

(1) 井戸

SE0002(第7図) 調査区南端に位置する。上端径1.4m、底面径0.4m、深さ1.0mを測る。堆土には奉大程の礫を多く含む。土師器、瓦器、陶磁器が若干出土した。

出土遺物(第8図001~003) 001はV類の白磁碗である。口径17.2cm、器高6.1cmを測る。高く直立する高台を有し、体部外面まで施釉する。体部内面には柄状工具による花文が施され、見込みに浅い段を有す。002は白磁IV類の碗である。体外面下半には施釉せず、内面見込みには沈線状の段をもつ。釉調はやや灰味をおびた白色を呈す。003は天目茶碗である。復元口径12cm、残存高5cmを測る。ベージュ色のやや粗い胎土。黒色の釉がかかるが、口唇部にかけて釉厚が薄くなる。口唇部及び口唇下の屈曲部内外面は銹色を呈す。

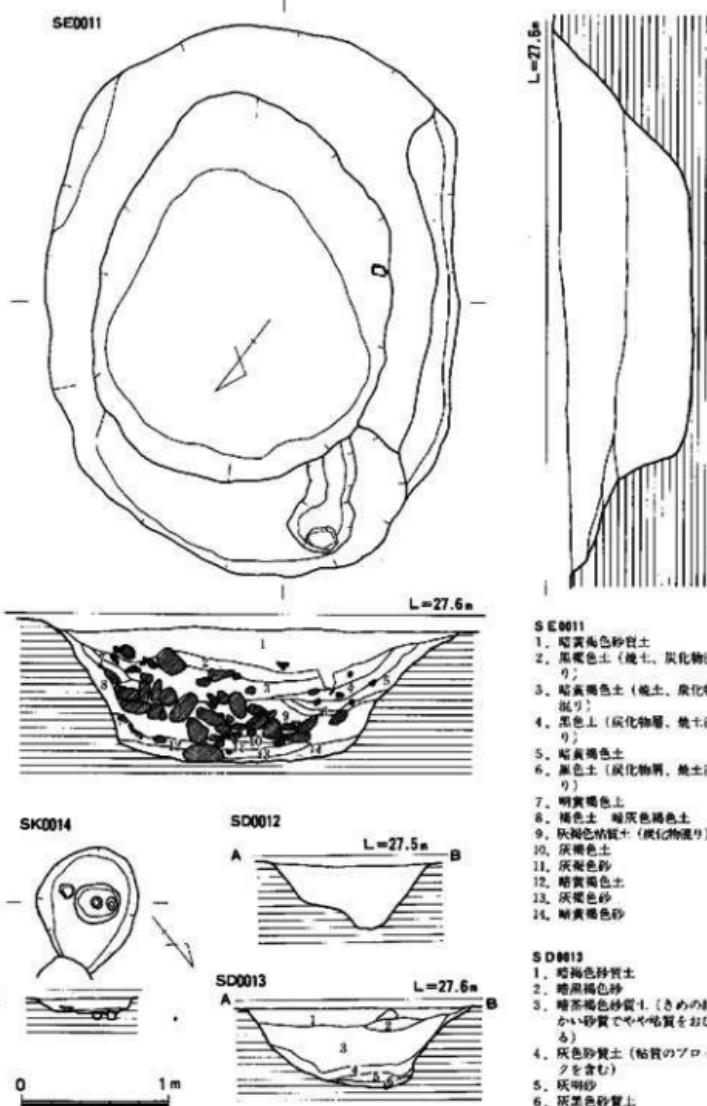
(2) 溝

SD0001(第7図) 調査区南側に位置する。幅1.1m、深さ0.5mを測る。上層は暗褐色粘質上で、下層は砂礫が混入しており流水のあったことをうかがわせる。遺物は上層より縄文時代晩期に属する深鉢、浅鉢の細片が出土している。

3 2区の調査

1) 概要

2区は1区の北東に位置する。上下2面の遺構面を検出した。1面は標高27.6mを測り、耕作上面下の黄褐色上で井戸・土坑・ピットを検出した。2面は調査区南側に形成された深い谷に堆積した黒褐色土を除去した所で検出した。堆積土は最大厚0.5mを測り、弥生時代中期~



第9図 SE0011, SD0012・0013, SK0014実測図(1/40)

古墳時代の上器片を包含する。遺構面は北側黄褐色土、南側灰褐色砂質土で標高27.6m～27.2mを測る。

2) 遺構と遺物

(1) 井戸

S E0011(第9図) 1面調査区北側で検出した。長径3.2m、短径2.8m、深さ0.9mを測る。埋土には拳大蝶が多く含む。土師器、黒色土器、陶磁器、石鍋が出土する。

出土遺物(第10図004～015) 004は土師器壺である。口径15.4cm、高さ3cmを測る。外底面はヘラ切りによる。胎上に雲母を多く含み、淡褐色を呈す。005・006は土師器壺である。005は底径9.4cmを測る。焼成はあまり、淡赤褐色を呈す。底面が径4cmの略円形で消失する。006は高台外面端を肥厚させる。内底面は横方向のミガキを施す。007・008は黒色土器A類である。底径それぞれ6.2cm、6.4cmを測る。内面にはやや粗雑なミガキが施される。009～014は黒色土器B類である。体部内・外面にはやや粗雑な横位のミガキを施す。009～013はそれぞれ底径5.4cm、5.8cm、6.2cm、6cm、7cmを測る。014は口縁端部を外反させる。015は滑石製石鍋である。内法16cm、高さ13.5cmを測る。口縁部平面は円形を呈す。やや内湾する体部に1対又は2対の長方形の耳を有する。外面は綫長のケズリ、内面にも粗いノミ痕が残る。また体部には径6mm程度の貫通孔が最低3ヶ所穿たれている。またそのうちの一孔には棒状鉄製品が挿入されている。対となる孔の部分が消失しているが補修孔であろう。また体部外面には煤の付着が認められる。

(2) 土坑

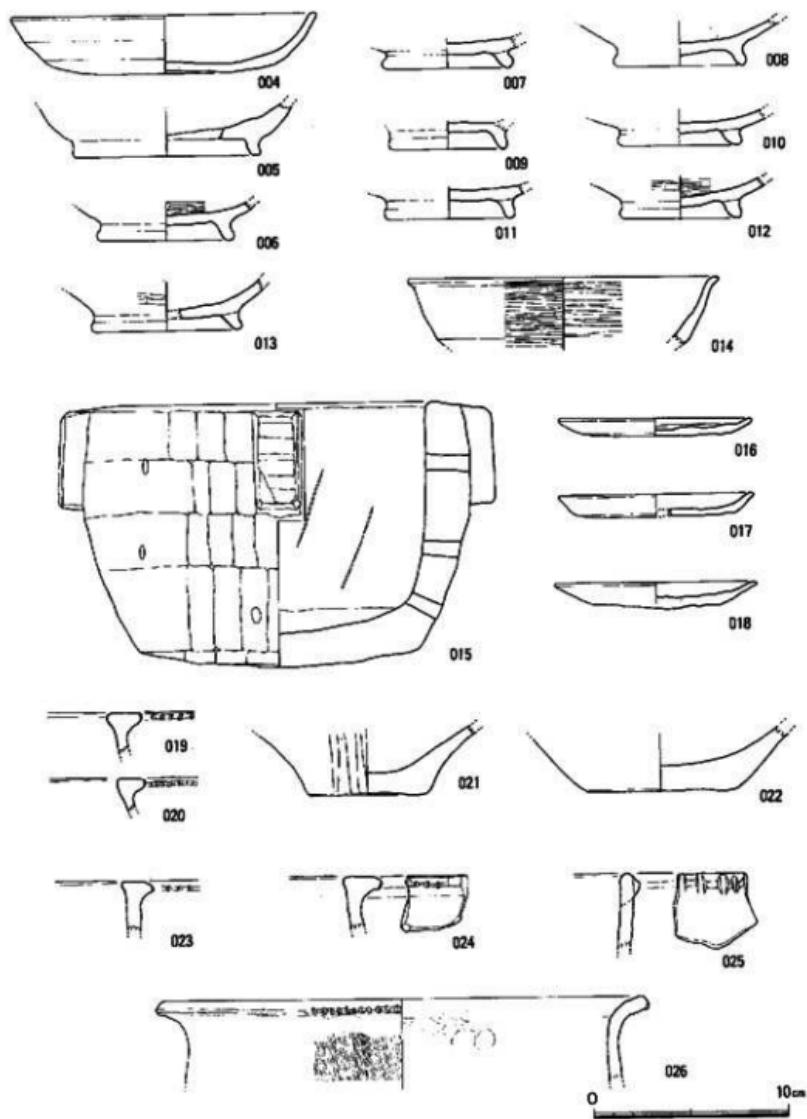
S K0014(第9図) 調査区南側1面で検出された。径80cm程を測る長円形土坑である。土師器皿が出土した。

出土遺物(第10図016～018) 土師器皿である。口径はそれぞれ10cm、10cm、10.4cmを測る。いずれも外底面ヘラ切りで板状压痕を有す。色調は淡褐色を呈す。018は口縁部の一部に煤が付着しており、灯明皿としての利用が考えられる。

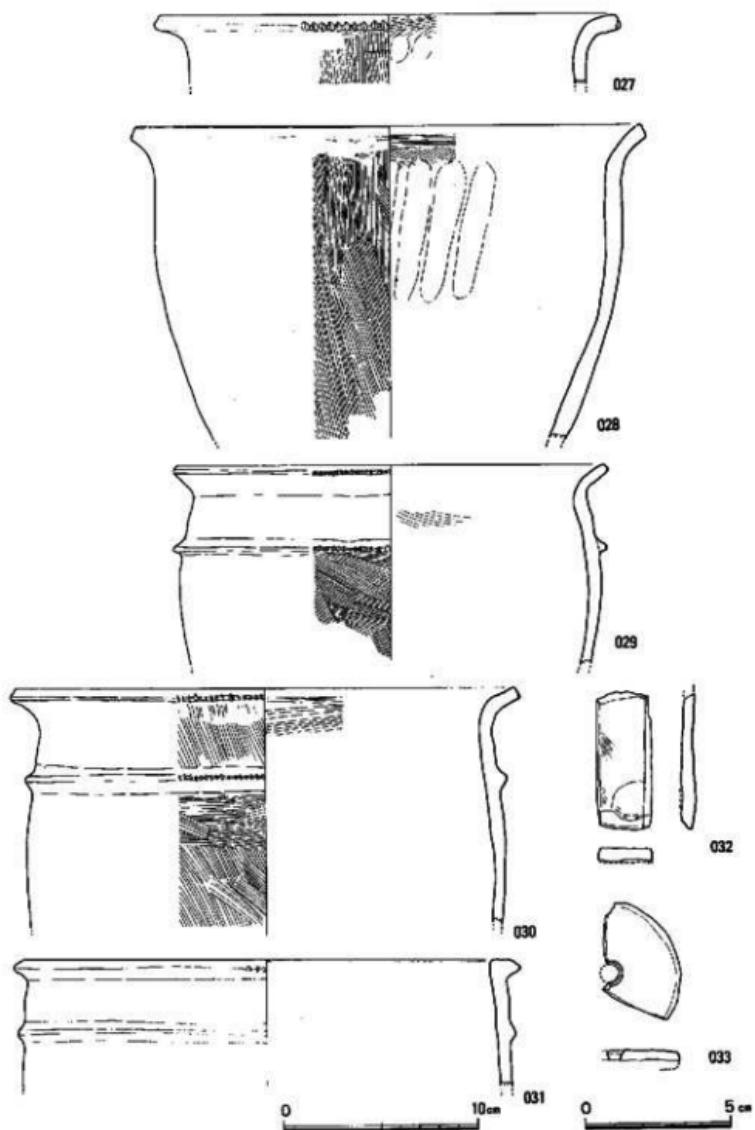
(3) 溝

S D0012(第9図) 調査区中央東隅2面で検出した。やや北側に曲がりながら調査区内で立ちあがる。最大幅1.2m、深さ0.5mを測る。南側に一段平坦面をもつ二段掘りになっている。埋土は茶褐色粘質土で分層はできなかった。弥生式土器、石斧、纺錘車等が出土した。

出土遺物(第10・11図023～033) 出土土器はほとんど變形土器である。025は口縁端部外面に下向きの傾斜面をもつ一条の刻目突帯を有する。器面の剥離が進むが、内面はナデ調整である。026～030は如意状口縁を有する。026・027は口縁外下端に刻目を有する。口径24.8cm、23.6cmを測る。体部外面は縦ハケを施し口縁下は横ナデ調整。内面は口縁部～体部横ハケを行い、屈曲部は指おさえを施す。028は刻目を有しない。外面縦ハケの後口縁下横ナデ、内面口縁部横ハケ、体部指おさえによる。029・030は口縁外下端に刻目を有し、胴部上半に一条の刻目突帯を



第10図 SE0011, SD0012・0013, SK0014出土遺物実測図(1/3)



第11図 SD0012出土遺物実測図(1/2、1/3)

巡らすものである。外面の突帯下は縦ハケの後横～斜方向のハケを施す。023・024・031は口縁外端に粘土を貼付け肥厚させる。内外面共にナデが施される。031は胸部上半に突帯が廻る。磨滅が進んでいるが刻目が施されていたものと思われる。

032は灰白色堆積岩製の扁平片刃石斧である。残存長4.5cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。刃部は磨耗する。033は粘板岩製の紡錘車である。復元径5cm、孔径0.6cmを測る。下半部が欠失している。

S D0013（第9図） 2面で検出した。調査区中央を南北に通る。最大幅3m、深さ1mを測る。南部分は谷に向かって自然消滅する。下層に砂の堆積が認められ流水のあったことがうかがえる。遺物は縄文時代晚期～弥生時代後期にかけての土器が出土する。いずれも細片が多く時期も判然としない。時期的に幅をもって考えておきたい。

出土遺物（第10図019～022） 019・020は甕形土器の口縁部である。口縁外面に粘土を貼付け肥厚させ、端面に刻目を有するものである。021・022は甕形土器の底部である。021は底径6cmを測る。外面は縦方向のミガキが施される。022は底径7cmを測る。径1～2mmの長石・石英粒を多く含む。

4 3区の調査

3区は2区の北側に位置する。耕作土を除去した標高27mの所で黒褐色土の面を検出した。これは2区の谷部に堆積していたものと同様のものとおもわれたが、中世遺構は遺出されなかつた。更に30cm程下げた段階で黄褐色土の遺構面より、住居跡、ピット等が検出された。黒褐色土層には弥生時代中期～古墳時代の遺物が包含されており、周辺の調査の状況より、主に弥生時代前期～中期の遺構であると思われる。本調査区は下面にまで工事が及ばないため、上面のみの確認にとどめた。

5 小 結

本調査は遺跡群の南西部を対象に行われ、2面の遺構面より中世前半期及び弥生時代の遺構・遺物を検出した。1・2区においては全体に散漫であったが、検出にとどめた3区では弥生時代の遺構が密に存在しており、1次調査結果と考えあわせると、分布の中心は本調査地点の西北側に考えることができる。今後の調査を重ねることにより、その全体像が明らかになるであろう。

V 清末遺跡群（第2次調査）

1 遺跡群の概要

清末遺跡群は早良平野の南側、宝見川が平野に流れ出るいわば扇の要近くに位置する。事業地の中では油山山塊から最も西に離れた沖積地に立地する。東西約460m、南北約480mの広大な遺跡群で、その南側には安通と東入部遺跡群、北側には四箇の各遺跡群が川や谷を経て広がる。西側は宝見川となる。遺跡群の標高は27.0~30.0mで、北と西に向かって低くなっている。

1977年福岡市消防学校建設に際し、遺跡群の西端部分で発掘調査が行われた。調査面積は約5000m²、調査期間は10月25日から翌年の3月2日に及んでいる。検出されたのは2間×2間の純柱建物4棟、堅穴住居2基、南南西から北北西に延びる溝などで、出土遺物から5世紀後半~6世紀の古墳時代に比定されている。なお遺構の広がるのは学校北東部の校舎建設予定地であったが、計画が変更され遺跡は調査後運動場下に残された（調査担当者の力武卓治氏ご教示）。

今回の調査対象となったのは遺跡群の東側部分である。試掘調査では東入部遺跡群および四箇の各遺跡群とは旧河川により隔てられ、また南の安通遺跡群との間には明確な川や谷などはないものの遺構が途切れる地区が認められた。遺跡内でも辺縁部は遺構の密度が薄く、中央によるにしたがい密度が濃くなる傾向がみられた。

調査は構造物および切土の田面についてのみ行った。その対象面積は10044m²。実際に調査したのは9743m²であった。調査地点が遺跡内で飛ぶために、まとまった地区を便宜的に1~9区に分けた。このうち4区の南側は中世の大型建物と環濠聚落で足の踏み場もないほどの遺構の重複がみられた。また3区から8区西側に向かってのびる条里の坪境と考えられる大溝を確認した。他地点の遺構は比較的薄く、1、5、6区でおもに古墳時代前期から中期の堅穴住居を検出したにとどまる。以下、各区ごとに遺構、遺物の内容などについて叙述する。

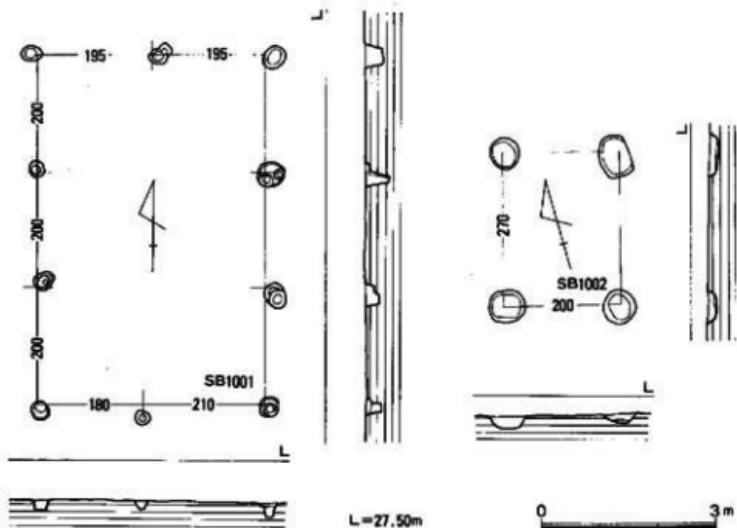
なお、7・8・9区については若干のピットを検出したにとどまり、ここでの報告を割愛した。

2 1区の調査

1) 概要

1区は遺跡群の東北端付近にあたる。道路・用水路建設および田面の削りに伴い2494m²を調査した。調査地点は耕作土の直下が黄色土となり、一部礫が見られるものの比較的安定して広がり、遺構はこの面で認められる。しかしすぐ東側には水路が流れ、その辺りから段落ちし疊混じりの旧河川跡となる。現在の河川である貞島川は調査地点の東約60mを蛇行しながら北流している。調査区の標高は北側で27.7m、南側で27.0m。

試掘調査で、溝や堅穴住居などを確認していたが、本調査の結果古墳時代の堅穴住居3基、中世の掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑8基の他、縄文時代晩期から近世までの溝17条などを検出



第12図 清末遺跡群1区SB1001・1002実測図(1/100)

した。溝を別にすれば、古墳時代の遺構は調査区中央に、中世の遺構は北側に集中する。なお試掘調査の際、北側部分で石塔(九柄)1が出土したので、古代の遺構の検出を期待したが、遺構のみならず遺物も確認できなかった。

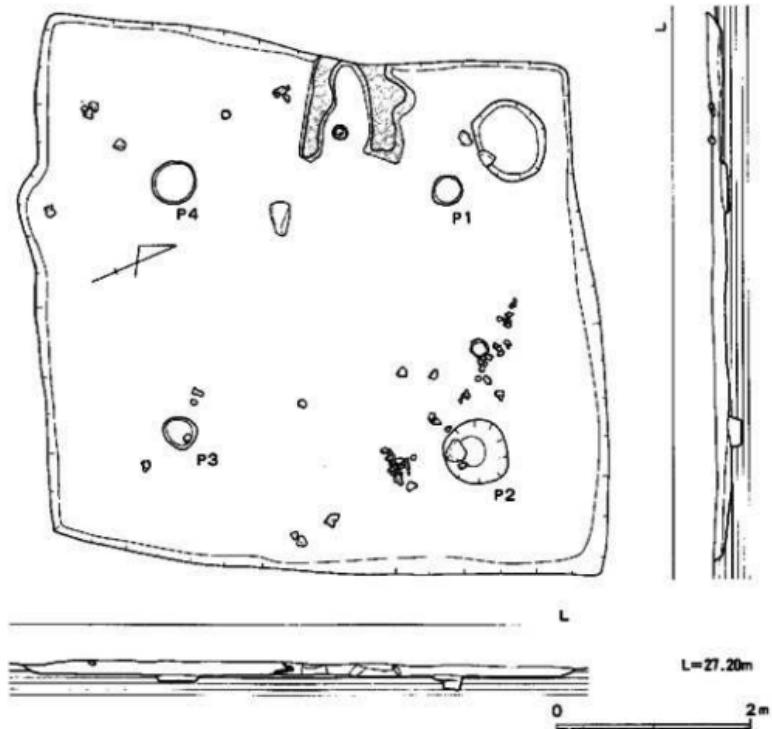
2) 遺構と遺物

(1) 据立柱建物

SB1001 (第12図) 調査区南側で検出した2間×3間の側柱だけの南北棟である。実長は梁行420cm、桁行600cm。柱間寸法は1尺を約30cmとして換算すれば、北梁は13尺を二等分(6.5尺)、桁は20尺を三等分した柱間(実長200cm)となる。ただ南梁の中間柱は1尺ほど西により、また梁柱筋から若干外に出る。柱穴は径25~30cmで、深いもので40cmほど残存する。柱穴からの遺物の出土はないが、埋土と周辺の遺構状況からすれば中世の建物である。

SB1002 (第12図) 調査区中央で検出した1間×1間の建物で、実長は東西200cm、南北263cmをはかる。柱穴は径50~60cm、深さ25cmをはかる。据立柱建物とするよりも堅穴住居が削平され、主柱穴だけが残った可能性が強い。

出土遺物 (第14図001) 土師器高杯。杯部は深く、脚部は筒部をほとんど作らずに開く。外面は刷毛目調整後ナテ消す部分が多い。内面は杯部がナデ、脚部がヘラによる削り。胎土には

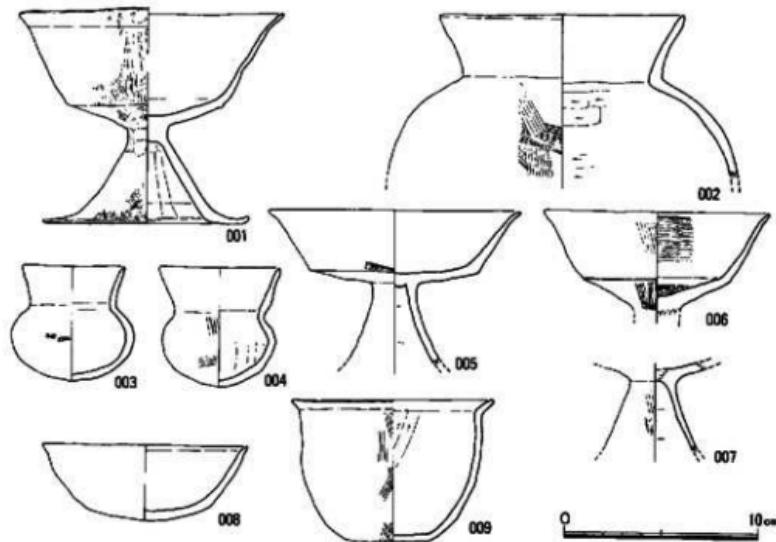


第13図 SC0010実測図(1/80)

砂粒を多く混え、茶褐色を呈する。口径18.0cm、器高4.8cm。東南柱穴からの出土である。

(2) 竪穴住居

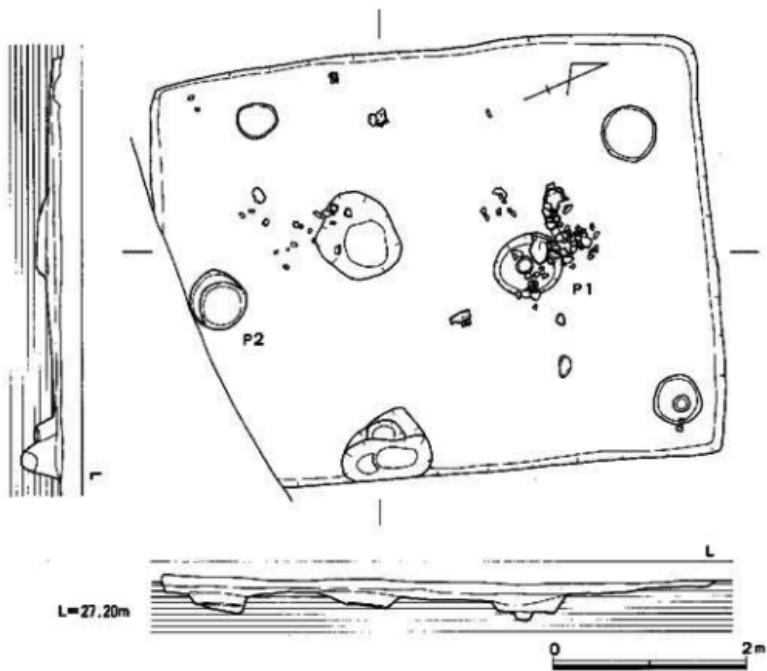
S C 0010 (第13図) S B 1002の東北側で検出した。南北5.80m、東西5.40mと南北にわずかに広い方形の平面形をもつ。床面からの残存壁高は15cm程度である。西壁中央やや北よりに接して竪を設ける。これは幅・奥行きとも1m前後で、粘土を用いて構築している。内部の平面形は瓢形に近く、手前の底には平底鉢が倒置の状態で据えてあった。P 1～P 4のはば正方形に配されたのが主柱穴で、P 1～P 2間2.62m、P 2～P 3間2.98m、P 3～P 4間2.60m、P 4～P 1間2.80mをはかる。柱穴掘方は径30～70cmとばらつきがあるが、床面からの深さは15cm以内と浅い。主柱穴の他、床面西北隅には長さ0.84m、幅0.72m、深さ10cmの楕円形の浅



第14図 SB1002、SC0010出土遺物実測図(1/3)

い上坑がみられる。遺物は竈の南側、南壁下、P 2と、P 3の周辺からおもに出土した。図示したのは床面直上の遺物だけである。

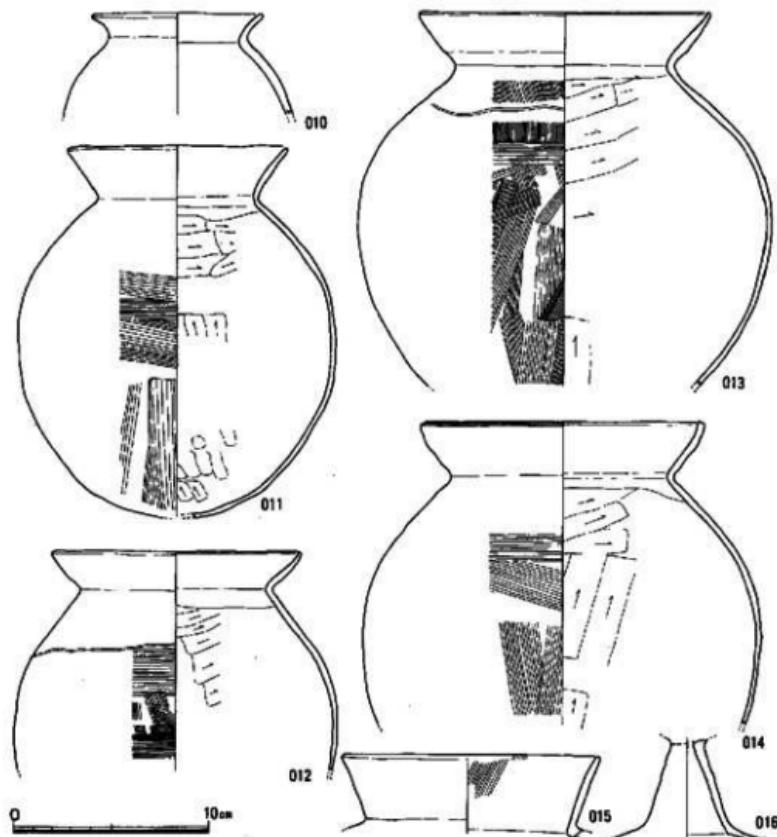
出土遺物（第14図002～009） いずれも土師器である。002は甕。球形の胴部から直線的に口縁部が開く。胴部外面は刷毛目調整、口縁部は内外面とも刷毛目調整の後横ナデで仕上げる。胎土には砂粒を多く混え、焼成良好、淡黄褐色を呈する。復元口径16.6cm。003は口径6.8cm、器高7.4cm、004は口径8.2cm、器高8.1cmの小形丸底壺。ともに圓球形の胴部から口縁部がほぼ直線的に外傾する。胴部外面は刷毛目調整の後横ナデ、胴部は内外面とも横ナデ、胴部内面はヘラ削りの後ナデで仕上げている。胎土は微砂粒を混えた程度の精良なもので、焼成良好、003は灰～黄灰色、004は赤褐色をなす。005～007は高杯。005は復元口径17.2cm。杯部の底が浅く平らとなる。脚部内面がヘラ削り、他はナデで仕上げているが、杯部外面には刷毛目が残る。006は復元口径14.6cm、杯部は深い。内外面とも刷毛目調整の後ナデで仕上げているようであるが、内面には粗い刷毛目痕が残り、とくに内底の調整痕は同心円状となる。二次的な焼成を受けたのか内外面とも煤けた状態になっている。007は脚部片である。いずれの高杯も胎土に砂粒を混え、焼成良好、005は黄褐色、006と007は赤褐色を呈する。008は丸底鉢。口径14.0cm、器高5.2cm。口縁端部がわずかに外反する。外面は刷毛目の後ナデ、内部はナデ調整である。胎土



第15図 SC0011実測図(1/60)

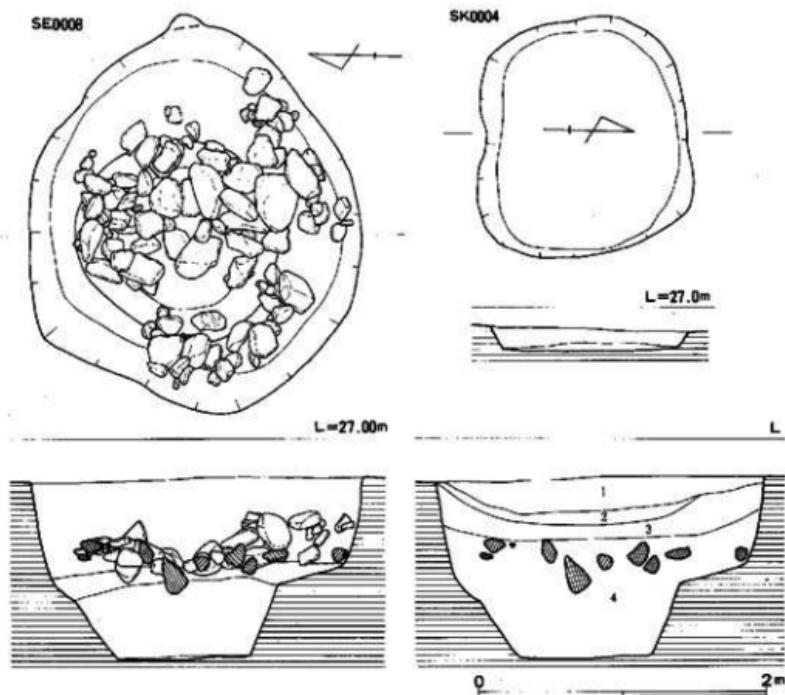
には砂粒を少量混え、焼成良好、赤褐色をなす。O09は口径13.6cm、器高9.8cmの平底鉢。口縁部は短いが大きく胴部から外傾する。外面は刷毛目調整、内面は削り。ただ二次焼成を受け外表の剥離が著しい。胎土には砂粒を多く混え、焼成良好、外面黄灰色、内面黄褐色を呈する。いわゆる韓式系土器の類である。

SC0011 (第15図) SC0010の北側で検出した。南北5.73m、東西4.36mの長方形をなす。床面からの残存壁高は北壁下で6cm、南壁下では4cm以下しかなく、東南隅部分壁周は構に切られたこともあり確認できなかった。床面中央南寄りに径90cm、深さ13cmの不整円形の炉があり、それを挟むようにして2主柱穴がある。主柱穴間は3.20mで、炉はその軸線からは西に寄る。また2主柱穴自体が、窓穴の南寄りに作られている。柱穴の径は60~70cm、深さ20cm。東壁下中央南寄りには南北幅0.91m、東西幅0.72mの底に凹凸がある土坑状遺構がある。また東南隅を除く三隅にはピットがある。東北隅ピットが深さ30cm、他は10cm以下の深さにとどまる。遺物は炉及び北側主柱穴の周辺から出土した。



第16図 SC0011出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第16図） いずれも土器である。010～014は甕。010は復元口径13.2cm。張りの小さい胸部から口縁部が丸みをもって外反する。外面はタタキの後細かい刷毛目調整を加えている。内面はナデで仕上げている。胎土には砂粒を混え、焼成良好、赤褐色を呈する。011～014は布留式系甕。011は口縁部が直線的に外傾し、端部は角張る。012～014はいずれも口縁部が内湾気味に外傾するが、口縁端部の処理には違いがある。また013・014の胸部は球形に近くなる。器面調整はほぼ同一で、胸部外面が刷毛目、内面がヘラ削り、口縁部は横ナデとなっている。012と013の肩部には沈線が巡るが、全周はしない。いずれも胎土に砂粒を混え、焼成良好、011

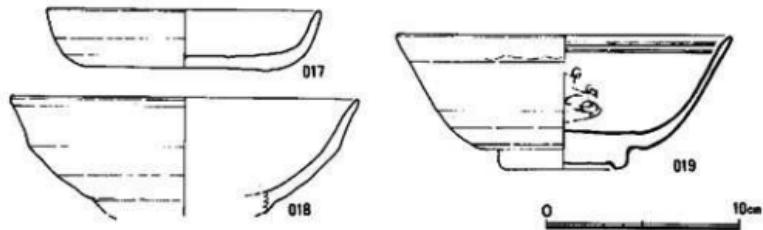


第17図 SE0008,SK0004実測図(1/40)

が明赤褐色、012が黄褐色、他は黄灰色を呈する。011の復元口径14.6cm、器高25.6cm。015は口縁部で、張りのある肩部から口縁部が、直線的に立ちあがっている。球形の胴部をもった壺であろうか。外面ともナデで仕上げるが、内面の一部には刷毛目が残る。016は高环脚部片。器壁が比較的薄く、焼成も良い。

(3) 井戸

S E 0008 (第17図) 調査区南側、S B 1001のすぐ北で検出した。上面東西幅2.65m、南北幅2.27mのほぼ円形を呈する。深さ60cm付近でいったん平坦面を作つて径1.40mとなり、深0.90mの底面にいたる。上面からの深さ1.23m。覆土は上層から1灰褐色土、2暗黄灰色土、3明黄灰色土、4褐色粘質土で、1と2には炭化物が混じっている。4の上面すなわち平坦面上には大小礫がみられた。この平坦面は地山が、黄褐色土から礫に変わつた部分に位置している。井戸内に特に施設は認められず、素掘りと考えられる。現状でも湧水が認められた。



第18図 SE0008出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第18図） 017は土師器皿。口径14.0cm、器高3.0cm。糸切り底で、板状圧痕が残る。018は瓦器碗。復元口径17.8cm。外面体部下半は灰色、それ以外は黒褐色を呈する。019は龍泉窯系青磁碗I類。口径17.4cm、器高6.9cm。胎は灰色で、気泡が多い。釉は全面にかけられ、高台内側だけを搔き取る。オリーブ色に発色する。

(4) 土坑

S K0004（第17図） 調査区西南隅付近で検出した。長さ1.62m、幅1.44mの東西にやや長い楕円形の土坑で、深さは15cm。覆土は暗灰褐色砂質土。糸切り底の土師器皿などの細片少量が出土した。

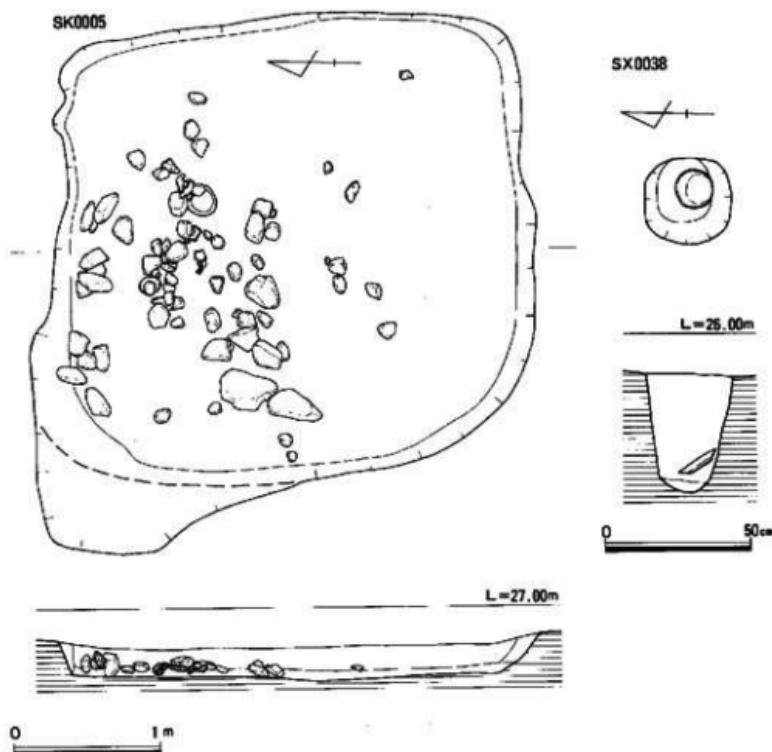
S K0005（第19図） S K0004の東北側で検出。南北幅3.12m、東西幅3.20mのほぼ正方形を呈する。ただ西南隅は丸みをもち、西北隅は地山の礫層にあたり土坑壁が不明瞭となっている。底面は平坦で、その北側に疊と遺物が広がる。ピットなどはみられない。覆土は黄褐色土ブロックの混じりの暗灰褐色土。図示しなかったが、土師器甕・壺・皿、白磁碗IV・V類、龍泉窯系青磁碗I類、褐釉陶器水注などの破片が出土した。土師器壺と皿は糸切り底で、板状圧痕が認められるものもある。

S K0006 S B1001の南側で重複する土坑である。切り合いの先後関係は確認できなかった。南北幅2.43mの隅丸方形状の土坑で、深さ20cm。西南隅は西側に張り出す。覆土は暗灰褐色砂質土。土師器甕、糸切り底で板状圧痕のある皿などの細片少量が、炭などとともに出土した。

S K0007 S B1001東側段落ち部分で検出した。円形状の土坑であるが、半分以上が段落ち（旧河川）により破壊されている。底はすり鉢状で、深さ22cm。土師器の細片が数点出土したにとどまる。

S K0031 S E0008の西側で検出した長さ1.01m、幅0.51mの楕円形土坑。坑内は2段掘りとなり、深さ20cm。覆土は上部が暗灰褐色土、下部が黄褐色土となる。出土遺物はない。

S K0032 S E0008の西側で切られた長方形状の土坑である。南北長1.30m、深さ16cm。覆



第19図 SK0005、SX0038実測図(1/40,1/20)

土は砂混じりの暗灰褐色土。出土遺物はない。

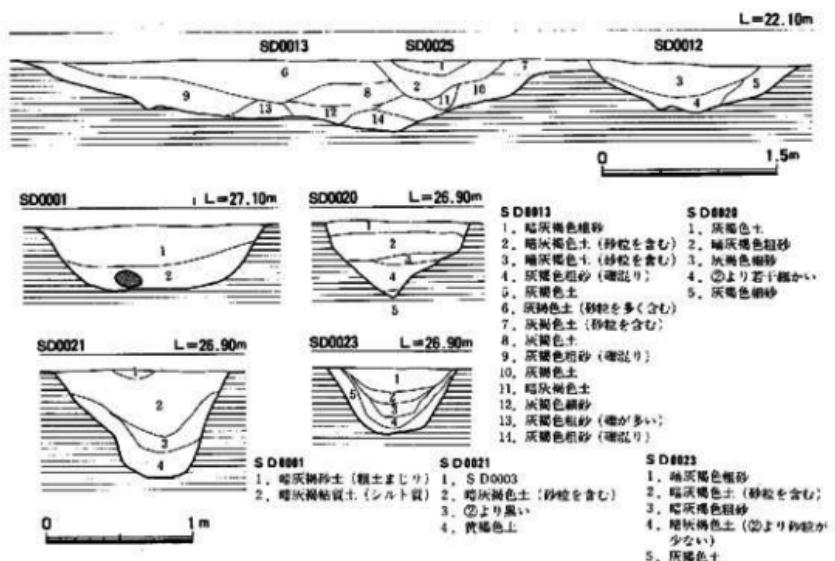
S K0033 調査区南端近くで検出した長さ2.96m、幅0.50m前後の隅丸長方形の土坑である。

深さは20cm。覆土は上部が暗灰褐色土、下部が黄褐色土となる。出土遺物はない。

S K0034 S K0033の北で検出した南北長1.20m、東西幅0.94mの不整楕円形の土坑である。深さ13cm。底面には地山の礫が露出する。覆土はS K0033と同じ。出土遺物もない。

(5) 溝

S D0001 (第20図) 調査区西北隅を西南から東北方向に向かう溝で、約5mを確認した。幅1.0m、深さ46cm。出土遺物はない。自然流路か。



第20図 SD0001・0012・0013・0020・0021・0023・0025土層断面実測図(1/40、1/50)

S D 0002 調査区東北をほぼ南北に走る幅0.25m、深さ5cm程度の小溝。全長6.57m。弥生土器、土師器の細片が出土したが、覆土は灰色砂質土で、近世以降の溝と考えられる。

S D 0003 S D 0002の西側を並行して走る南北溝。全長13.47m。溝幅、深さ、覆土はS D 0002と変わることろがない。出土遺物はないが、近世以降のものである。

S D 0012・0013・0014 (第20図) 便宜的に三つの造構番号をつけたが、これは北流する小河川が二時期に分かれて流れた跡である。すなわち西南側のは新旧2時期の同じ河道をS D 0014とし、中央部で分かれて北流する旧河道をS D 0013、東流する新河道をS D 0012とした。S D 0014部分には後にS D 0025・0030も切り込んでいるが、これらを分別するのは困難であった。出土遺物からすると旧河道は縄文晚期終末、新河道は弥生中期頃。ともに古墳時代に入るまでには埋没していたと考えられる。なお0013の分歧点以北は未掘のままにした。

S D 0019 調査区北側を南北に走る小溝である。南側はS D 0026と交わり終る。溝幅0.50m前後、深さ10cm程度。覆土は暗灰褐色土。北側部分で土師器高杯3個体をほぼ完形で検出した(図版7-2)が、盗難にあった。おそらく祭祀遺物で、それからみればこの溝は四世紀代のものと考えられる。

S D 0020 (第20図) 調査区中央西側から北北東方向へ一直線に延びる溝である。幅1.00~1.30m、深さ50cm前後。溝断面は逆三角形に近い。S D 0021、0026に切られている。出土したのは少量の夜臼式土器と石斧だけである。

S D 0021 (第20図) 調査区北側東縁から北北西に湾曲しながら延びる溝である。溝幅は1.00~1.40m。断面は逆台形を呈し、深さ75cm前後。S D 0002、0003に切られ、S D 0020、0022、0025、0028を切る。縄文、弥生土器も若干出土しているが、布留式系統の斐・高环などが主体で、四世紀代の流路と考えられる。

S D 0022 調査区北側のS D 0026から北にやや蛇行気味に走り、北端部近くで終わる小溝である。西側のS D 0019とは平行する。幅0.80m、深さ10cm程度。覆土は暗灰褐色粗砂。布留式系統など土師器片が少量出土した。

S D 0023 (第20図) 調査区北東隅を湾流する幅1.00m前後の溝である。深さは45cm、断面形はU字形状。弥生時代中期斐片・黒曜石が出土したにとどまる。

S D 0025 (第20図) 調査区中央西縁から北東方向へ蛇行する溝。幅0.80~1.20m、深さ30cm前後。弥生時代中期土器少量と石斧片が出土した。

S D 0026 調査区北側を東西に走る小溝である。幅0.20~0.40m、深さ10cm前後。さきに述べたようにS D 0019、0022はこの溝から北東へ延びて、長方形状の区画を作るが、この溝からの出土遺物は七世紀代の須恵器と土師器片で時期が他の二つの溝と合わない。

S D 0027 調査区西側を南北方向に続く近世以降の溝。幅0.20m前後。深さは10cm未満で、両側部分では途切れるところが數ヶ所ある。

S D 0028 調査区中央でS D 0012から分流し、西側のS D 0025と平行するように北東方向に走る。幅0.90~1.00m、深さ40cm前後。断面形は逆台形状で、覆土は暗灰褐色砂質土。弥生時代の流路と考えられる。

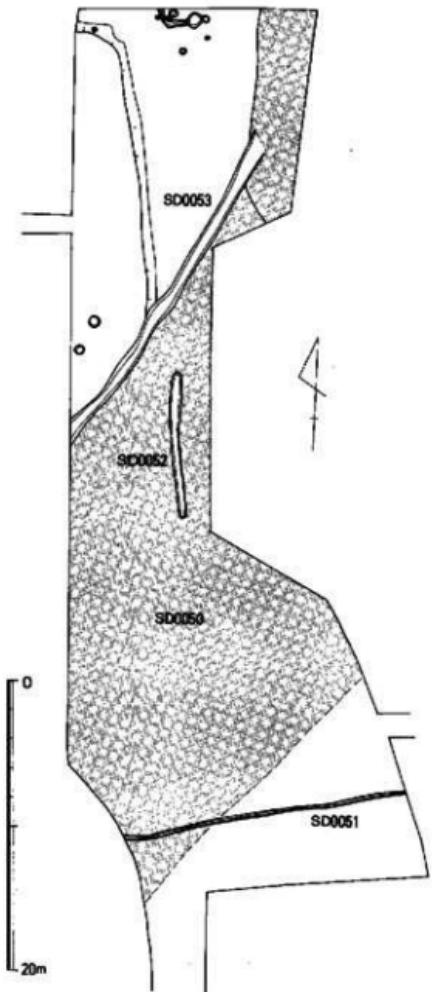
S D 0030 調査区中央を西南一北東に走る溝。幅0.30~0.50m、深さ20cm前後。覆土は暗灰褐色土。西南側でS D 0012を切る。

(6) その他の遺構

S X 0038 (第9図) 調査区南側、S K 0005の北側で検出したピットである。径30cm、深さ40cmで、底より7cmほど浮いて、土師器皿が斜めに埋まっていた。祭祀的な意味合いをもつ埋納であろう。S K 0005との間、約2.4m南に同じ様なピットがあり、対となってなんらかの構築物となるものか。図示しなかったが、土師器皿は口径14.5~15.0cm、器高3.0cm。底部は糸切りで、板状压痕が残る。

3 2区の調査

2区は1区の水路を隔てた南側に位置する。その水路は2区の西側を通り、水路の向こうは



第21図 清末遺跡群2区調査全体図(1/400)

4区となる。調査の対象は道路など構造物が主であるが、切土の田面も一部あつた。調査面積846.8m²。検出した遺構はきわめて少ない。個々の遺構についてほんと述べることがないので、この調査区の概観をまとめて記することにする。なお第21図は紙幅の関係上南端部を省略している。

調査区は耕作土下が黄褐色土の遺構面となっている。遺構は北端部分で1区からの続きと考えられる中世のピット群が、また南端部で中世以降の土坑2基(S K 0058, 0059)がある。中央部は旧河川と中世以降の溝3条があるにとどまる。旧河川(S D 0050)は西南方向からやや北寄りに方向を変えて走る幅約27m、深さ約1mのもので、1区の東側の段落ちを左岸の肩とし、さらに北方向に続く。トレンチで確認したにとどまるが、古墳時代前期の土器が川底にみられた。調査区内でこの河川の左岸に沿って走るS D 0053および長さ10mの南北溝のS D 0052はともに旧河川の埋没後のものである。このふたつは中世の溝である。南側を東西に走るS D 0051は近世以降の小溝である。

調査区北側の西側部分には水田造成時のものと考えられる段がついているが、西北隅で西に折れる。水路のため北側への拡張ができなかつたが、3区の南側で南北に走る大溝(S D 0060)から分かれ、東側に向かった溝の南肩がこの段落ちである可能性も求められる。

4 3区の調査

1) 概要

3区は道路及び用・排水路の構造物について調査を行った。耕作土直下の黄褐色土で遺構を検出した。標高は北端で26.9m、南端で27.4mを測る。検出遺構は溝・井戸・土坑・ピットである。特にS D0060は、条里地割に沿うもので調査区内を南北に走る大溝である。出土遺物の大半が中世に属する土師器・陶磁器等であり、東隣する1区、2区の調査地点とは様相を異なる。また井戸・土坑は調査区北側に偏って検出され本調査区の北西部あたりにも集落の存在が考えられる。

2) 遺構と遺物

(1) 井戸

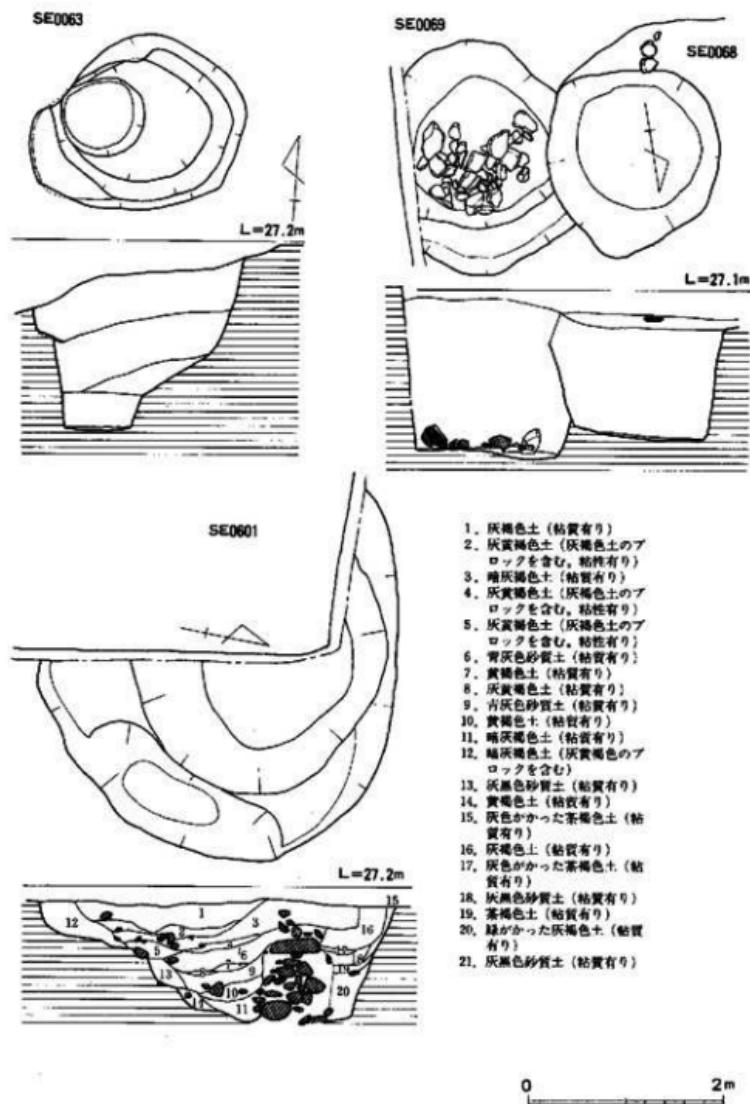
S E0063(第22図) 調査区北端部でS D0060を切って検出された。平面略円形を呈し、長径2.2m、短径1.8m、深さ1.8mを測る。東側に一段緩斜面を有し、径80cm、深さ40cmの二段目を掘り込む。二段目は掌大～人頭大の礫を多数含んだ黄褐色土層まで掘りこまれており、見かけは石組みと同様の状況を呈している。土層は水平に堆積する。出土遺物には土師器・須恵器・陶磁器がみられるが、いずれも細片が多く、総量も少ない。埋土上層より白磁水注が出土する。

出土遺物(第23図020～022) 020は土師器壊である。口径17.8cm、底径10cm、器高3.5cmを測る。外底面は糸切りで板状圧痕を有す。内底面には指ナデを施す。021は龍泉窯系青磁碗である。底径5.8cmを測る。茶味を帯びた緑色を呈し、高台付及び外底面は露胎である。内面に草花文を有す。022は白磁の水注である。把手部は欠失するが、片側2個の耳を有する。口径20.8cm、底径10.2cm、最大径29cm、器高25cmを測る。露胎・上げ底の外底部より体部はややすんぐりと膨らみ、口縁部へすばまる。全体に焼きぶくらみがみられる。色調緑白色を呈す。

S E0068(第22図) 調査区北側で検出した。S E0069を切る井戸である。上面径2.2m、底面径1.1m、深さ1.3mを測り円筒形を呈する。土師器・瓦器・陶磁器・石鍋の破片が出土した。

出土遺物(第23図023～034) 023～028は土師器皿である。口径8.6cm～10.2cm、底径7cm～8cm、器高0.9cm～1cmを測る。色調は023～027が明橙色、028が淡褐色を呈す。胎土は精良である。いずれも外底面は回転糸切りを施し板状圧痕を有す。029～033は土師器壊である。口径15cm～16cm、底径11cm～13cm、器高2.4cm～3cmを測る。いずれも外底面回転糸切り、板状圧痕を残す。034は瓦器壊である。口径17cm、底径7cm、器高5.4cmを測る。内厚の体部から底部は薄く仕上げ、高台を貼付ける。体部外面が一部淡桃褐色を呈す。

S E0069(第22図) S E0068に切られる井戸である。上面径2.4m、底面径1.6m、深さ1.6mを測る。S E0068同様円筒形を呈する。北側に一段テラスを有し、二段目の上面径1.8m、深さ1mを測る。底面は平坦で、掌大～人頭大の礫が検出された。土師器・瓦器・陶磁器が少量出土した。



第22図 清末遺跡群 3区 SE0063・0068・0069・0601実測図(1/60)

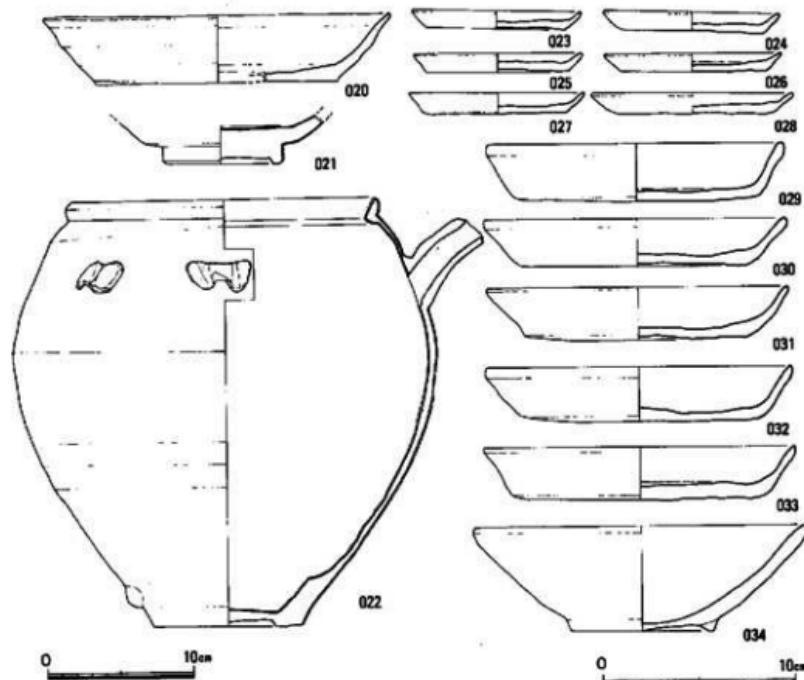
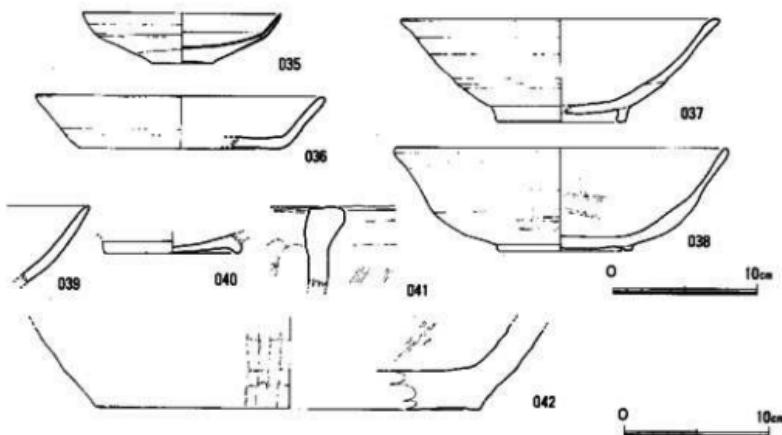


図23 図 SE0063・0068出土遺物実測図(1/3,1/4)

出土遺物（第24図035～038） 035は白磁皿である。黄白色の釉を体部中位までかける。036は土師器壺である。口径14.9cm、底径10.4cm、器高2.7cmを測る。外底面は回転糸切り、板状压痕を有し、口縁部は若干外反気味にのびる。また内底面には指ナデが施される。胎土には径1mm以下の白色砂粒・雲母を含む。明淡赤褐色を呈し焼成は良好である。037・038は瓦器壺である。口径18.6cm・17cm、底径6.8cm・7cm、器高6.4cm・5.4cmをそれぞれ測る。037は丸みを帯びながら延びる体部に口縁部は若干外方へ開く。高台もやや高く内側にすばまる。038は体部中位で屈曲し、外反しながら口縁端へ伸びる。体部には内外面に机い横位のミガキが施される。内面及び外面上半は淡黒褐色、下面下半は灰白色を呈す。

S E 0601（第22図） 調査区北側に位置する。西側半分は調査区外に伸びる。径3.5m、深さ1.2m以上を測る。南側に一段テラスを有し、二段目上径2.3mを測る。井筒部は掘り方北側に寄り、周囲を版築状に固定している。また井筒部埋土中には人頭大の礫が多数検出され



第24図 SE0069・0601出土遺物実測図(1/3,1/4)

た。廐棄に伴う人為的な投棄の可能性が考えられる。出土遺物は、糸切り、板状圧痕を有す土師器皿、壺、瓦器、陶磁器、石鍋等の破片があるが、総量は少ない。

出土遺物（第24図039～042） 039・040は瓦器塊である。039は口縁端内外面が幅1cm程淡黒色、他は淡灰白色を呈す。040は底径6.8cmを測る。いずれも胎土は精良、焼成良好である。041は土鍋口縁部破片である。平坦な口縁部に外端面を肥厚させる。外面は口縁下指おさえ、体部に粗い縦ハケ、内面は横ハケの後指おさえによる調整を施す。外面黒褐色、内面ベージュ色を呈す。胎土には径1～2mmの石英砂粒及び雲母を割合多く混入する。042は石鍋。底部破片である。底部は厚手でやや湾曲気味に体部が伸びる。外面に細かい単位の削りを施し、内面には斜め方向のノミ痕が残る。外面全体に煤が付着する。

(2) 上 坑

S K 0061 調査区北側に位置する。S D 0060の西側にとりつく不整形の上坑で底面が平坦、深さ0.5mを測る。切り合ひは不明である。

出土遺物（第26図043） 白磁V類碗の底部である。高台外面の一部から外底面は露胎である。内底面に鶴状工具による花文が描かれる。また外底面にはひらがなの“と”に似る墨書きがみえる。

S K 0062（第25図） 調査区北側 S K 0062の北に位置する。西側半分が調査区外に伸びる。径2.4m、深さ1.5mを測る。北側に一段、南段に二段の平坦面をもち、階段状を呈する。基底面は平坦で径0.4mを測る。底より若干浮いて土師器の壺が出土した。

出土遺物（第26図044～047） 044は土師器杯である。口径15.6cm、底径11.6cm、器高2.4cmを測る。外底面は回転糸切り、板状圧痕を有し、内底面にはナデが残る。胎土には雲母が多く含み、淡茶褐色を呈す。焼成は良好である。045～047は瓦器碗である。045は口径16cmを測る。径1mmほどの白色砂粒を多く含む。焼成があまく、磨滅が進行するが、内面に一部横位のミガキが認められる。046は口径16.7cmを測る。口縁部は肉厚で、内湾しながら端部に至る。体部内、外面に粗い横位のミガキを施す。047は口径17cm、器高6cmを測る。明晰な屈曲部を持たず、体部全体が緩やかに内湾する。体外面中位には板状工具の小口痕跡が全周に残る。色調は内面及び外面上部1/3程が黒褐色、体部中位が白色、以下外底面浅灰色を呈す。また体外部及び外底面にそれぞれ“X”的ヘラ記号が認められる。

S K 0066（第25図） 調査区北側 SD0060西側斜面より掘り込まれる。上面径1.4m、底径0.6m、深さ1.1mを測る。基底面は砂礫層まで掘り込まれており井戸の可能性も考えられる。遺物の出土はほとんどみられなかった。

S K 0067 調査区北側に位置する。幅2.5m、深さ0.3mを測る。床面より浮いて挙大～人頭大的礫が投棄される。断面环状を呈す。

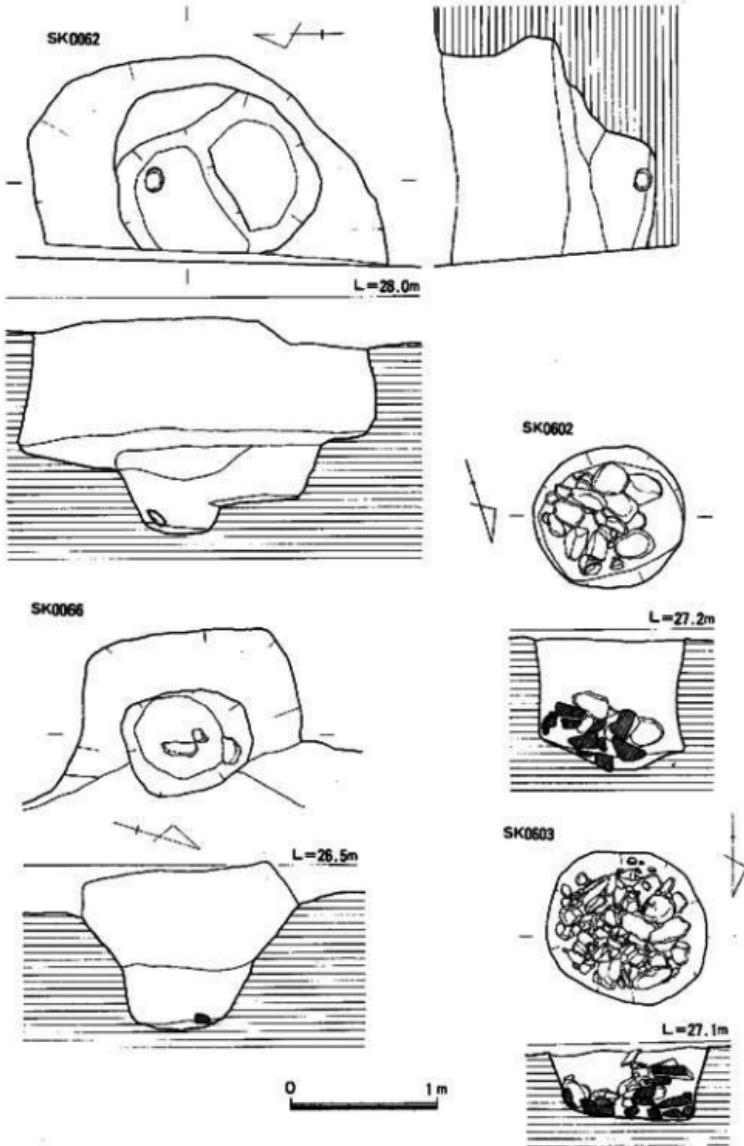
出土遺物（第26図048・049） 瓦器碗である。048は口径17cm、底径7.2cm、器高5.3cmを測る。体部中位で屈曲し、口縁端部はやや丸みを帯びる。胎土は良好、焼成はやや不良で口縁部が若干歪む、色調は淡黄褐色を呈す。049は口径16.9cm、底径8cm、器高5.1cmを測る。体部器壁は割合厚い。内・外に粗い横位のミガキを施す。色調は全体に淡黒色を呈している。

S K 0602（第25図） 調査区北西部に位置する。径1.0m、深さ0.85mを測る円形の土坑である。掘り方は礫層まで至っていない。埋土下層には挙大～人頭人の礫を充填している。土師器・瓦器・白磁・石鍋の破片が少量出土する。

出土遺物（第26図050） 土師器環である。口径13.4cm、底径9.6cm、器高3.5cmを測る。外底面には回転糸切り、板状圧痕を有する。胎土には白色微粒、雲母を含む。焼成良好で褐色を呈す。

S K 0603（第25図） 調査区北西部に位置する。径2.1m、深さ1.1mを測る。断面円筒形を呈す。埋土は灰褐色粘質土で、S K 0602同様下層に礫を充填する。出土遺物には土師器・瓦器・黒色土器・陶磁器（白磁）・石鍋がある。

出土遺物（第26図051～054） 051は土師器環である。口径14.8cm、底径12cm、器高2.1cmを測る。焼成は不良で器面の磨滅が進む。胎土には径1mm程の白色砂粒を含む。色調明黄褐色を呈す。052は瓦器塊底部である。底径8.2cmを測る。底面に断面三角形の高台を貼付ける。色調は内面淡黒灰色、外面淡褐色を呈す。053は黒色土器A類である。丸みを帯びた体部にやや外方に張り出す高台を貼付ける。内面黒色を呈し、横位のヘラミガキを施す。外面は淡赤褐色を呈す。胎土は良好である。054は陶器の体である。屈曲部よりやや内湾して口縁部に至る。端部は



第25図 SK0062・0066・0602・0603実測図(1/40)

内面に突出した断面三角形を呈す。色調は外面が黄味を帯びた灰色、内面は茶色が強く発色する。胎土は密である。

S K0604 調査区北西部に位置する。径1.7m、底径1m、深さ0.3mを測る。西側に一段平坦面を有する。埋土は暗灰褐色粘質土で小礫を含む。

出土遺物（第26図055） 青磁皿である。やや上部底の底部はかき取られ露胎となる。胎土は緻密で灰白色を呈す。胎は薄く淡緑色を呈すガラス質のものである。内底面に櫛状工具による波状文が施される。また外底面には判読不能であるが墨書きが認められる。

S K0606 S K0604の東側に位置する。調査区内で長径2m、深さ30cmを測る。東西に一段テラスを有す。二段目径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物（第26図056） 口禿げの白磁の皿である。平らな底部よりほぼ直線的に口縁部外方に立ちあがる。口縁端部内、外面は露胎で釉調は空色を帯びた白色を呈す。内底面にはヘラと櫛を用いた花文が施される。

S K0608 調査区北西部に位置する。S K0601につながる落ち込みである。東側に向かって緩やかに深くなり、最深部で深さ30cmを測る。

出土遺物（第26図057） 同安窯系青磁碗である。底部は内厚であり、底径5.4cmを測る。体外面に片影りの沈線を施し、内底見込みは段を持つ。体外面下半より露胎であり胎土は黄白色で、釉調は淡い黄緑色を呈す。

S K0609 調査区北西部に位置する。径1m、深さ0.3mを測る。円形土坑である。東側に一段平坦面を持ち、底部は平坦である。埋土は灰褐色粘質土を呈し拳大程の礫を混える。

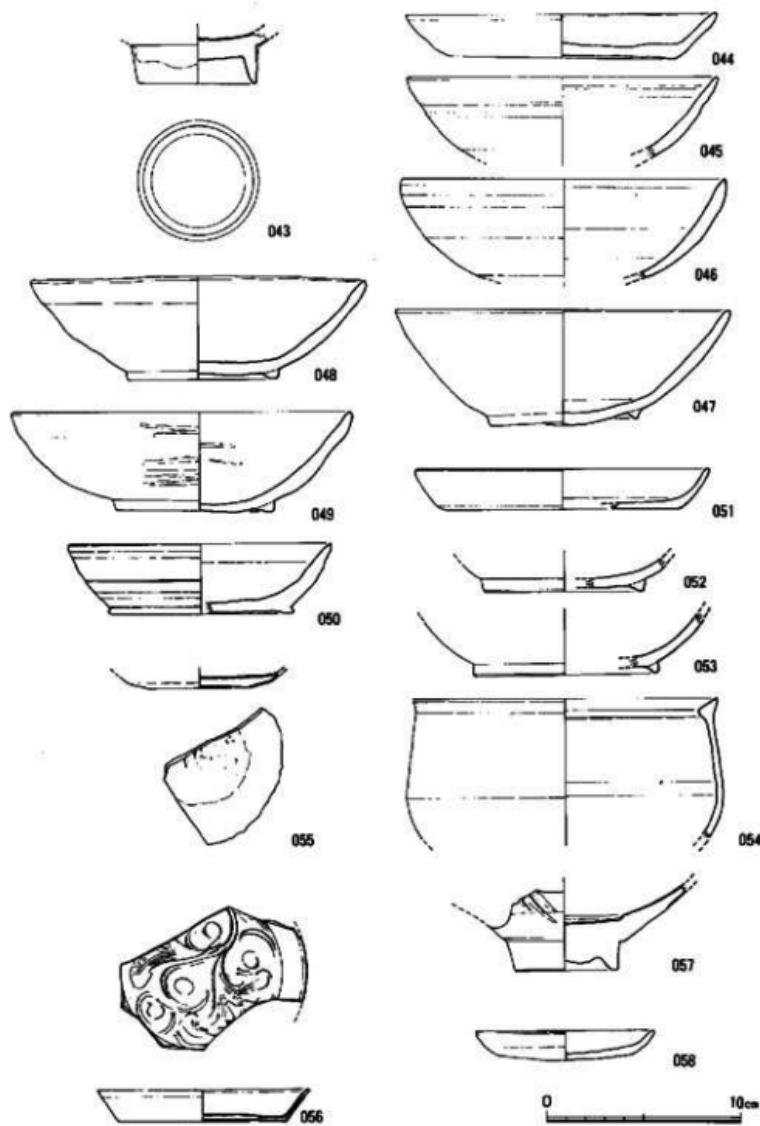
出土遺物（第26図058） 土師器小皿である。口径9.2cm、底径6.8cm、器高1.5cmを測る。外底面は回転糸切りで板状圧痕を有す。

(3) 溝

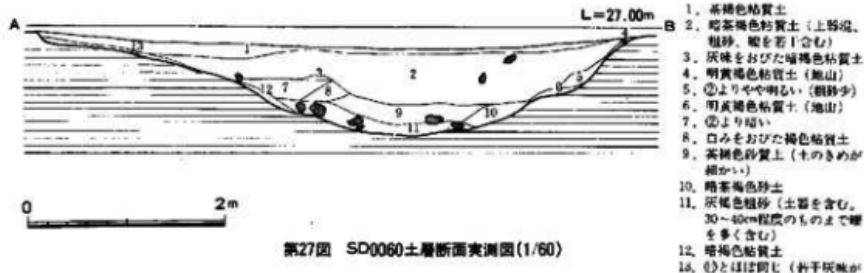
S D0060 (第27図) 調査区に沿い南北に流れる大溝である。(現存する条里地割に添い、主軸はN-5°-Wをとる。) 幅6~7m、深さ0.8~1.2mを測る。断面皿状を呈し土層はレンズ状に堆積する。上層は暗茶褐色土を主体とする。最下層には拳大礫を含む粗砂層が堆積しており開削流水のあったことがうかがわれる。また調査区中央付近で東西に流れる溝と合流している。この溝は4-2区において南側肩が検出されており、貞島川へつながるものと思われる。

出土遺物には土師器、瓦器、陶磁器、石鍋等がある。陶磁器は龍泉窯系の箇蓮弁をもつもの、及び白磁V類が主体となる。一部に口禿げの白磁も出土する。

出土遺物（第28・29・30図） 059~075は土師器である。059~063は小皿である。059は小皿bで口径6.8cm、底径5.6cm、器高1.4cmを測る。060~063は小皿aである。062は底部ヘラ切り調整、残りは糸切りで板状圧痕をもつものである。060~061~063は口径8.8~10cm、器高1.2~1.8cmを測る。064~075は杯である。口径11.8~16.3cm、底径8~11cm、器高2.2~3.6cmを測る。



第26図 SK0061・0062・0067・0602・0603・0604・0606・0608・0609出土遺物実測図(1/3)



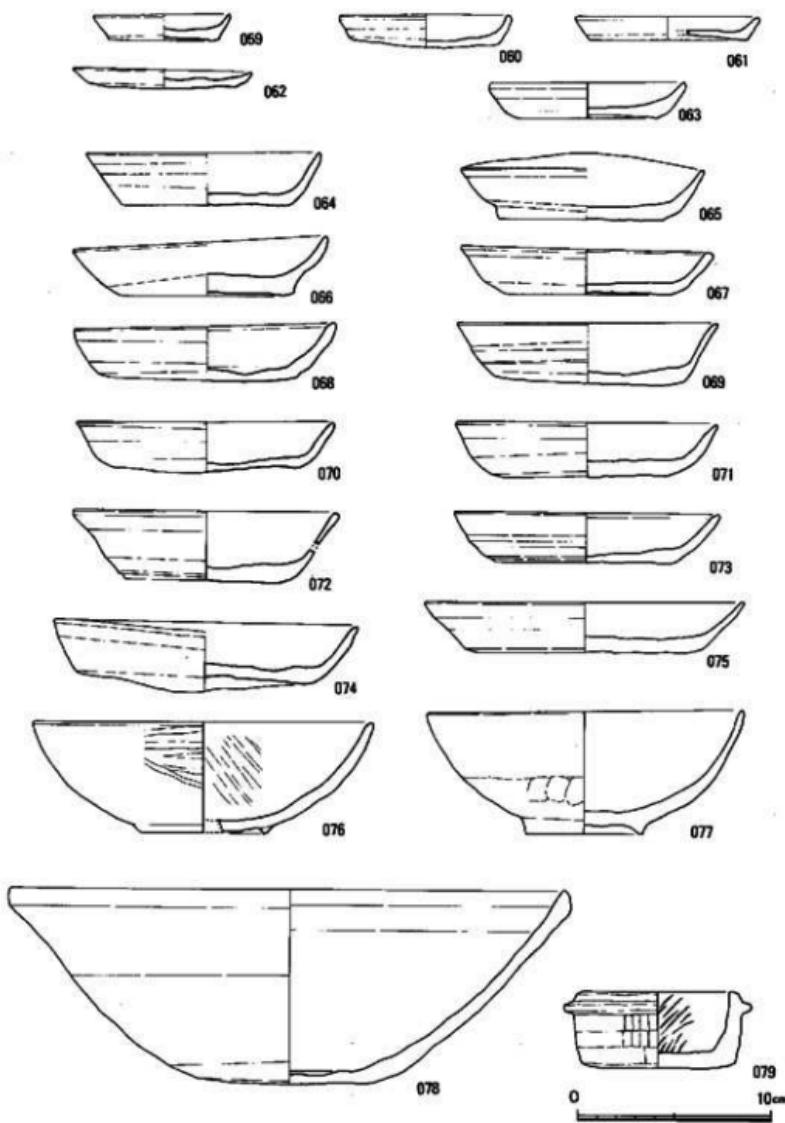
色調は淡褐色～淡赤褐色を呈す。大半が底部糸切りで板状圧痕をもつ。064・067は板状圧痕を持たない。076・077は瓦器壺である。076は口径17.4cm、器高5.6cmを測る。内面右斜方、外面横方向の粗いミガキを施す。外面～口唇内面まで淡黒色、内面は黄味を帯びた白色を呈す。077は口径16cm、器高6.4cmを測る。内面には横方向の粗いミガキを施し、外面は体部上半が回転ナデ、下半には指オサエを施す。

078は瓦質のこね鉢である。口径28.1cm、器高10cmを測る。体部と底部の境にヘラケズリを施し、体部はほぼ直ぐ外方に伸びる。口縁端部は玉縁状を呈す。図示していないが、片口の一部が残存する。口縁端部黒灰色、それ以外は白色を呈する。

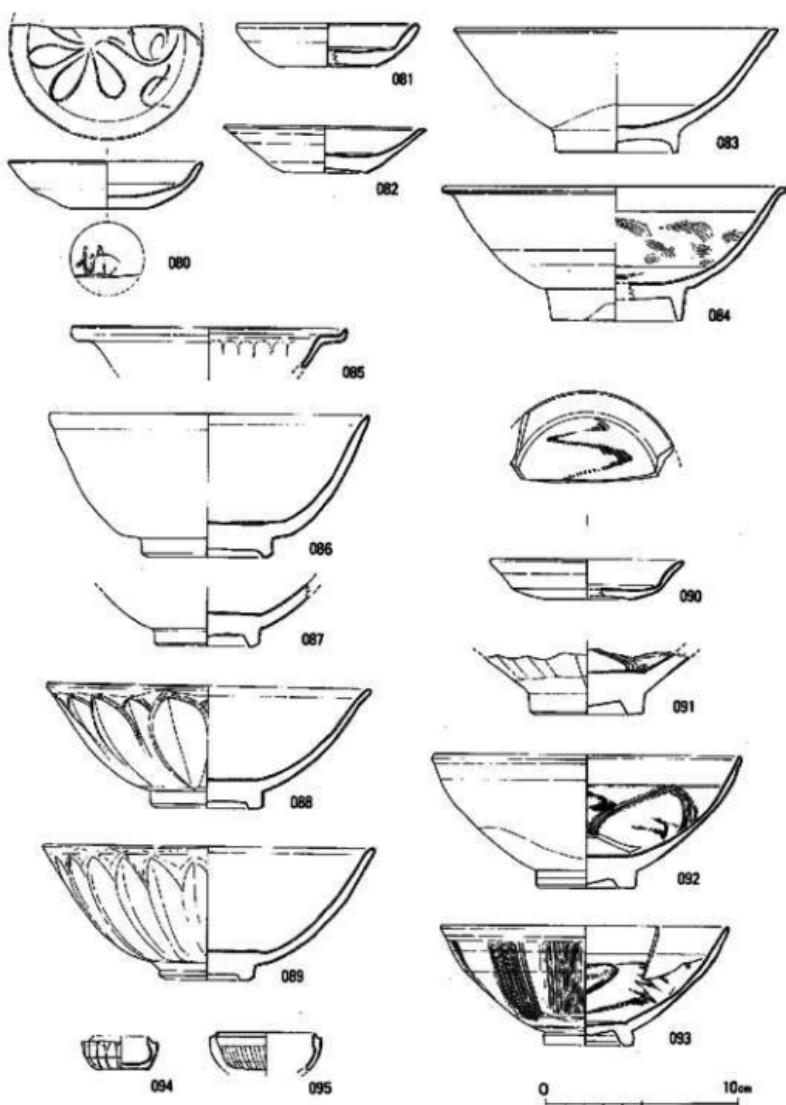
079は滑石製小型石鍋である。口径7.4cm、器高3.9cmを測る。口縁下に鍔をめぐらせる。外面には削りを施し、内面には斜め方向のノミ痕が残る。底部及び体外面には煤が付着しており、実際に使用されたことをうかがわせる。

080～095は磁器である。080～084は白磁である。080～082は皿でいずれも外底面が露胎である。082は口径9.9cm、器高3.8cmを測る。内底見込みには草花文を施す。又外底面には判読できていないが墨書きを有す。082は口径10.5cm、底径4.2cmを測る。上げ底気味の肉厚の底部より体部は外反氣味に開く。083・084は碗である。083は口径16.4cm、器高6.4cmを測る。口唇部を外反させ、端部は丸く收める。内底見込みに浅い沈線をめぐらせる。灰白色釉を高台脇まで施す。084は口径17.5cm、底径6.7cm、器高6.9cmを測る。細く直立する高台を有し、口縁端部は外反させ、水平な端面を作る。内面上部と見込み部分に浅い沈線状の段をもち、内面全体に櫛状工具による花文を施す。釉は灰白色を呈し高台外面まで施される。

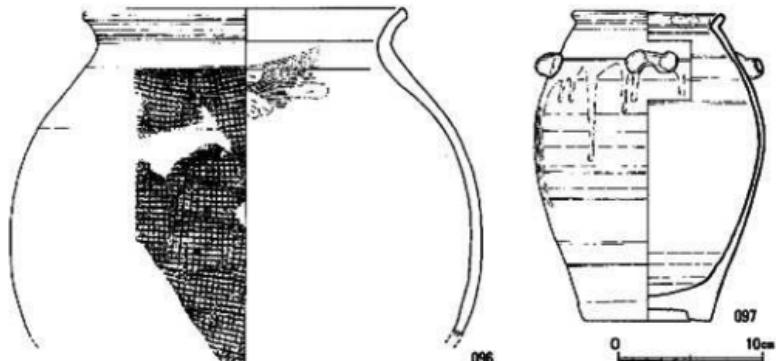
085～093は青磁である。085～089は龍泉窯系、085は坏である。口縁部を一旦外反させ直上に引き出す。胎土は灰白色で緻密である。釉調は濃緑色を呈す。086～089は碗である。086は内外面無文のものである。口径16.4cm、器高7.3cmを測る。内底見込み部に段をつける。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が若干外反する。胎土は灰白色。釉は外底部の一部まで施されており明緑色を呈す。087～089は体外面に蓮弁を施すものである。091は鍋を持たない蓮弁を有す。



第28図 SD0050出土遺物実測図1(1/3)



第29図 SCD0060出土遺物実測図2(1/3)



第30図 SD0060出土遺物実測図3(1/4)

底径5.4cmを測る。軸は高台外面まで施され濃緑色を呈す。088、089は鍍蓮弁を持つ。088は口径16.6cm、底径5.5cm、器高6.3cmを測る。口縁端を若干外反させ丸く收める。高台外面までくすんだ緑色の軸が施される。089は口径17cm、底径4.4cm、器高6.8cmを測る。088より細身の蓮弁が施される。088同様のくすんだ緑色の軸がかかる。

090～093は同安窯系である。090は皿で口径10cm、器高2cmを測る。外底面は上げ底で露胎となる。内底面に模描文が施される。091～093は碗である。093は外面に片彫りの沈線、内面に模状工具による花文を施す。軸は高台脇までかけられ、黄味をおびた淡緑色を呈す。092は口径16cm、器高6.8cmを測る。丸みをおびた薄手の体部に若干肥厚する口縁端を有す。外面無文で内面に花文を施す。軸調は空色がかった淡黄緑色を呈し、体部下半より露胎である。093は口径14.8cm、器高6.6cmを測る。外面に模目、内面に花文を有する。器壁は全体に薄手で胎土は灰色を呈す。軸は薄くかけられ、体部下半より露胎である。軸調は淡い空色である。

094・095は青白磁合子身である。094は口径2.8cm、器高1.7cmを測る。蓋受け及び外底面露胎である。軸は淡青白色を呈す。095は器高5.0cmを測る。蓋受け及び体部下半より露胎である。軸調は094同様淡青白色。

096は須忠器表である。口径21.2cm、残存高22cmを測る。長円形の体部より口縁部を短く外反させ、端部を玉縁状につくる。体外面は格子目タタキ、内面はあて具痕を粗くナデ消す。色調暗灰色を呈す。

097は褐釉四耳壺である。口径10cm、肩部最大径15.7cm、器高21cmを測る。やや黄味を帯びた淡褐色を呈し、肩部より軸だれする。

5 4区の調査

1) 概要

4区は2区の西側、3区の東南側にあたる。道路などの構造物もさることながら、田面の削りによる調査が主であった。調査面積3414.8m²。耕作土直下の黄褐色土が遺構面となる。標高は27.7~28.0mをはかる。便宜上北側調査区を4-1区、南側調査区を4-2区としたが、本文中ではとくに断わらない限りまとめて取り扱った。

本調査区では12~14世紀を中心とした多数の遺構、遺物を検出した。とくに4-2区では大規模な掘立柱建物群を確認した。この建物群は切り合い関係や出土遺物によって大きく二時期に区分される。前段階は官衙的配置をとる大型建物群を中心とする時期であり、後段階は矩形溝(S D0102)によって囲まれた居館的様相の建物群の時期である。後者の建物群はさらに時期の細分が可能であると考えられる。また各々の時期の建物群に伴う井戸や土坑などがある。

本文では上記の時期的関係はひとまず置き、遺構の種類ごとに説明を加える。全体的な遺構の変遷などについては後段のまとめで行う。なお出面部分の中世以前の遺構についてはほとんど手をつけておらず、調査した中世遺構とともに埋め戻し、今後に委ねることにした。

2) 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

4-2区を中心に多数のピットを確認した。とくに南側部分は足の踏み場もないほどのピットの重複がみられた。調査にあたってはなるべく建物として確認できたピット(柱穴)から握るように努めたが、時間的な制約から果たせない場合が多かった。また地質の変化の多い遺構面が乾燥し、切り合い関係のみならず遺構そのものの検出を困難なものとした。ここで報告するのは調査時に現場で確認した掘立柱建物に限った。

建物はその切り合い関係および位置関係から次の3群に分けて説明を加える。

①大型建物群

②矩形溝(S D0102)内の建物群(①を除く)

③矩形溝以北の建物群

①は柱掘形が大きく、また埋土の色が淡いことなどから②③との区別は比較的容易であった。③は掘形が小さく、建物の重複も少ない。②はとくに南半部で重複が著しく、また掘形の規模も様々で、建物としてまとめるのに苦渋した。現場に立つと南北方向のピット列がいくつも確認できたが、8棟しかまとめることができなかった。時期的な関係は先にも述べたが、①は②の矩形溝に切られており、また溝内の建物同士の切り合いでも①が古いものであった。②はピットの重複状態から見て複数時期の建て替えがあったのは間違いない。③については掘形の埋土

の土色や建物方位から②のいずれかの時期と考えられる。ここでも建て替えの状況がうかがわれる。すなわち①から②③への変遷はたどれるが、矩形溝に囲まれた当初の建物群と同時に溝の外に建物があったのかは遺構からは判然としない。柱穴から出土する遺物はきわめて少なく、また出土しても形態的に近接したものが多く、②③の建物相互の時期判定は困難であった。

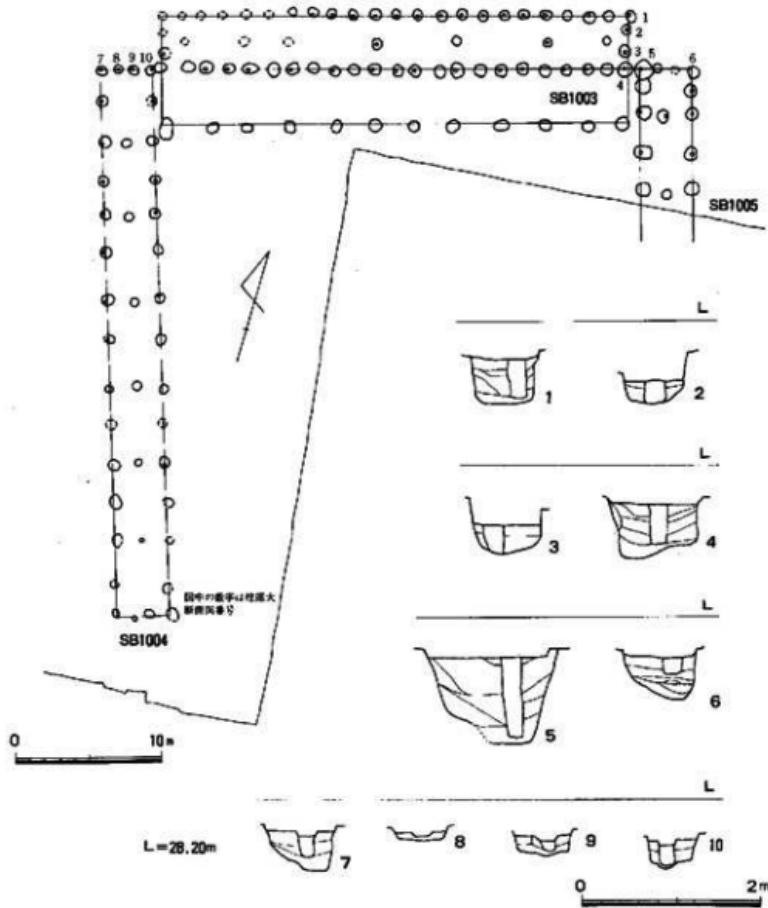
①大型建物群

S B1003・1004・1005によりコの字状の配置をとる建物群である。北側と西側半分近くを調査した結果、コの字状の内側でもS B1006、1007、1008の3棟の建物を確認した。これらの建物から出土遺物はほとんどない。S B1003から糸切り底の土師器皿片が出土したことと、この建物を切るS E0274が12世紀後半であることなどから、この大型建物群の時期を12世紀中頃に考えておきたい。時期の詳細と建物の性格については後段のまとめの項に譲る。

S B1003（第31図） 北面に位置する東西長32.10m（170尺）、南北幅7.20m（24尺）の長大な東西棟である。建物方位はN-17°-W。西北側の柱穴は矩形溝（S D0102）により破壊されている。この建物は別遺構との重複が少なく、また検出したのも黄褐色土の安定した面であったため、その確認は比較的容易であった。しかし検出した柱穴の構成は特異であり、どの部分を身舎にするかで建物の構造が変わる。ひとつは北半分を身舎と考え3間×22間の南庇付建物とするものである。別のひとつは北半分の間隔の狭い柱穴を間仕切りのものと考え、南側桁行の柱間をとり2間×11間の建物とするものである。ここでは両方の考えを考慮して、東西両側の梁方向の柱穴列を東列と西列、また桁方向の柱穴列を北から北列、中央列、南列と便宜的に呼ぶ。

東列は単純にいえば4間で、北から90cm（3尺）、150cm（5尺）、120cm（4尺）、360cm（12尺）の柱間実長をとる。北側の3間分を合わせると南側の1間分と同じ360cmとなる。西列は北側2柱穴が残存しないが、南側2間分は東列と同じである。北列は16間分の確認にとどまったが、対応する中央列は22間であった。柱間実長は柱痕跡のあるものをはかると、北列、中央列とも120～160cmのばらつきがあり、また対応する柱間が同じ幅とは限らない。全体的には150cm前後のものが多く、また前後2間分で300cm前後となるところから、北列と中央列とも1間5尺、あるいは前後2間で10尺という基準があった可能性が高い。ただ東側2間分の実長はともに270cm（9尺）と他に比べ狭い。この北列と中央列の中間、東からに1列目、5列目、9列目、13列目に柱穴がみられた。西側はS D0102に切られ確認できなかった。北列と中央列からの距離はともに180cm（6尺）、その間隔は北・中央列の柱間でいうと東から1間・3間・4間・4間分と統一がない。南列は北列、中央列の半分の11間となる。この列の柱掘形からは柱痕跡を確認することができなかった。掘形の中央で柱間をはかると270～330cmと差があるが、300cm前後が多く、ほぼ北列、中央列の2間分の実長に相当する。

柱掘形の平面は方形、円形、橢円形で、径もしくは一边が80cm前後のものが多く、100cmを越



第31図 清末遺跡群4区SB1003・1004・1005配置図および柱掘形断面実測図(1/400, 1/60)

えるものもある。南列を除いた多くの掘形で柱痕跡を確認したが、その径は15cmに満たない。掘形の大きさの割には小さいものであった。掘形の深さは40cm前後のものが多い。これらの柱掘形のうち一部は断面観察のため断ち割ったが、ほとんどは掘形上面を一段下げただけで埋め戻した。

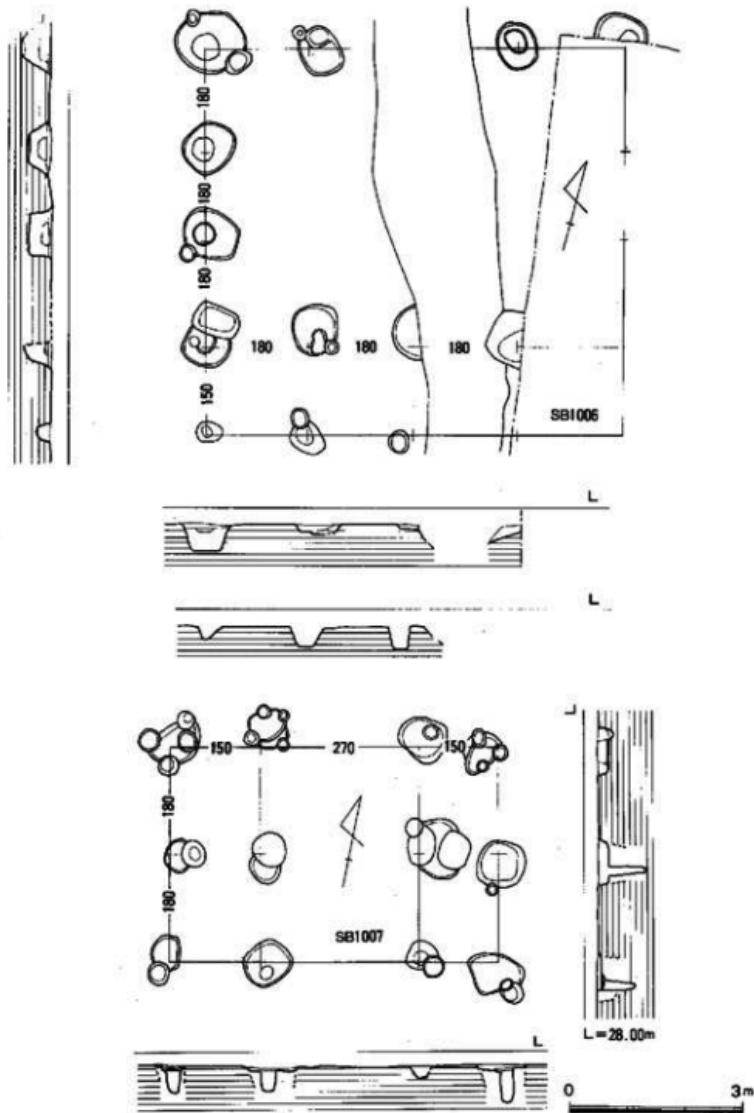
S B1004 (第31図) S B1003の東側に配置される3間×14間の南北棟である。S B1003西列とこの建物の東桁の間は90cm。実長で梁行360cm、桁行3750cmと細長い建物である。建物方位はN-18°-W。S B1003よりわずかに西に触れる。北梁はS B1003の中央列とは一直線上にあり、その柱間実長は東から150cm(5尺)、90cm(3尺)、120cm(4尺)と揃わない。南梁は後のピットに切られ柱穴の形態が不明瞭であるが、3間で実長も北梁と同様である。桁行の柱間実長は北から210cm(7尺)、300cm(10尺)、270cm(9尺)、210cm(7尺)、270cm(9尺)、330cm(11尺)、270cm(9尺)、330cm(11尺)、240cm(8尺)、270cm(9尺)、270cm(9尺)、270cm(9尺)、300cm(10尺)、210cm(7尺)と不等間隔である。東桁と西桁の対応する柱間に若干の幅の違いがある。床束あるいは間仕切りの柱穴が、2間ごとに東西桁の中間180cm(6尺)の位置にみられる。柱穴および柱痕跡の形態、規模に関してはS B1003と変わることろがない。S B1011・1012・1013、S E0274・0276、などに切られている。

S B1005 (第31図) S B1003の東側に配置される南北棟である。S B1003東列とこの建物西桁との間は90cm。建物方位はN-17°-W。梁行の実長は360cm(12尺)。S B1003中央列と一直線上に列ぶ北梁は、ちょうど試掘トレンチ部分にかかり、3柱穴しか確認できなかった。柱の間隔からすれば、S B1004と同様3間だったものと考えられる。桁行は調査区内で4間分しか確認できなかった。柱間実長は北から150cm(5尺)、150cm(5尺)、270cm(9尺)、270cm(9尺)となり、北側の2間は狭い。また東西桁の中間には2間ごとに床束あるいは間仕切りの柱穴がある。柱掘形は100cmを越えるものが多いが、柱痕跡そのものは先の建物の規模と変わらない。

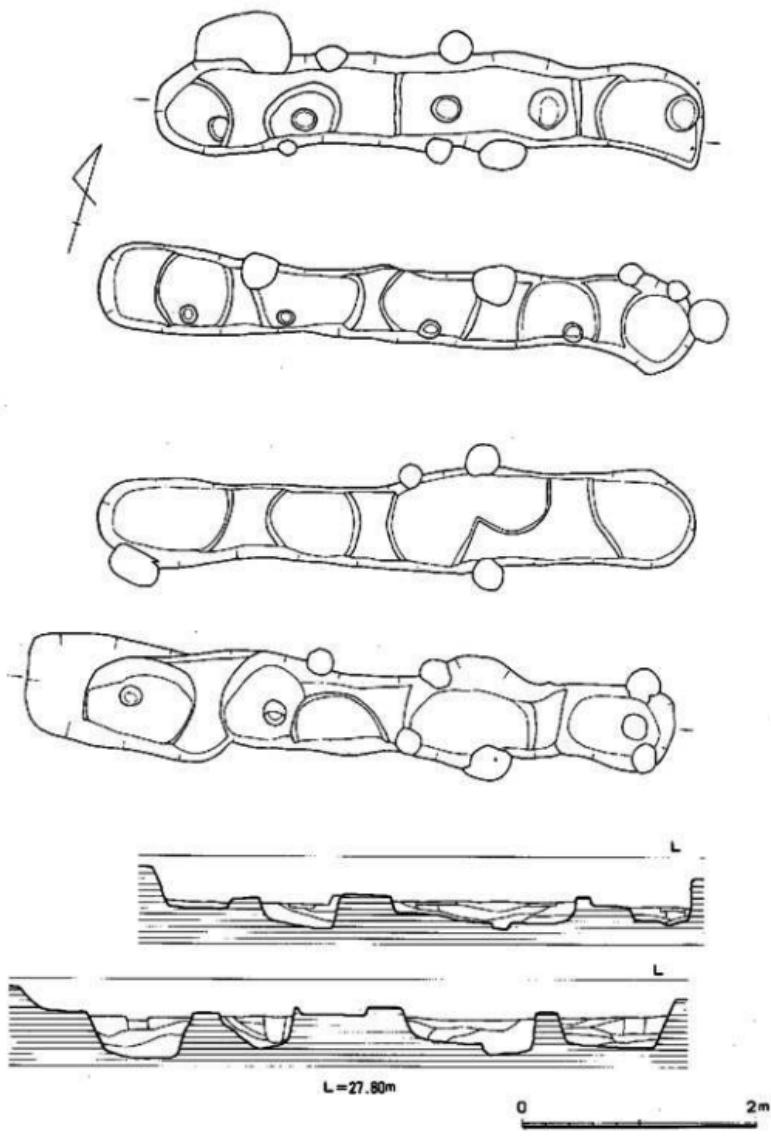
S B1006 (第32図) S B1003の東南に位置する東西棟である。東側が調査区外にかかるが、北側の柱筋からして3間×4間の南北付建物としてよいであろう。建物方位はN-15°-W。梁行実長は510cm(17尺)、柱間は北から180cm(6尺)、150cm(5尺)、180cm(6尺)。桁行実長は720cm(24尺)、柱間は180cm(6尺)の等間である。南庇は身舎から180cm離れる。柱間は桁行とは若干異なる。柱掘形は円形もしくは隅丸方形で、径100cm前後となる。柱痕跡は径30cmを越えるものが多く、先のコの字状に配置された建物のものの倍近くある。柱穴の深さは40cm程度であるが、柱痕跡はその底より20~30cm上部で終っている。庇柱は径40~50cmと身舎のものに比べると小さい。深さはほぼ同じである。

S B1007 (第32図) 調査区の東南で検出した。S B1008の南に位置する。1間×2間の南北棟で、東西に庇が付く。建物方位はN-11°-W。身舎の梁行実長270cm(9尺)、桁行実長360cm(12尺)。桁の柱間は180cm(6尺)の等間である。庇は東西とも身舎から150cm(5尺)離れる。柱間は桁行に等しい。柱掘形は円形状で、径は50~100cmとばらつく。深いもので80cm程度。柱痕跡は径20cm位である。S B1010に切られる。

S B1008 (第33図) S B1006とS B1007の間に位置する布掘りの4間×3間の掘立柱建物である。布掘りの長さは北から4.7m、5.10m、5.15m、5.60mで、幅は0.7m前後、深さは15~



第32図 SB1006・1007実測図(1/100)



第33図 SB1008実測図(1/50)

20cmである。この底面を各々一段掘りくぼめ、柱を置いている。残存する柱痕跡は径20cm前後である。南北両布掘りの隅柱痕跡が確認でき、これによれば建物平面は北辺405cm(13.5尺)、南辺435cm(14.5尺)、東辺540cm(18尺)、西辺495cm(16.5尺)とややいびつな長方形となる。北側布掘りの柱間は西から75cm(2.5尺)、120cm(4尺)、90cm(3尺)、120cm(4尺)。東辺の柱間は180cm(6尺)の等間である。

②矩形溝(S D0102)内の建物群

8棟確認した。先にも述べたように、建物としてまとめられたのはその一部にしか過ぎない。また検出した建物に重複があり、一時期の所産ではない。柱穴の中には検出時空洞だったものや、また焼土・炭化物を含んだものもみられた。①に比べ覆土は色調が濃く、土質が粗い。

S B 1009(第34図) S B 1008を切って建てられた2間×3間の南北棟である。S B 1006とも重複する。建物方位はN-9.5°-W。梁行実長は390cm(13尺)、柱間は195cm(6.5尺)の等間。桁行は実長は570cm(19尺)、柱間は北から210cm(7尺)、180cm(6尺)、180cm(6尺)。柱掘形は円形で径30~40cm、深さ50cm前後。

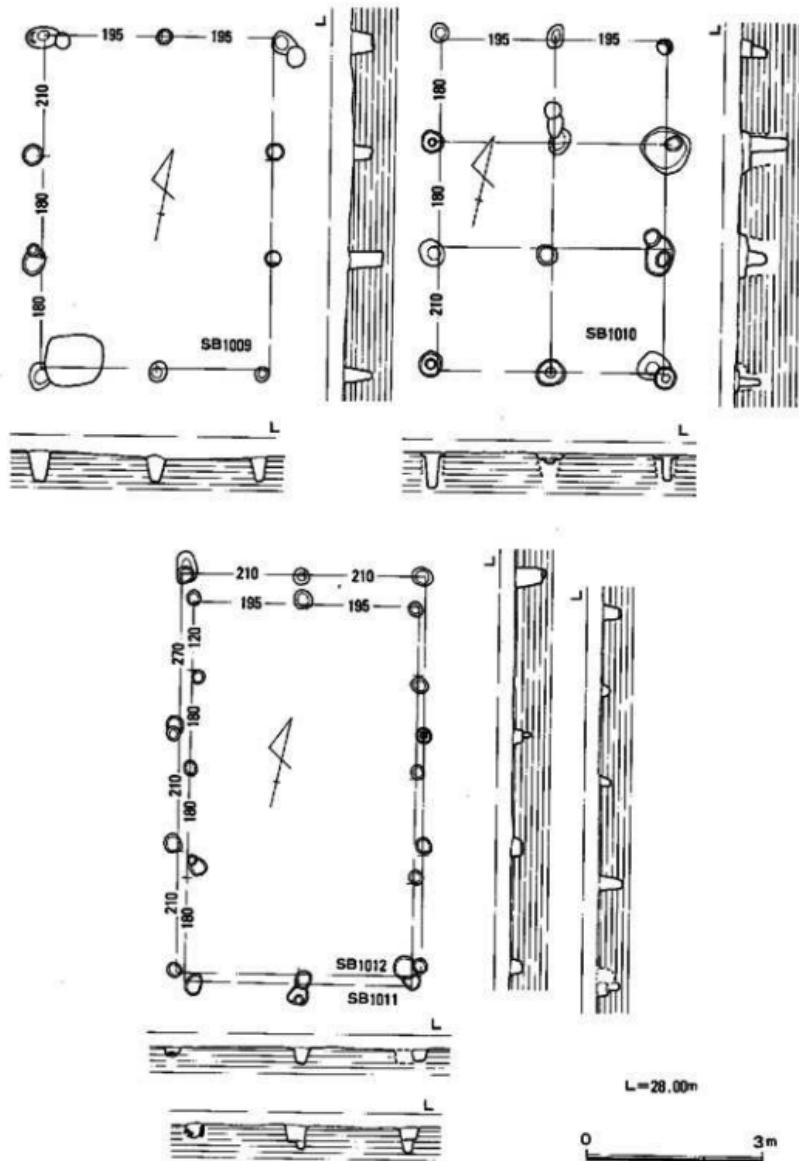
S B 1010(第34図) S B 1007を切って建てられた2間×3間の南北棟である。建物方位はN-13.5°-W。梁行実長は390cm(13尺)、柱間は195cm(6.5尺)の等間。桁行実長は570cm(19尺)、柱間は北から180cm(6尺)、180cm(6尺)、210cm(7尺)。柱掘形は円形で径30~50cm、深さ50~80cm

S B 1011(第34図) S B 1004を切って建てられた2間×4間の南北棟である。S B 1012に切られる。建物方位はN-13.5°-W。梁行実長は390cm(13尺)、柱間は195cm(6.5尺)の等間。桁行実長は660cm(22尺)、柱間は北の1間が120cm(4尺)、他の3間は180cmの等間である。柱掘形は円形で径20~30cm、深さ20~40cm。

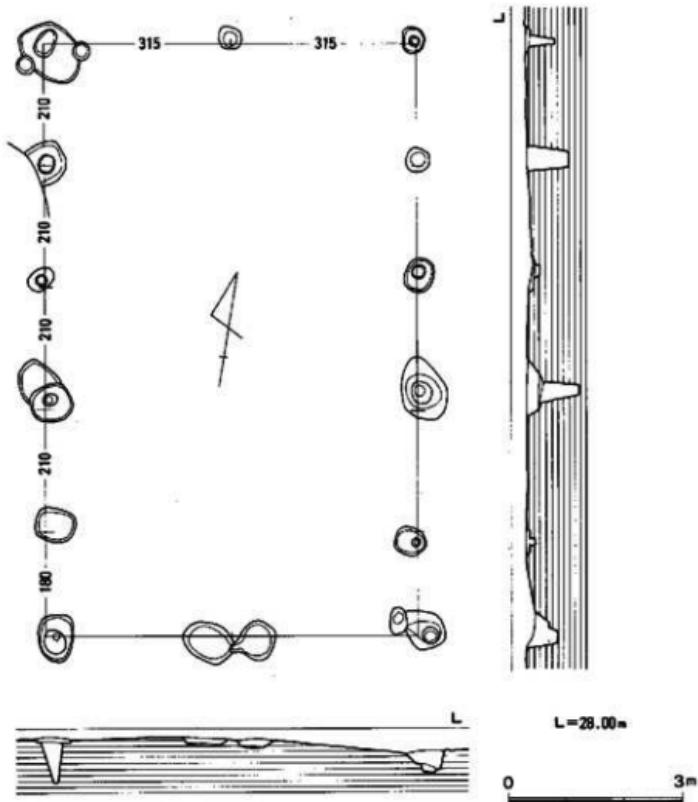
S B 1012(第34図) S B 1011を切って建てられた2間×3間の南北棟である。建物方位N-13.0°-W。梁行実長は420cm(14尺)、柱間は210cm(7尺)の等間。桁行実長は690cm(23尺)、柱間は北から270cm(9尺)、210cm(7尺)、210cm(7尺)。柱掘形は円形で径30cm前後、深さ25~50cm。位置関係からすれば、S B 1011の建て替えで、梁・桁行とも1尺づつ広がり、その分床面積も増えたことになる。

S B 1013(第35図) 調査区南側中央で検出した2間×5間の南北棟である。建物方位はN-9°-W。梁行実長は630cm(21尺)、柱間は315cm(10.5尺)の等間。桁行実長は1020cm(34尺)、柱間は北の4間が210cm(7尺)、南の1間だけが180cm(6尺)。柱掘形は円形、長方形などの形態をもち、幅80cm前後のものまである。深さ70cm前後。S B 1004を切り、S B 1014と重複する。

S B 1014(第36図) S B 1013西側で重複して検出した2間×3間の南北棟である。建物方位はN-9.5°-W。梁行実長は420cm(14尺)、柱間は210cm(7尺)の等間。桁行実長は720cm(24



第34図 SB1009・1010・1011・1012実測図(1/100)

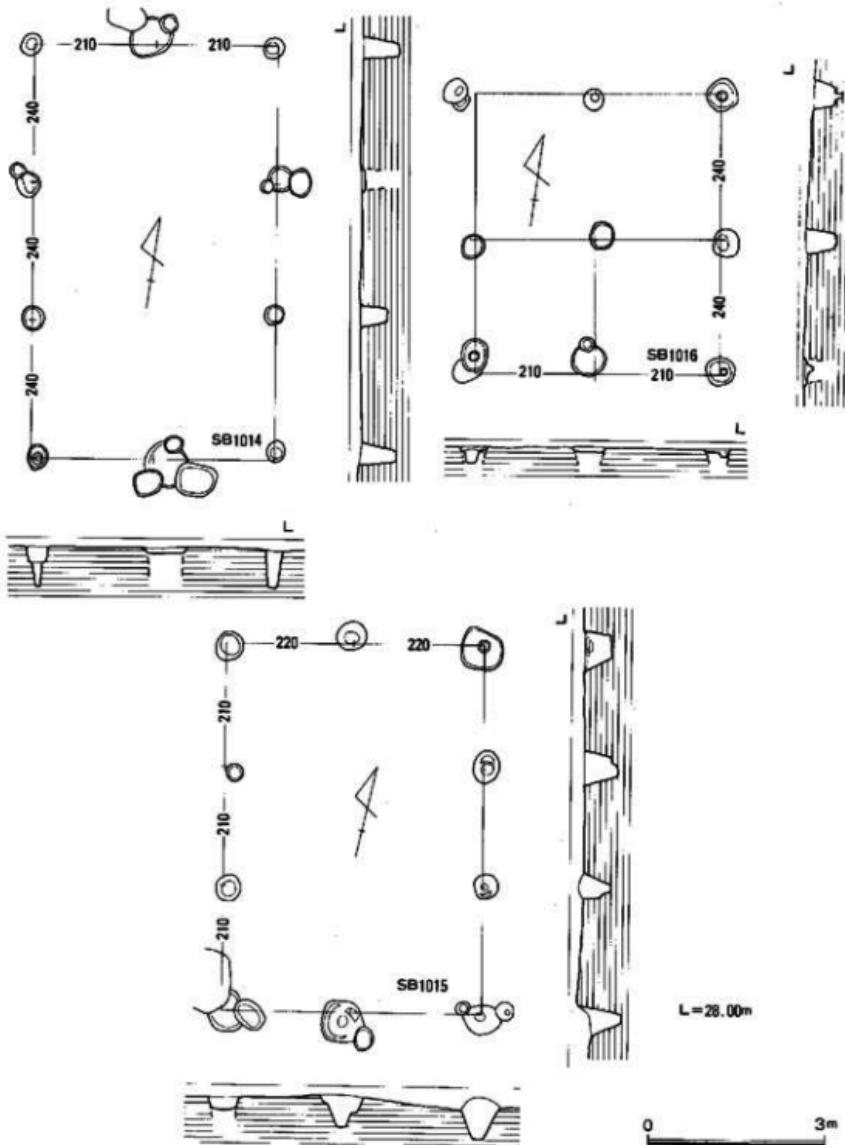


第35図 SB 1013実測図(1/100)

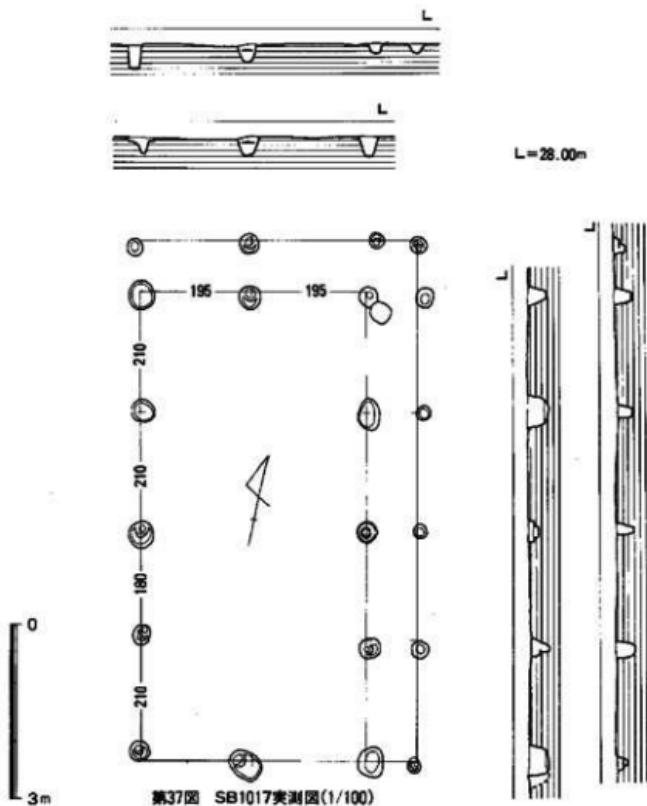
尺)、柱間は240cm(8尺)の等間。柱掘形は円形で径30~40cm、深さ50~60cm。両妻柱の掘形だけが大きい。

S B 1015(第36図) S B 1014の西側で検出した2間×3間の南北棟である。建物方位はN-13°-W。梁行実長は450cm(15尺)、柱間は225cm(7.5尺)の等間。桁行実長は630cm(21尺)、柱間は210cm(7尺)の等間である。柱掘形は円形あるいは方形を呈し、径40~80cmと大きさにばらつきがある。深さは60cm前後。

S B 1016(第36図) S B 1013の南側に位置する2間×2間の総柱建物である。東西実長は



第36図 SB1014・1015・1016実測図(1/100)

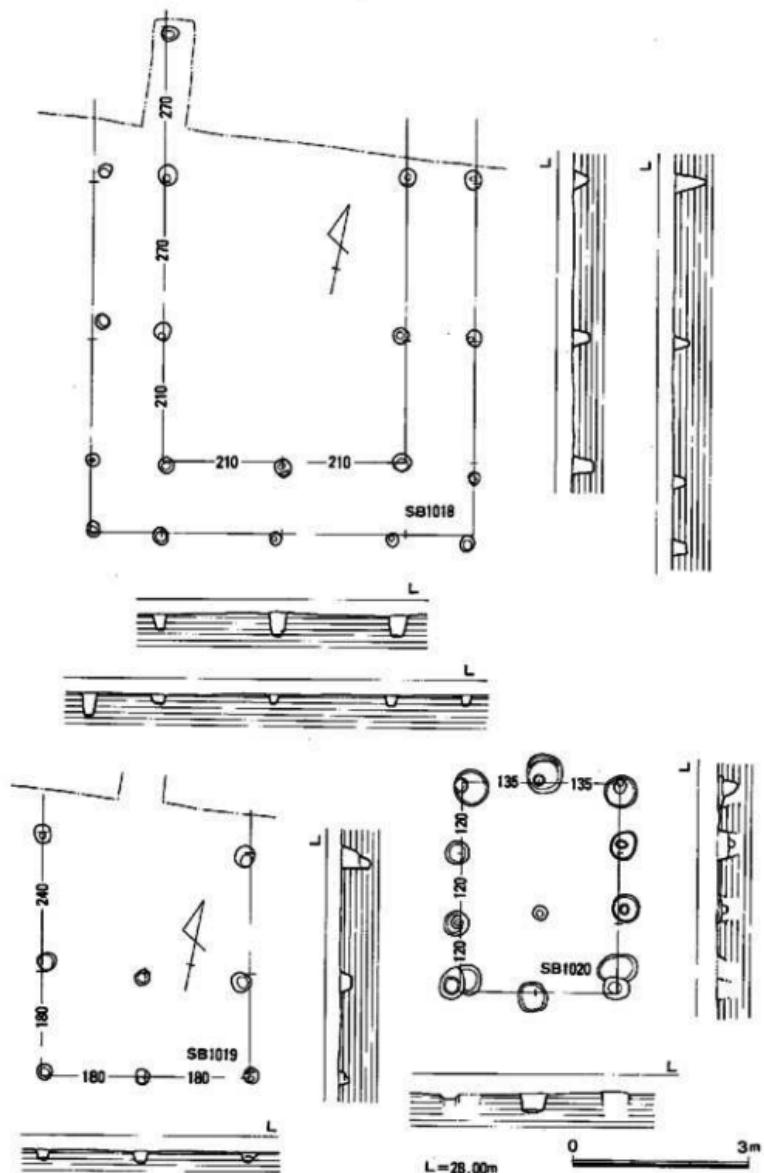


第37図 SB1017実測図(1/100)

420cm (14尺)、柱間は210cm (7尺) の等間。南北実長は480cm (16尺)、柱間は240cm (8尺) の等間である。西北隅柱はやや外れる。建物方位はN - 8° - W。柱掘形は円形で径40~60cm、深さ50cm前後。埋土には多量の焼土がみられた。

③矩形溝 (S D0102) 以北の建物群

矩形溝の北側に位置する建物群である。同時に大型建物群の北側に位置するともいえるが、先述したように柱穴の状態、他遺構との切り合いから大型建物群より後出すると考えられる。6棟確認したが、S B1018とS B1020の間に柱筋が通るビットがあり、一、二棟建つ可能性が



第38図 SB1018・1019・1020実測図(1/100)

高い。SB1017の西側にもピットが集中し、やはり建物があったと想定できる。しかし、わずかな未調査地区を隔てた4-1区にはSB1021とSB1022が並んで建つだけで、ピットもほとんど確認できなかった。この状態からすれば、矩形溝外の建物群は溝のすぐ北側だけに少数建設されただけと考えられる。しかし建物には重複が認められ、建て替えなどによる時期差は確実に認められる。

SB1017(第37図) 4-2区東北隅付近で検出した二面庇付の2間×4間の南北棟である。建物方位N-12°-W。矩形溝(SD0102)の北肩からわずか1mの所に位置している。梁行実長は390cm(13尺)、柱間は195cm(6.5尺)の等間。桁行実長は810cm(27尺)、柱間は北から210cm(7尺)、210cm(7尺)、180cm(6尺)、210cm(7尺)。庇は北と東の2面に身舎から90cm(3尺)離れて付く。西庇は西軒とほぼ同じ柱間であるが、北庇は北梁よりわずかに開く。柱掘形は円形で径30cm前後が多い。庇柱は身舎のそれより一回り小さい。深さは25~40cm。SE0115を切る。

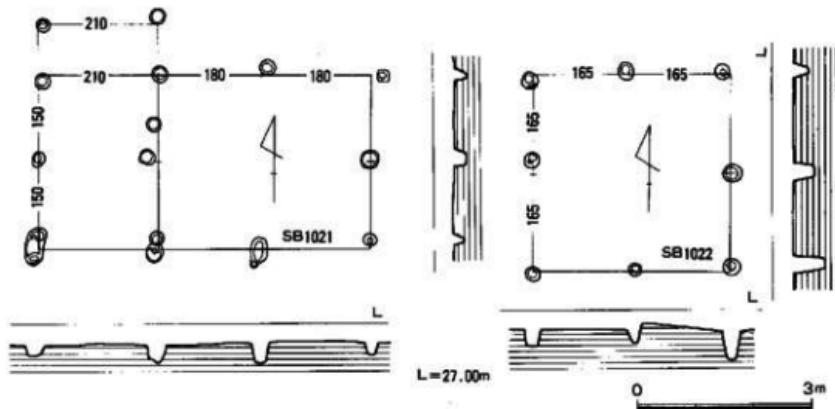
SB1018(第38図) SB1018の西側に位置する。北側が調査区外にかかるが、梁行2間の南北棟で、桁行は3間分確認した。この身舎の周囲には柱穴が巡り、おそらく四面庇となるものであろう。建物方位N-11°-W。梁行実長は420cm(14尺)、柱間は210cm(7尺)の等間。確認した桁行3間の実長は南から210cm(7尺)、270cm(9尺)、270cm(9尺)。庇柱は身舎から120cm(4尺)離れる。柱間も若干身舎とは異なり、また西庇は柱筋にずれがある。柱掘形は円形で径20~30cm、深さは20~50cm。庇柱が若干小さく、また浅い傾向がみられる。SB1018と重複するが先後関係は不明。

SB1019(第38図) SB1018の西側に重複する。梁行が2間の南北棟で、桁行は北側が調査区外にかかるため2間分しか確認できなかった。建物方位N-11°-WでSB1018と同じである。梁行実長は360cm(12尺)、柱間は180cm(6尺)の等間。確認した桁行2間は南から180cm(6尺)、240cm(8尺)。妻柱の北1間の所には、床東の柱穴がある。柱掘形は円形で径30cm前後、深さ20~50cm。

SB1020(第38図) 4-2区東北隅で検出した2間×3間の南北棟である。建物方位は磁北。梁行実長は270cm(9尺)、柱間は135cm(4.5尺)の等間。桁行実長は360cm(12尺)、柱間は120cm(4尺)の等間。柱掘形は円形で、径40~50cm。小型の建物である。

SB1021(第39図) 4-1区で検出した2間×3間の東西棟である。建物方位は磁北。北軒の西1間に軒が取り付く。梁行実長は300cm(10尺)、柱間は150cm(5尺)の等間。桁行実長は570cm(19尺)、柱間は西から210cm(7尺)、180cm(6尺)、180cm(6尺)。軒柱は身舎から90cm離れる。また西妻柱から東1間分の所に床東の柱穴がある。柱掘形は円形で、径20~30cm。

SB1022(第39図) SB1021のすぐ北に位置する2間×2間の建物である。建物方位は磁北。



第39図 SB1021・1022実測図(1/100)

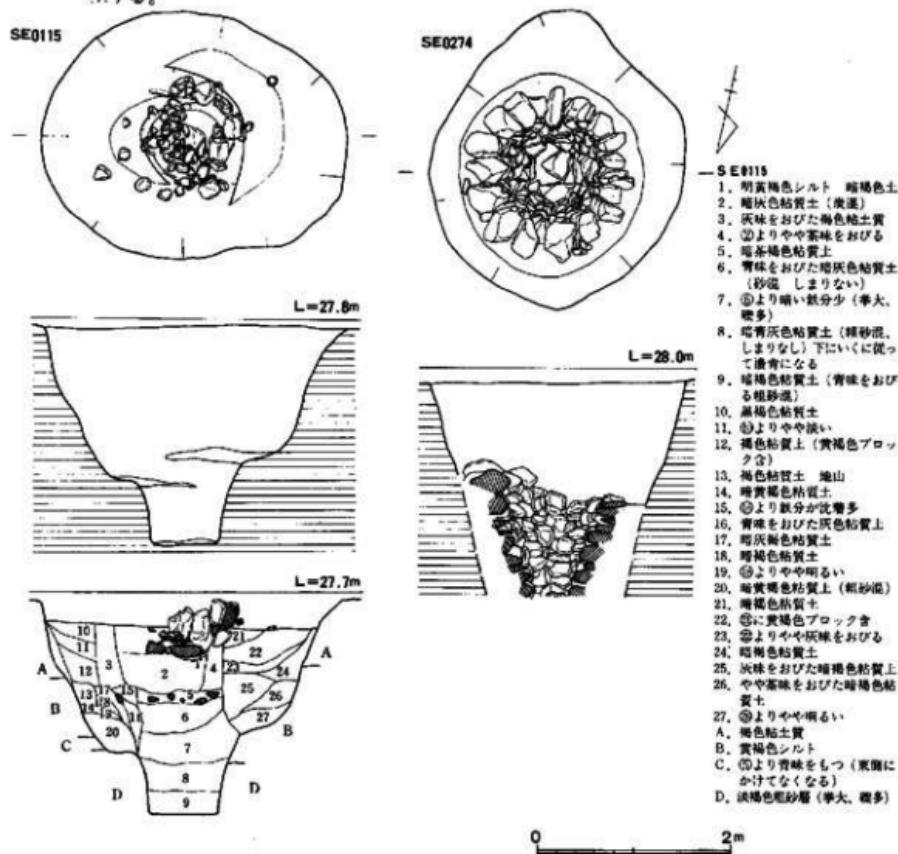
四方とも実長は330cm(11尺)で、柱間も165cm(5.5尺)と等しい。柱掘形は円形で径20~30cm。位置関係および規模からみてSB1021の納屋的な建物と考えられる。

建物番号	群	建物規模	梁行実長(尺)	桁行実長(尺)	建物方位	備考
SB1003	①	3間×22間	360cm(12)	7210cm(170)	N 17.0°W	北面を有とした場合、南北付。
SB1004	①	3間×14間	360cm(12)	3750cm	N-18.0°-W	
SB1005	①	3間?×?	360cm(12)	?	N-17.0°-W	
SB1006	①	3間×4間	510cm(17)	720cm(24)	N 15.0°W	南北付
SB1007	①	1間×2間	270cm(9)	360cm(12)	N-11.0°-W	
SB1008	①	4間×3間	405cm(13.5)	540cm(18)	N-13.0°-W	布掘り
SB1009	②	2間×3間	390cm(13)	570cm(19)	N- 9.5°-W	
SB1010	②	2間×3間	390cm(13)	570cm(19)	N-13.5°-W	總柱
SB1011	②	2間×4間	390cm(13)	660cm(22)	N-13.5°-W	
SB1012	②	2間×3間	420cm(14)	690cm(23)	N-13.0°-W	
SB1013	②	2間×5間	630cm(21)	1020cm(34)	N- 9.5°-W	
SB1014	②	2間×3間	420cm(14)	720cm(24)	N- 9.5°-W	
SB1015	②	2間×3間	450cm(15)	630cm(21)	N-13.0°-W	
SB1016	②	2間×2間	東西420cm(14)	南北480cm(16)	N- 8.0°-W	總柱
SB1017	③	2間×4間	390cm(13)	810cm(27)	N-12.0°-W	二面庇付
SB1018	③	2間×?	420cm(14)	?	N 11.0°W	四面庇付
SB1019	③	2間×?	360cm(12)	?	N-11.0°-W	
SB1020	③	2間×3間	270cm(9)	360cm(12)	N	
SB1021	③	2間×3間	300cm(10)	570cm(19)	N	軒付
SB1022	③	2間×2間	330cm(11)	?	N	

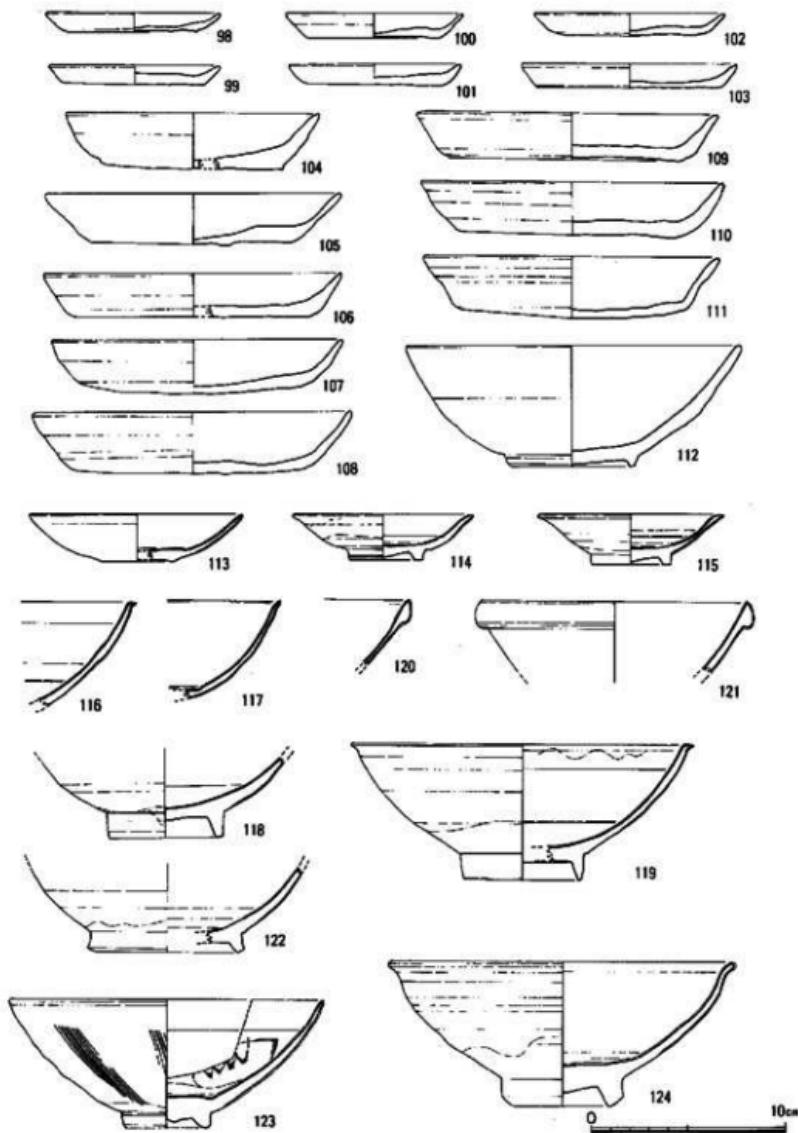
第3表 清末造跡群4区掘立柱建物一覧

(2) 井戸

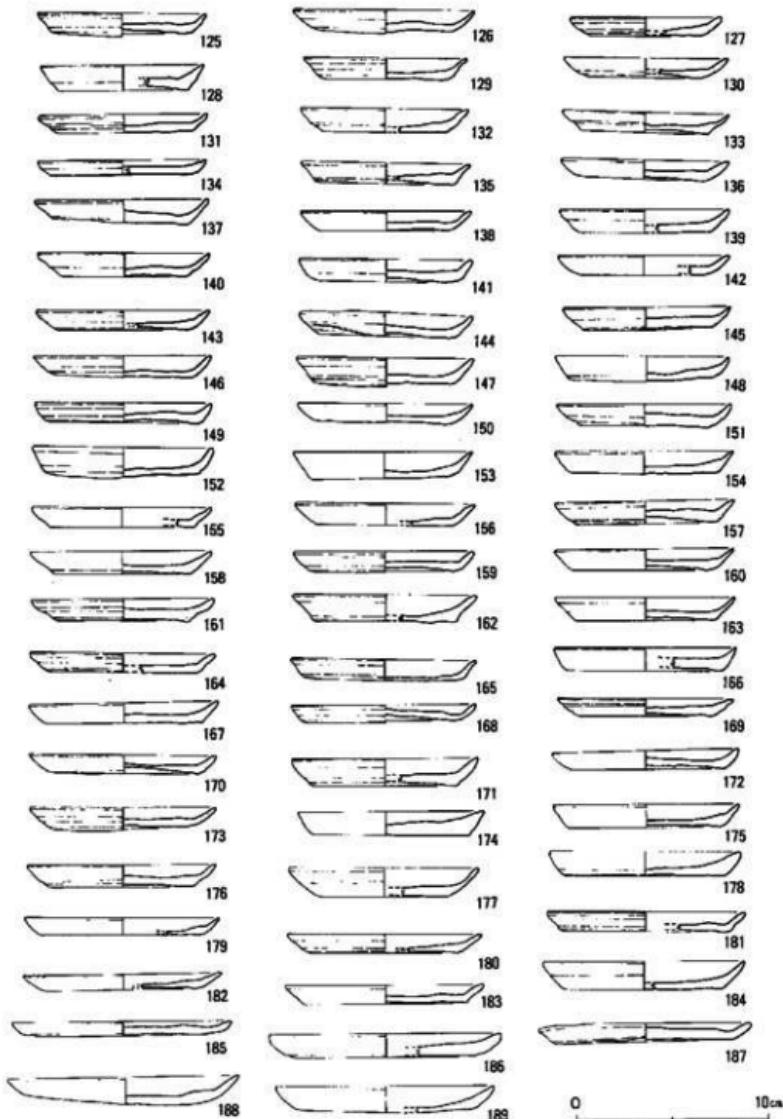
SE0115 (第40図) 調査区北側で検出する。SB1017に切られる。上面径3.1mの略円形で深さ2.2mを測る。東西に一段ずつ平坦面を有す。二段目径1.0m、深さ0.8mを測る。土層観察より掘方中央より径1m程の井筒部の痕跡がみとめられる。木枠によるものであろうか。上面では30~40cm程の自然礫の配列が認められる。また二段目より砂疊層を抜いて掘り込まれており、壁面は石積みの様態を呈している。遺物は上面より多く出土し、土師器・陶磁器が主に出土する。



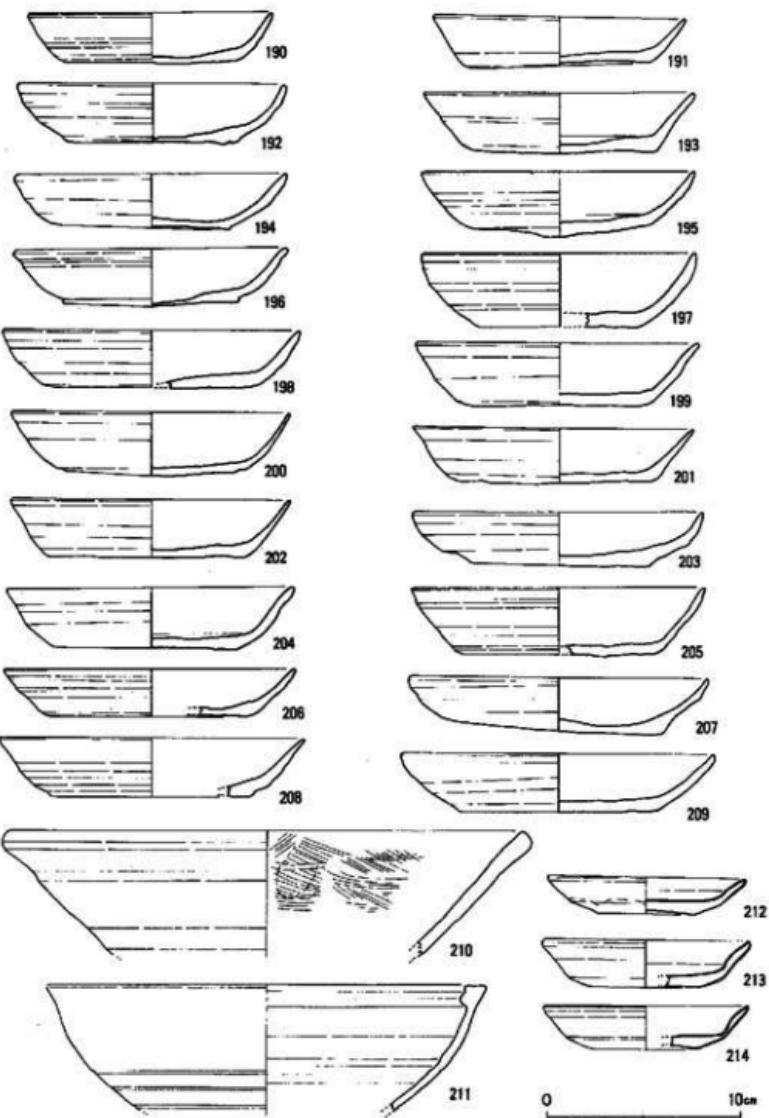
第40図 SE0115・0274実測図(1/60)



第41図 SE0115出土遺物実測図(1/3)



第42図 SE0274出土遺物実測図 1 (1/3)



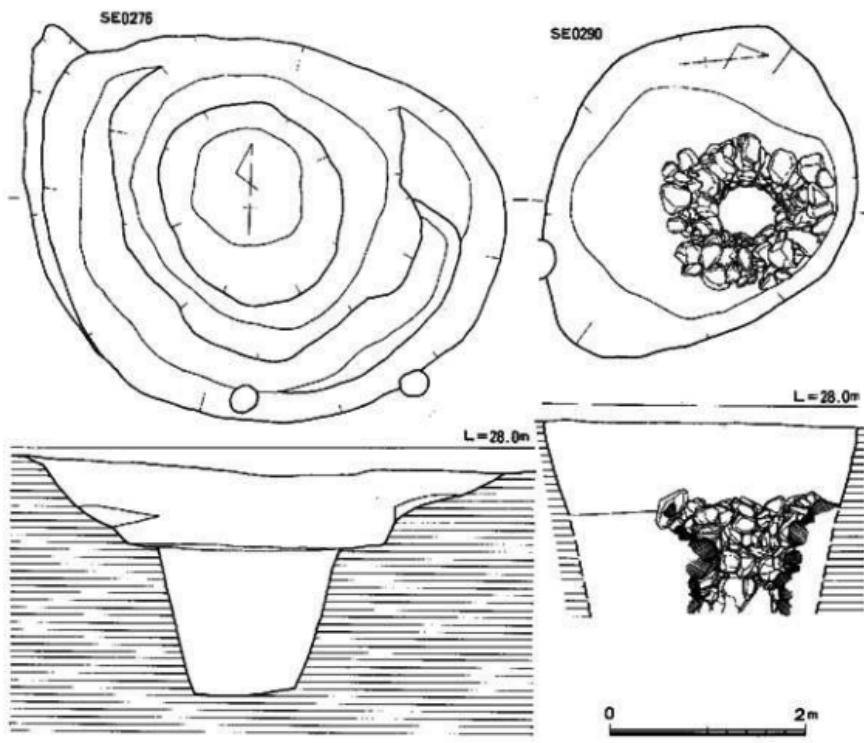
第43図 SE0274出土遺物実測図2(1/3)

出土遺物（第41図） 098～103は土師器小皿aである。いずれも外底部は回転糸切りで板状圧痕を有す。胎土は密である。色調はおむね淡褐色を呈す。口径は8.7～11cmを測り、平均9.2cmを測る。104～111は土師器坏である。いずれも回転糸切りで板状圧痕を有す。色調は104・106・110・111が褐色、その他が淡赤褐色を呈す。胎土には雲母や径1mm以下の白色砂粒を含む。口径平均15cmを測る。112は瓦器塊である。口径16.6cm、器高6cmを測る。体部中位で屈曲し口縁に至るが、屈曲部外面に接合痕が明瞭に残る。外面横ナデ。内面は粗い横位のミガキが若干残る。口縁部内・外面が黒色、その他は灰白色を呈す。外底部に“X”的ヘラ記号を有す。

113～119は白磁である。113は口径10.8cm、器高2.4cmを測る。体部下半より露胎で胎土は白色を呈す。釉は黄味の強い白色である。114・115は皿皿類である。細い高台を有し、体部下位で屈曲して口縁端部は外反させる。内面は屈曲部に浅い沈線をめぐらし、底面は輪状に釉をカキ取る。胎土は灰白色、釉は白味をおびた淡灰色を呈す。116～119は碗V類。116は119と同一個体である。口径17.6cm、器高6.9cmを測る。内面口縁下及び見込みに浅い沈線を施す。胎土は黄白色でやや粗い。体部下半まで灰白色の釉がかけられる。117は体部下半で明瞭な屈曲を持つ。また口縁端の引き出しも少ない。120・121は玉縁状の口縁を持つものである。120は青味を帯びた白色の釉が施される。胎土は灰白色である。121は口径13.6cmを測る。釉は緑味の強い灰白色を呈す。122は碗VII類である。内底面は釉が輪状にカキ取られる。高台脇まで施釉される。胎土、釉調共に灰白色を呈す。123・124は青磁である。123は体外面に櫛目・内面にヘラと櫛による花文を施す。淡緑色の釉が高台脇までかけられる。124は内・外面無文である。底部は肉厚であるが、体部は細くなり、口縁端部を外反させる。釉調は黄土色を呈し体部下半より露胎である。その他図示していないが口径21cmを測る土鍋等も出土。

S E 0274（第40図） 調査区南端で検出した石組の井戸である。掘り方上面径2.5mの略円形を呈し、造構面より1m下方より石組が検出される。石組部は内径0.9m、深さ1.3mを測る。人頭大の自然礫をブロック状に積み上げる。石材は上部及び下部が大ぶりで中程が相対的に小ぶりのものを用いる。断面形は下方がすばまる漏斗状を呈する。石組の上層は炭化物・地山ブロックの混じった灰褐色土がレンズ状に堆積する。またこの井戸は大型建物S B 1004を切って掘削されている。遺物は上層に多くみられる。出土遺物の大半は土師器の小皿・坏であり、僅かに陶磁器等を含む。

出土遺物（第42・43図） 遺物の多くは土師器の小皿・坏で占められる。125～189は土師器小皿aである。口径7.3～11.8cmを測る。口径平均9.0cmである。全て回転糸切りを行い、ほとんどが板状圧痕を有する。全体の70%程が色調淡褐色を呈し、残りが淡赤褐色～暗赤褐色を呈す。190～209は土師器坏である。口径12.6～16.1cmを測る。口径平均14.4cmである。全て底部回転糸切りで、191・193を除いて板状圧痕を有する。胎土はおむね良好である。色調は全体の70～80%が淡褐色、残りが淡赤褐色～暗赤褐色を呈す。210は瓦質の鉢である。体部は直線的

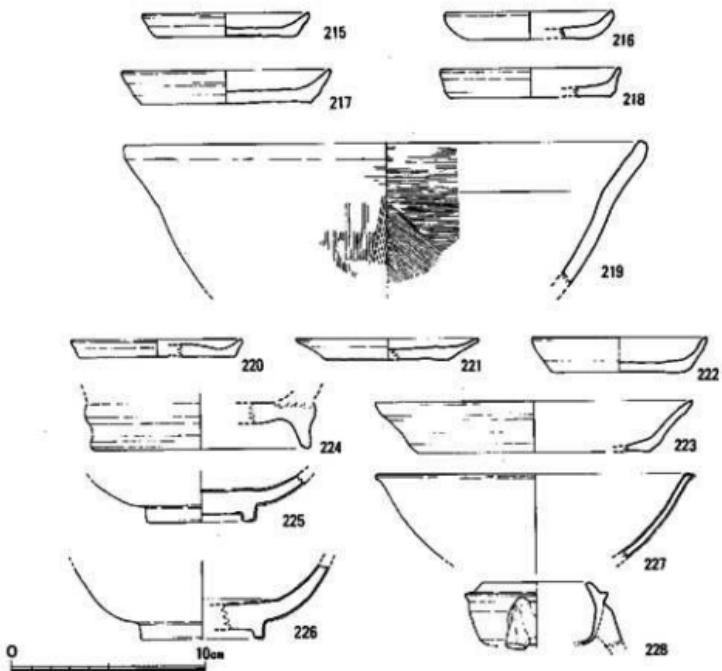


第44図 SE0276・0290実測図(1/60)

に外方に伸び、口縁端外側を若干肥厚させる。内面横ハケ、外面には指頭痕が残る。胎土には径1mm以下の白色粒を含み、色調は淡灰褐色を呈す。復元口径は26cmである。

211は陶器の鉢である。口径22.3cmを測る。口縁端部は平坦面をつくり、内面を断面M字形にし、蓋受け状にする。体外面に2条の浅い沈線を施す。器表面は暗茶褐色、器内部は明赤褐色を呈す。

212~214は青磁皿である。212は体部中位で屈曲し直線的に外方に伸びる。内面無文である。体部中位以下露胎で灰白色を呈す。釉調は青味の強い淡緑色である。213・214は体部中位で屈曲し、外反しながら伸びる。内面は見込みと体部との境に段状の沈線を施し、見込みには櫛状工具による花文を施す。外底面のみ露胎で、胎土は灰白色を呈する。釉調は213が青味を帯びた淡緑色、214が黄味を帯びた淡緑色である。



第45図 SE0276・0290出土遺物実測図(1/3)

S E 0276 (第44図) 調査区中央で検出した素掘りの井戸である。上面径4.7m、深さ2.3mを測り、平面略円形である。検出面より80cm程掘削した所で幅30cm程の平坦面をつくり中央より二段目を掘り込む。二段目は砂疊層に掘り込まれており、径1.8m、底径1m、深さ1.5mを測る。二段目の埋土には10~20cm程度の自然礫が多く入っている。また二段目上面には石が全面に一重に敷かれており、廃棄時における何らかの行為を示すものと考えられる。この井戸はS E 0274同様大型建物 S B 1004を切って掘削されている。出土遺物には土師器・陶磁器等があるが、総量は少ない。

出土遺物 (第45図215~219) 215~218は土師器小皿である。いずれも1/5程度の破片からの復元である。口径はそれぞれ8.4cm、8.6cm、10.6cm、9.2cmを測る。いずれも底部回転糸切りで板状压痕はみられない。胎土には雲母を含み粗い感じのものを用いる。色調は淡褐色を呈す。219は土鍋である。口径26.2cmを測る。内面は横方向のハケメの後中位以下には縦ハケ、外面は

縦ハケが施される。器体外面には煤が付着する。

S E0290 (第44図) 調査区南端 S E0274東隣に位置する。S E0274同様に断面漏斗状を呈する石組の井戸である。上面径3.5×3mを測り長円形を呈する。検出面より80cmの所で振り方中央北側によせて石組部分を構築する。S E0274同様人頭大の自然礫を、ある程度目地を通して積みあげる。下部には大ぶりの石を用いる。埋土は黄褐色～黄灰色土が主体で炭化物及び地山のブロックを多く混える。出土遺物には土師器・瓦器・陶磁器・石鍋破片等が出土する。

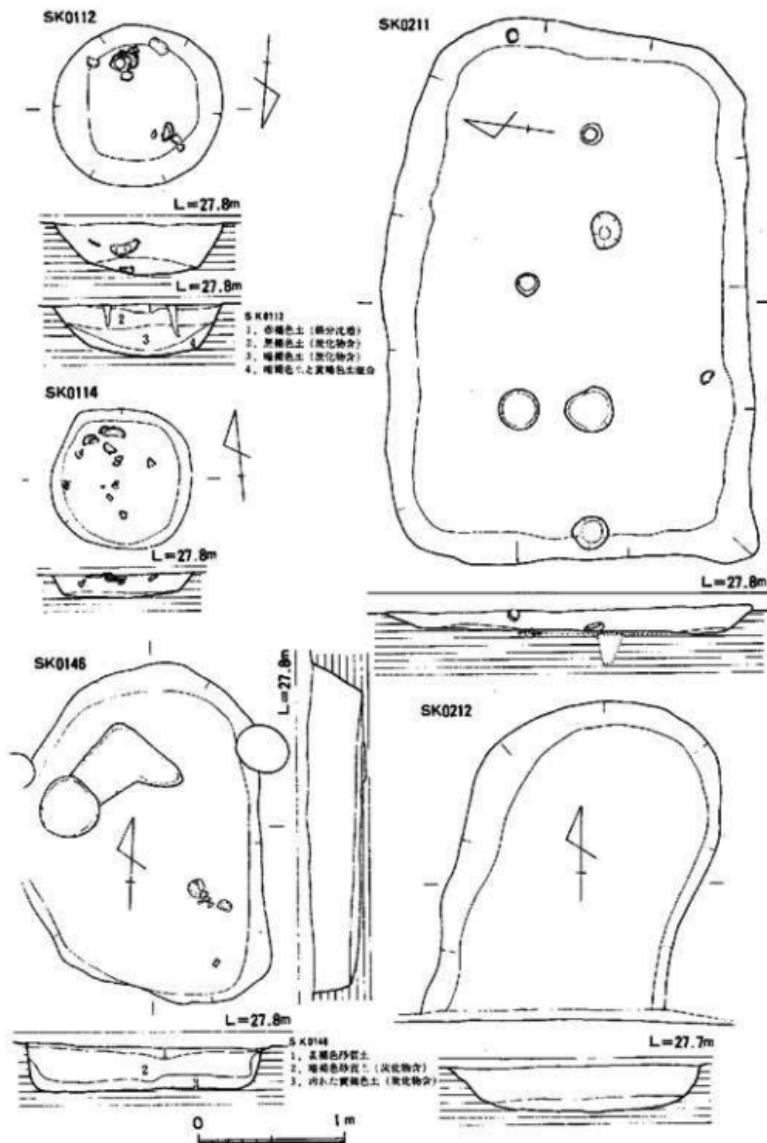
出土遺物 (第45図220～228) 220～222は土師器小皿である。いずれも外底部に回転糸切りの跡を有す。板状圧痕については220・221については明瞭でない。220は口径8.6cmを測る。胎土には白色微粒が多く混え、色調は明赤褐色。221は薄く外方に開く口縁部をもつ。口径9.4cmを測る。胎土精良で淡褐色を呈す。222は高めの口縁部を有す。口径9cm、胎土には径1mm程の白色粒・赤褐色粒を含む。色調淡褐色を呈す。223は土師器壺である。口径16.4cmを測る。回転糸切りを施す。焼成は軟質で淡桃色を呈す。224は土師器壺の底部破片である。細く高い高台を有す。色調淡褐色。225・226は青磁碗である。225は体外間に蓮弁を持つ。胎土は淡灰白色を呈す。高台疊付より露胎で胎調は茶味をおびた緑色である。226は内外面無文である。灰色の胎土に青みをおびた淡緑色の釉をかける。釉は疊付の一部までかかる。228はミニチュアの瓦質三足土器である。蓋部は体部が内湾しながら立ち上がり、鋤の下で屈曲する。口縁部は内傾し端部を丸く収めている。調整は内外面共に屈曲部以下は指押え、以上は横ナデによる。胎土には雲母を若干含む、色調は白灰色を呈す。

(3) 土 坑

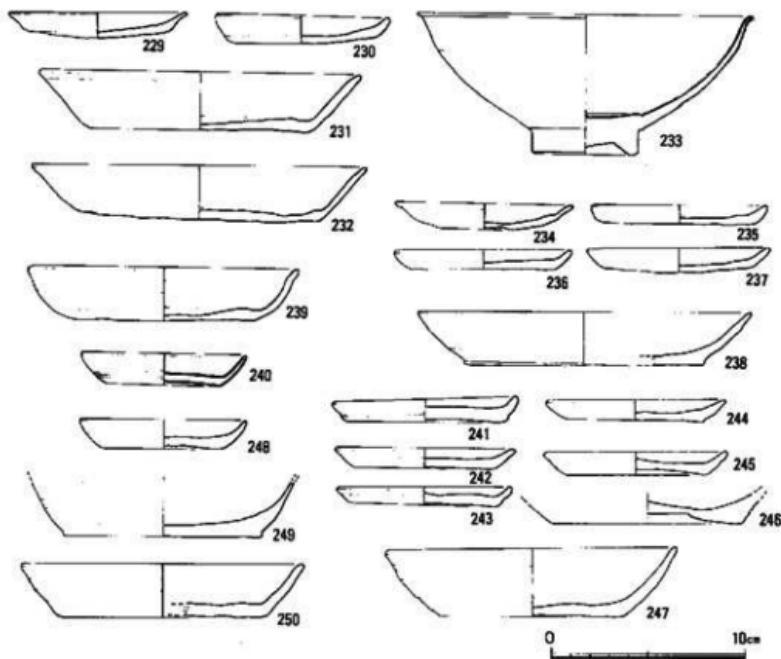
4区においてはピット群などと共に多数の土坑を検出し遺物を得た。本報告ではこの中の32基について構造及び出土遺物の説明を行う。

S K0112 (第46図) 調査区北側で検出した。上面径1.2m、底径0.7m、深さ0.35mを測る。ほぼ正円形の土坑である。底面は中央に向かって緩く傾斜している。土層はレンズ状に堆積し、炭化物を割合多く含む。遺物は床面より若干浮いた所で土師器・陶磁器が数個体埋置された状態で検出された。

出土遺物 (第47図229～233) 229・230は土師器小皿である。いずれも回転糸切りで板状圧痕を有す。色調は淡褐色を呈す。229は口径9.1cmを測る。口縁部が外反しながら広がる。胎土は緻密である。230は口径8.8cmを測る。焼けひずみがみられる。胎土に径1mm程の白色粒を含む。231・232は土師器壺である。いずれも淡褐色を呈し外底面に回転糸切り、板状圧痕を残す。231は口径16.5cm、器高3cmを測る。232は口径17.2cm、器高2.8cmを有する。233は青磁碗である。口径17.3cm、器高7.2cmを測る。内外面無文である。体部は上位で屈曲し口縁部を外方へ引き出す。内底見込みには沈線状の段を有する。胎土は青味をおびた灰白色で胎は淡緑色を呈す。体部下位より露胎となる。



第46図 SK0112・0114・0146・0211・0212実測図(1/40)



第47図 SK0112・0114・0146・0211・0212出土遺物実測図(1/3)

S K0114 (第46図) 調査区北側に位置する。径1.9m、深さ0.3mを測る正円形の土坑である。埋土は黒褐色土で、土師器の小皿・盆が上層より出土した。

出土遺物 (第47図234~238) 234~237は土師器小皿、238は壺である。234以外は回転糸切り、板状圧痕を有す。色調は淡褐色~褐色を呈す。胎土は精良で雲母を含む。234はヘラ切り、板状圧痕を有す。丸みをもつ底部より口縁部は外反して開く。口径9.2cmを測る。235は口径9cm、237は9.4cm、238は17.2cmを測る。

S K0146 (第46図) 調査区中央東側に位置する。2.4×1.6mを測る長方形土坑である。底面は平坦である。埋土中より炭化物が多く見られたが、特定部分への集中、広がりは認められなかった。上層はほぼ水平に堆積する。土師器、白磁破片等が出土する。

出土遺物 (第47図239・240) 239は土師器壺である。口径13.8cm、底径9.7cm、器高2.8cmを測る。外底面糸切りで板状圧痕は認められない。胎土に径1mm程の石英粒を含む。色調褐色を呈す。240は口禿げの白磁皿である。口径8.4cm、器高1.7cmを測る。体外面下位に浅い沈線が4条に入る。口縁端内面以外全体に施釉され、外底部は粗くカキ取る。釉調緑色を帯びた灰白色を呈す。

S K0211 (第46図) 4-2区で検出した。長辺3.7m、短辺2.5m、深さ0.2mを測る長方形の土坑である。主軸をほぼ南北にとる。床面に接して土師器が出土する。

出土遺物 (第47図241-247) 241-245は土師器小皿、246・247は土師器杯である。いずれも外底面回転糸切り、板状圧痕を有す。焼成良好で、褐色-淡褐色を呈す。小皿は口径8.7-9.3cmを測り、平均9cmである。247は口径14.7cm、器高3.7cmを測る。

S K0212 (第46図) 4-2区で検出した。南側を調査区に区切られる。検出面で幅1.7m、深さ0.3mを測る。底面は緩くぼむが凹凸はない。埋土中に焼土塊がみられた。出土遺物は土師器が少量である。

出土遺物 (第47図248-250) いずれも土師器。248は小皿、249・250は杯である。248は口径8.4cm、器高1.5cmを測る。回転糸切り、板状圧痕を有す。色調は黄味をおびた淡褐色を呈す。249・250は杯である。いずれも回転糸切り、板状圧痕を有するもので、焼成も良好である。250は口径14.1cm、器高2.7cmを測る。

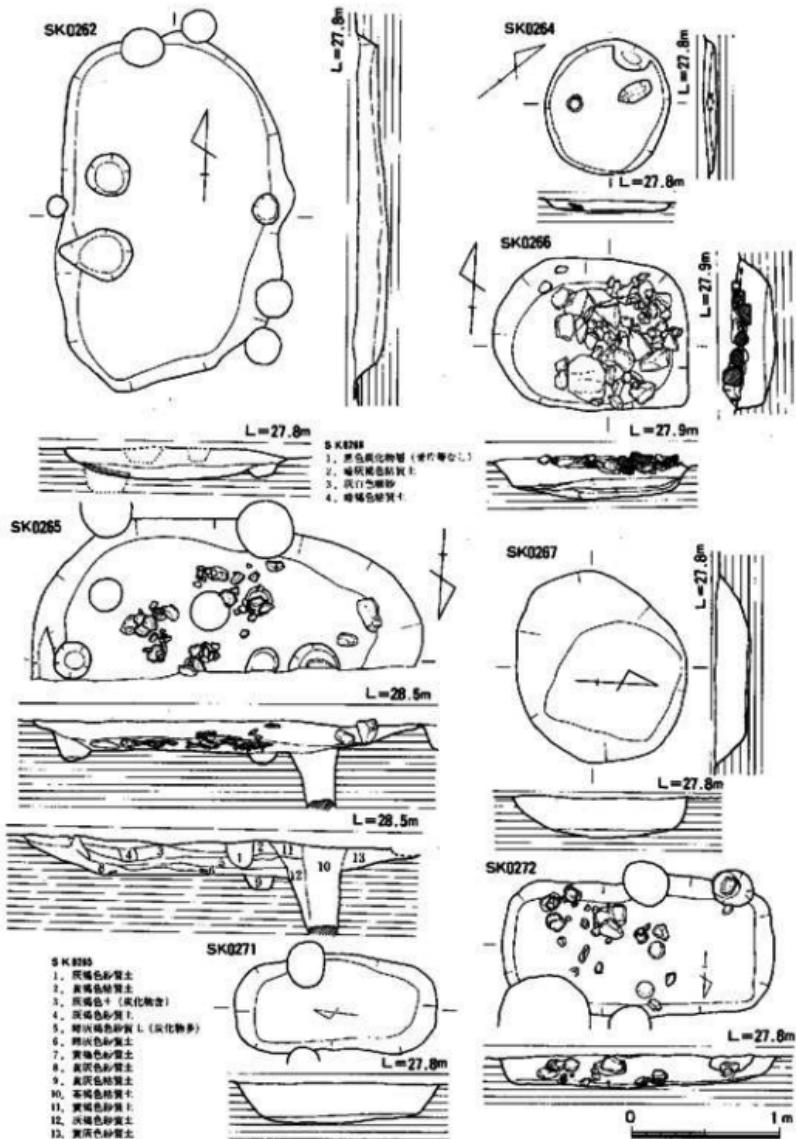
S K0262 (第48図) 調査区南側で検出する。長辺2.4m、短辺1.5mを測る隅丸長方形を呈す土坑である。断面浅皿状を呈し、深さは20cm程度である。上層はレンズ状に堆積する。遺物として、回転糸切り・板状圧痕を有す土師器、瓦器、須恵器、陶磁器等が破片で少量出土している。

S K0264 (第48図) 調査区中央南側より検出した。径0.9m程の略円形を呈す。底面はほぼ平坦で一部に緩い凹凸がある。土師器小皿が2枚組み合わさって出土した。その他土師器の杯も出土している。

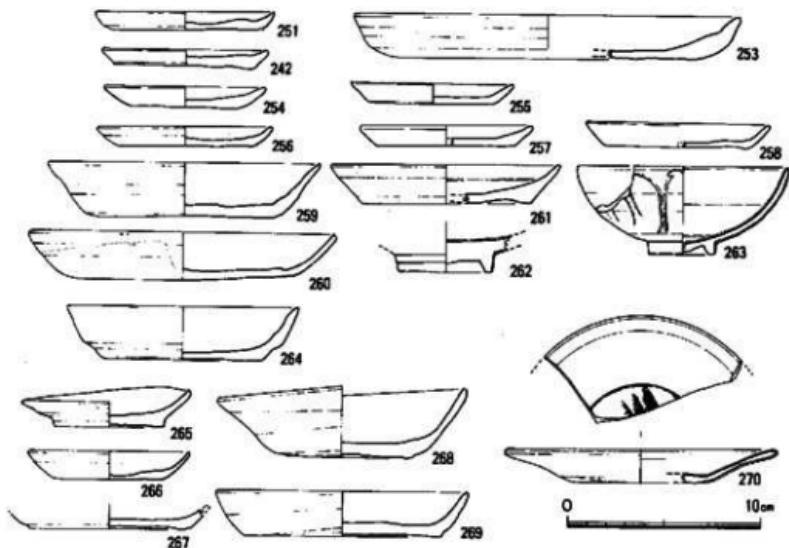
出土遺物 (第49図251-253) 251・253は土師器小皿である。251は口径9.2cm、器高0.9cmを測る。外面には煤が付着する。内面にも幅1cm程底面から口縁端まで煤が付着する。外底面回転糸切りで板状圧痕を有し、胎土には微砂粗、雲母が多く含み粗い感じがする。色調暗赤褐色を呈す。252は口径8.5cm、器高1cmを測る。外底面は回転糸切りで板状圧痕を有す。胎土は251同様で器面がざらざらしている。色調は明赤褐色を呈す。253は1/6程の破片からの復元である。口径20cm、器高2.3cmを測る。外底回転糸切りが残り、内底面は回転ナデの後不整方向にナデを施す。胎土は精良で色調は褐色、外底面淡黒褐色を呈す。

S K0265 (第48図) 調査区中央南端で検出する。南側は調査区外にのびる。調査区内で幅2.7mを測る。断面は浅皿状で深さは20cm程である。土層は水平に堆積し、主に下層で多くの炭化物と共に土器片が出土する。遺物はほとんどが回転糸切りで板状圧痕を有す土師器小皿・杯であり、陶磁器を數片まじえる。

出土遺物 (第49図254-260) 全て土師器である。254-258は小皿である。口径・器高はそれぞれ254は8.2cm・1.1cm、255は8.4cm・1.1cm、256は8.8cm・1cm、257は8.8cm・1cm、258は9.4cm・1.2cmを測る。255・258は黄味をおびた淡褐色、254・257は灰味をおびた褐色。259・260



第48図 SK0262・0264・0265・0266・0267・0271・0272実測図(1/40)



第49図 SK0264・0265・0266・0271・0272出土遺物実測図(1/3)

は壺である。259は口径13.8cm、器高2.7cmを測る。色調淡茶褐色を呈す。260は口径15.6cm、器高2.5cmを測る。淡灰褐色を呈し、口縁端面には薄く煤が付着している。254～260はいずれも外底面に回転糸切り、板状圧痕を有す。

S K0266 (第48図) 調査区中央南側に位置する。長径1.3m、短径1m、深さ0.3mを測る。土坑上面で東側2/3に自然礫を粗雑に敷く。また丁度石敷のない所では検出面より20cm程の所で2～3cmの炭層が広がっている。そしてその下層には灰白色の粗砂をこれもおよそ東側2/3全体に敷きつめている。形態より火葬墓の可能性が高いと思われるが、骨片等は出土していない。遺物は板状圧痕のない土師器細片、陶磁器等がある。

出土遺物 (第49図261～263) 261は土師器壺である。口径11.8cm、器高2cmを測る。回転糸切りを施し板状圧痕をもたない。胎土には径1mm以下の石英、長石粒及び雲母を多く含む。色調淡褐色。262・263は龍泉窯系青磁碗である。262は高台外面まで白味を帯びた淡緑色の釉を施す。内底見込みにはスタンプによる花文が認められる。263は小碗である。口径11cm、底径3.4cm、器高4.5cmを測る。小径の高台に丸みをもつ体部をもち、口縁端部は丸く收める。体外面には幅広の蓮弁を持つ。釉調は明るい白緑色である。高台疊付より外底面は露胎である。

S K0267 (第48図) S K0266の北側に位置する。径1.2mを測る略円形の土坑である。断面浅皿状を呈す。埋土は暗褐色粘質土で回転糸切り、板状圧痕を有する土師器の破片を含む。

S K0271 (第48図) 調査区中央東側に位置する。布掘の建物 S B1008を切る。長径1.3m、短径0.6mを測る。主軸はN-7°-Wをとる。断面浅皿状を呈す。土師器破片が出土する。

出土遺物 (第49図264) 土師器壺である。口径12cm、器高2.7cmを測る。外底面回転糸切り、板状圧痕を有す。胎土には石英・長石粒を混える。色調淡褐色を呈す。内底の一部及び口縁端内面の一部黒変する。

S K0272 (第48図) S K0271に切られ布掘り建物 S B1008を切る。長径1.9m、短径0.9mを測る隅丸長方形を呈す。S K0271には直交し主軸N-87°-Eを取る。深さ20cmを測り、断面形は箱形である。埋上より土師器小皿、壺、青磁が出土する。形態より土坑墓と考える。

出土遺物 (第49図265-270) 265・266は土師器小皿である。265は口径8.4cm、底径5.6cm、器高2.1cmを測る。小径の底部より口縁部は外方に開く。266は口径8.2cm、器高1.5cmを測る。いずれも回転糸切りで板状圧痕はみられない。色調淡赤褐色を呈す。266-268は土師器壺である。268は口径12.5cm、器高3.6cmを測る。269は口径10cm、器高2.3cmを測る。いずれも回転糸切りで板状圧痕を有す。胎土は精良で色調は褐色を呈す。270は同安窯系青磁壺である。口径14cmを測る。体部中位で屈曲し外反しながら外方へ伸びる。内底見込みには構造工具によるジグザグの文様が入る。屈曲部以下は露胎である。釉は青味の強い淡緑色を呈す。

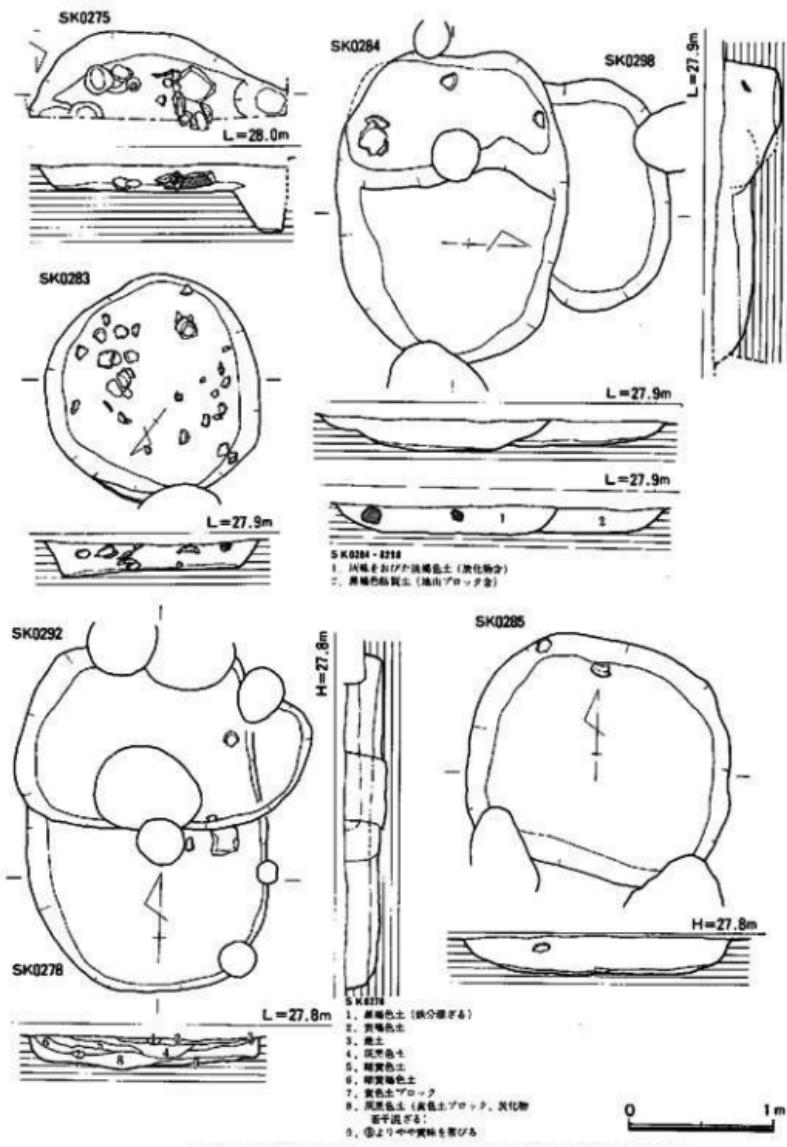
S K0275 (第50図) 調査区中央南端に位置する。南側は調査区外に伸びる。調査区内での幅1.7m、深さ0.2mを測る。東側にピット状の掘込みを有する。底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土で拳大～人頭大の自然礫と共に土師器・陶磁器を含む。

出土遺物 (第52図271～273) 272は土師器壺である。口径17.2cm、器高3.3cmを測る。口縁部は大きく開く。外底部は回転糸切り、板状圧痕を有す。胎土に石英・長石粒を若干混える。色調淡褐色を呈す。やや軟質。271は白磁皿である。口径9.5cm、器高2.4cmを測る。輪状の高台を有し、口縁部はやや外反させる。内底面は輪状に釉をカキ取る。体部下位より露胎となる。釉調は緑がかかった白色である。273は同安窯系青磁皿である。内底部にはヘラと構状工具による花文が施される。外底は露胎となり、露胎部暗灰色を呈す。釉はガラス質の淡緑色である。

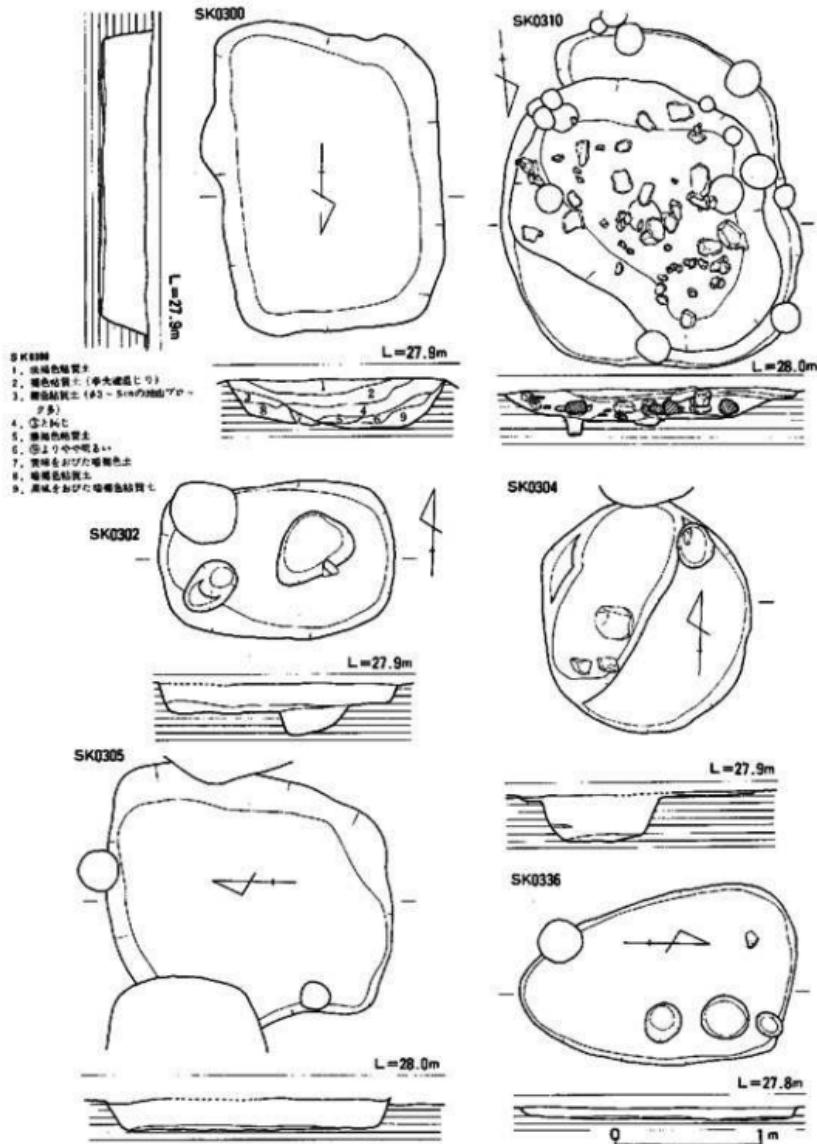
S K0278 (第50図) 調査区東側に位置する大型建物 S B1004に切られる。長径2.5m、短径1.5mを測る長方形土坑である。底面は平坦で深さは20cm程である。土層はおおよそソレンズ状に堆積する。出土遺物は細片が多いが、底部回転糸切り、板状圧痕を有す土師器、黑色土器A類、陶磁器がある。

出土遺物 (第52図274) 青磁皿である。口径9.3cm、器高2cmを測る。底部は上底で露胎となる。体部は中位で屈曲し、口縁端部は丸く納める。内底部にヘラと構状工具による花文が施される。釉はガラス質のオリーブ色を呈し、全面に水裂がみられる。

S K0283 (第50図) 調査区東南隅に位置する。径1.5mを測る円形土坑である。底面は平坦であるが西から東に向かって若干傾斜する。出土遺物はほとんど土師器の小皿、壺であり、回



第50図 SK0275・0278・0283・0284・0285・0292・0298実測図(1/40)



第51図 SK0300・0301・0302・0304・0305・0336実測図(1/40)

転糸切り、板状圧痕を有する。

出土遺物（第52図275～280） 275は青磁皿である。外底はほぼ平底で露胎である。体部下位で緩く屈曲し若干外反しながら口縁端部に至る。内底面の境に段をつくる。内底無文である。釉調は青味をおびた白緑色を呈す。276・277は土師器小皿。口径9.6cm・11.1cmを測る。いずれも回転糸切り、板状圧痕を有す。色調は276が淡褐色、277が明赤褐色を呈す。277は口縁端一部が黒変する。278～280は土師器壺である。いずれも回転糸切り、板状圧痕を有し、淡赤褐色～淡黄白色を呈す。口径はそれぞれ12.2cm・13.8cm・16.2cmを測る。

S K0284（第50図） 調査区東南隅で検出した。長径2m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。南北断面は浅皿状を呈す。また東側に一段平坦面をもち、西側は20cm程の二段の掘り込みを有する。埋土には拳大の自然礫を若干含み、出土遺物には土師器、瓦器、陶磁器等がある。

出土遺物（第52図281～286） 281・282は土師器小皿、283は壺である。いずれも回転糸切り・板状圧痕を有す。281は口径8.4cm、器高0.9cm、282は口径9.1cm、器高1.3cm、283は口径11.8cm、器高3.3cmを測る。284・285は瓦器壺である。284は口径15.2cm、器高5.5cmを測る。体部中位で屈曲し、口縁部は若干外反する。内面及び体外面上半は淡黒色、その他灰白色を呈す。285は口径17.4cm、器高5.4cmを測る。体外面は粗い横位のミガキが施され、淡黒色を呈す。内面はナデ調整され、口縁端部は淡黒色、それ以下は黄味を帯びた灰白色を呈す。286は龍泉窯系青磁碗である。体外面に鶴蓮弁を削り出す。にぶい緑色釉を高台疊付まで施す。胎土は灰色を呈す。

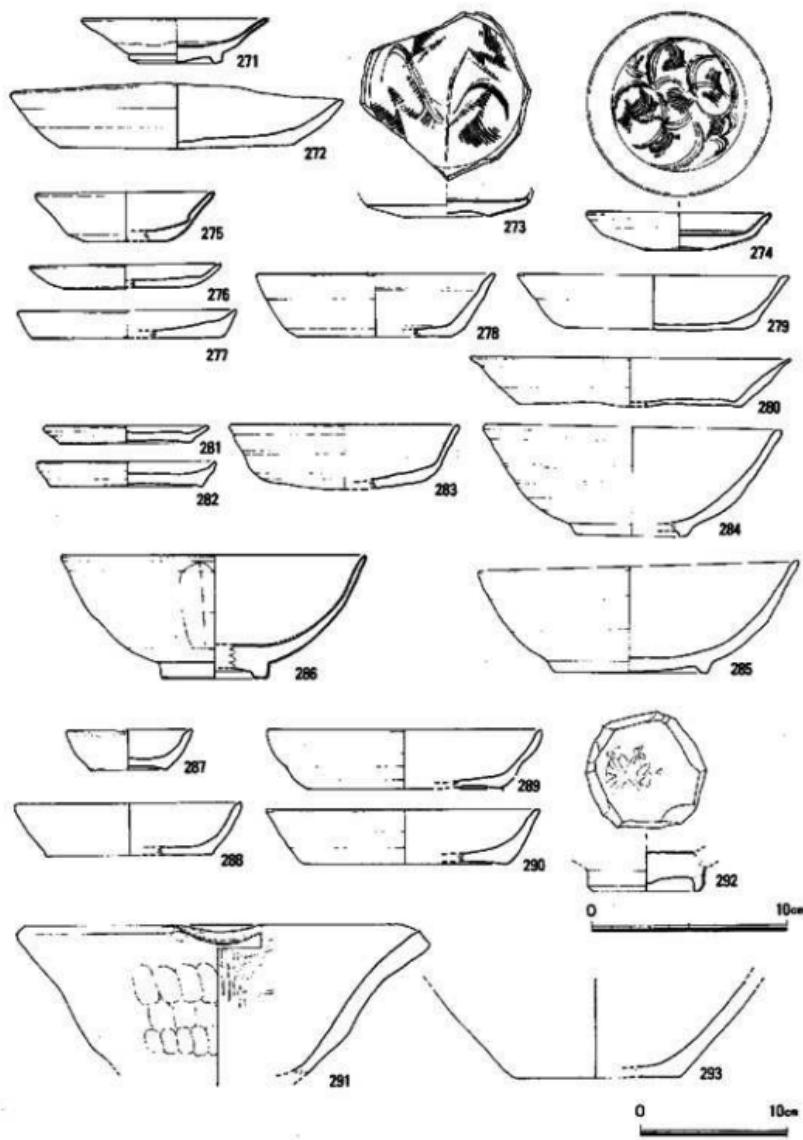
S K0285（第50図） 調査区南東隅に位置する。上面径1.8m、深さ0.3mを測る平面円形の土坑である。断面浅皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。拳大～人頭大の自然礫が埋土中に入り込む。底面は凹凸が著しい。出土遺物には、回転糸切り、板状圧痕を有する土師器小皿、壺、龍泉窯系青磁を中心とした陶磁器類がある。

S K0292（第50図） S K0278を切り、大型建物S B1004に切られる。長辺1m、短辺0.6mを測る隅丸長方形の土坑である。断面形は浅皿を呈す。遺物は少量であるが、回転糸切りで板状圧痕を有する土師器小皿、壺の細片が出土する。

S K0298（第50図） 調査区南東隅に位置し、S K0284に切られる。長軸0.8mを測る隅丸長方形の土坑である。断面形は浅皿状で深さは20cm程である。遺物は回転糸切り、板状圧痕を有す土師器小皿、壺が少量出土した。

S K0300（第51図） 調査区中央西側で検出する。方形状に区画するS D0400に後出する土坑である。周間にS K0309など同様の形状、埋土を示す土坑が数基存在する。長辺3m、短辺2.2m、深さ0.5mを測る。平面長方形、断面箱形を呈す。出土遺物は少量であり土師器・陶磁器細片のみ。

S K0301（第51図） 調査区中央西側で検出する。径3m程の略円形の土坑である。深さは0.3mで、断面形浅皿状を呈す。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は暗黒褐色土で人



第52図 SK0275・0278・0283・0284・0301出土遺物実測図(1/3、1/4)

頗るの碟を含む。いずれも土器を割合多く含む。

出土遺物（第52図287～293） 287～291は土師器である。287は小皿bである。口径6.5cm、器高2cmを測る。口縁端部1/3程に煤の付着がみられる。色調淡褐色を呈す。288～290は壺である。口径は11.6cm、14cm、14cmを測る。いずれも外面に回転糸切り、板状圧痕を有す。291はすり鉢である。口径27.2cmを測る。体外面には指頭痕が残り、外面口縁端部より内面上半には横方向のハケメが施される。内面には5本1単位のすり目を有す。胎土には径1～2mmの石英、長石粒を含み、色調淡赤褐色を呈す。292は青磁碗の底部破片である。淡白緑色釉が高台外面まで施される。内底面にはスタンプによる花文を有す。293は陶器のすり鉢である。外面は粗いナデ、内面には8本1単位のすり目を有す。体外面淡茶褐色、内面青灰色を呈す。

S K0302（第51図） 調査区南西部に位置する。長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。床面は平坦で東側に径40cm、深さ20cm程の浅い掘り込みがみられる。埋土は暗褐色粘質土で、土師器、瓦器塊、磁器の破片が出土。

S K0304（第51図） 調査区南西部に位置する。S K0305を切る。径1.5m程の円形土坑である。西側に深さ30cm程の掘り込みがみられる。上層に挙大の碟を若干含む。糸切り、板状圧痕を有する土師器破片が出土。

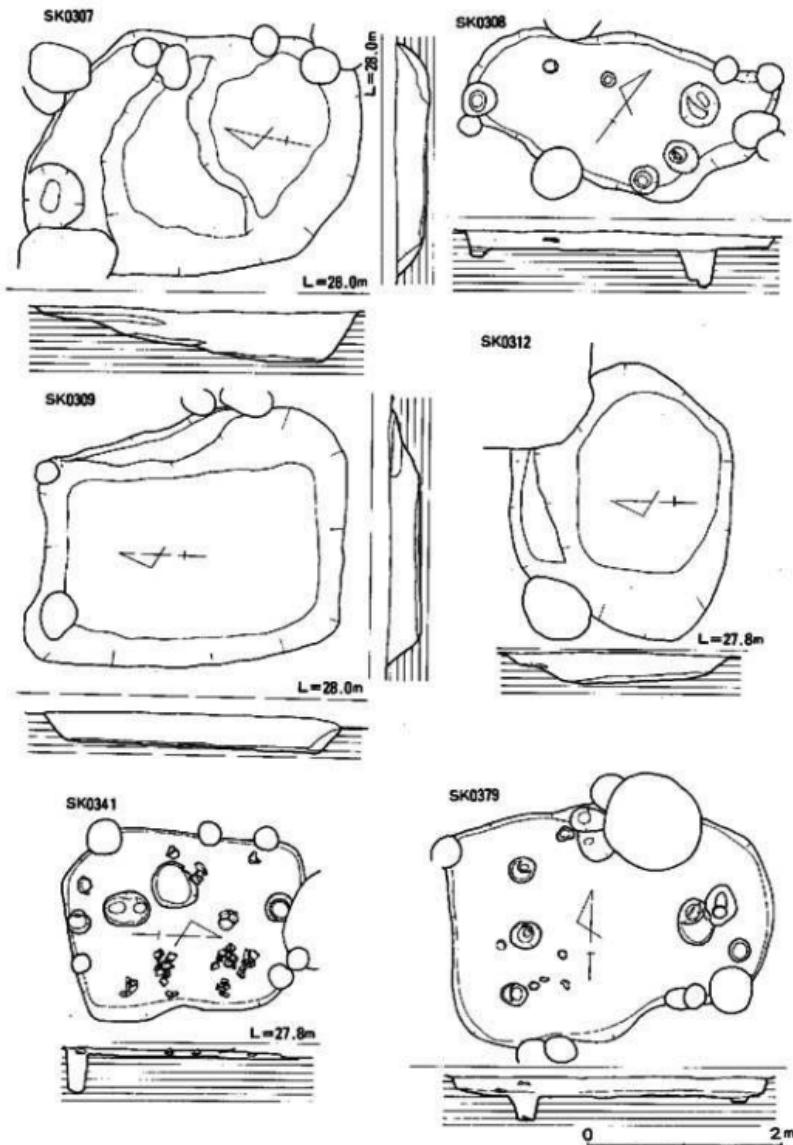
S K0305（第51図） S K0302、0304に切られる。長軸2m、短軸1.7mを測る隅丸長方形の土坑である。主軸をほぼ南北にとる。深さは20cm程で浅皿状の断面形をとる。回転糸切りを有する土師器、陶磁器が出土。

S K0307（第53図） 調査区中央西南端に位置する。長軸3.5m、短軸2.4mを測る。断面は階段状を呈し、北より二段の平坦面を持つ。平坦面は最大幅60～80cm程で緩やかに南に傾斜する。南側の最深部は緩くくぼみ、深さは検出面より50cmを測る。遺物は回転糸切り、板状圧痕を有する土師器小皿・壺、東播系の須恵器鉢、陶磁器、石鍋等が出土するが細片がほとんどであり、總量は少ない。

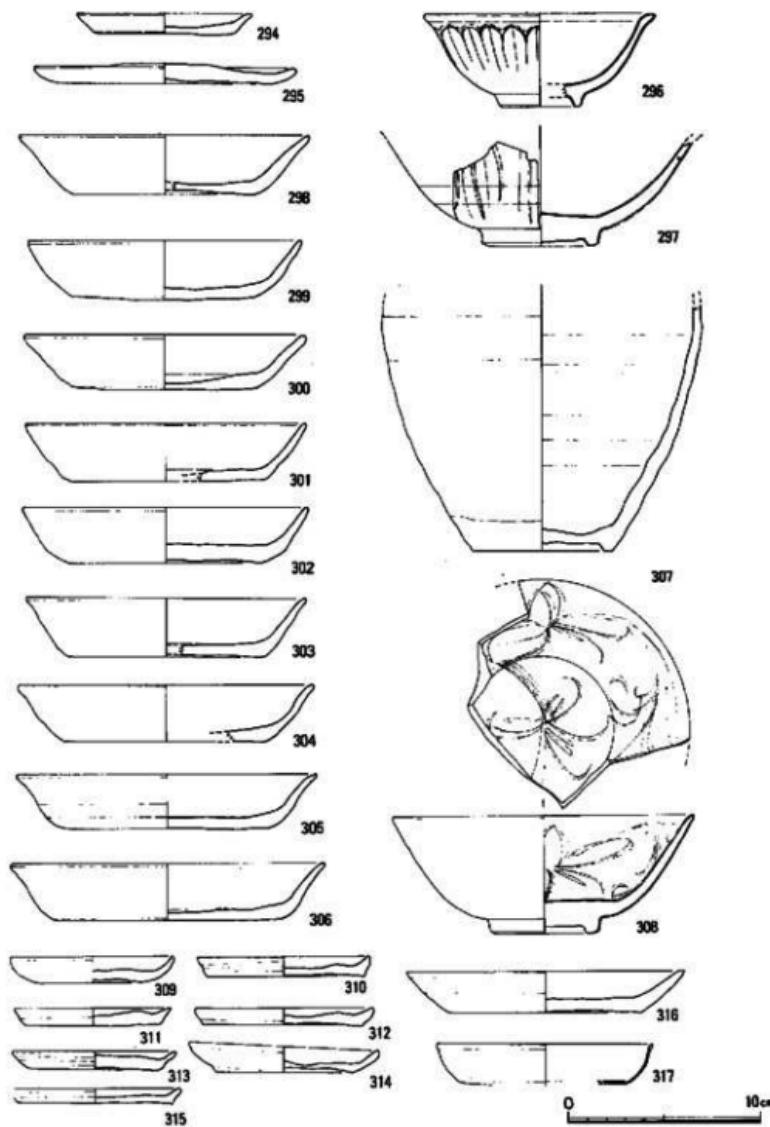
S K0308（第53図） S K0307の東側に位置する。長軸3.2m、短軸1.5mを測る。深さ20cm程で、底面は平坦である。底面まで掘り下げた所でピットを検出した。埋土は黄褐色土のブロックを混えた暗褐色粘質土である。

出土遺物（第54図294～297） 294は土師器小皿である。口径9cm、器高1cmを測る。器面が磨滅する。295は土師器皿。口径10.3cm、器高1.1cmを測る。外底部に回転糸切り、板状圧痕を有する。共に胎土に径1mm程の白色粗砂、雲母をまじえる。296・297は龍泉窯系青磁である。296は小碗で口径12cmを測る。小さめの底部より体部は丸みをもち、口縁端部を外反させる。体部外面に純い運弁を有す。高台疊付は赤変し、それ以外には青味をおびた淡緑色釉がかけられる。297は体外面に錦運弁をもつ碗である。高台外面まで黄味をおびた明緑色釉をかける。

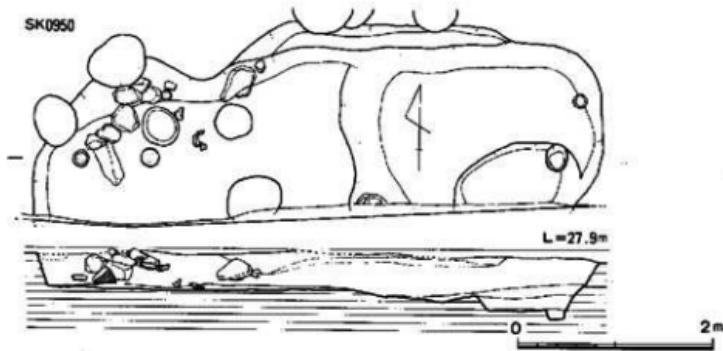
S K0309（第53図） 調査区中央西側、S K0300の東で検出する。長軸3m、短軸2.6m、深



第53図 SK0307・0308・0309・0312・0341・0379実測図(1/60)



第54図 SK0308・0336・0341・0379出土遺物実測図(1/3)



第55図 SK0950実測図(1/60)

さ0.3mを測る。遺物は少量で土師器、陶磁器が出土する。形状・出土遺物等SK0300に非常によく似ている。

SK0312 (第53図) SK0300の南に位置する。2.8×2.3mを測る長円形の土坑である。北側に一段平坦面を持つ、底面は径約1.5m程の円形で緩やかに中央に向かってくぼんでいる。土師器・陶磁器細片が出土。

SK0336 (第51図) 調査区中央東側で検出した。長軸1.8m、深さ0.1mを測る。

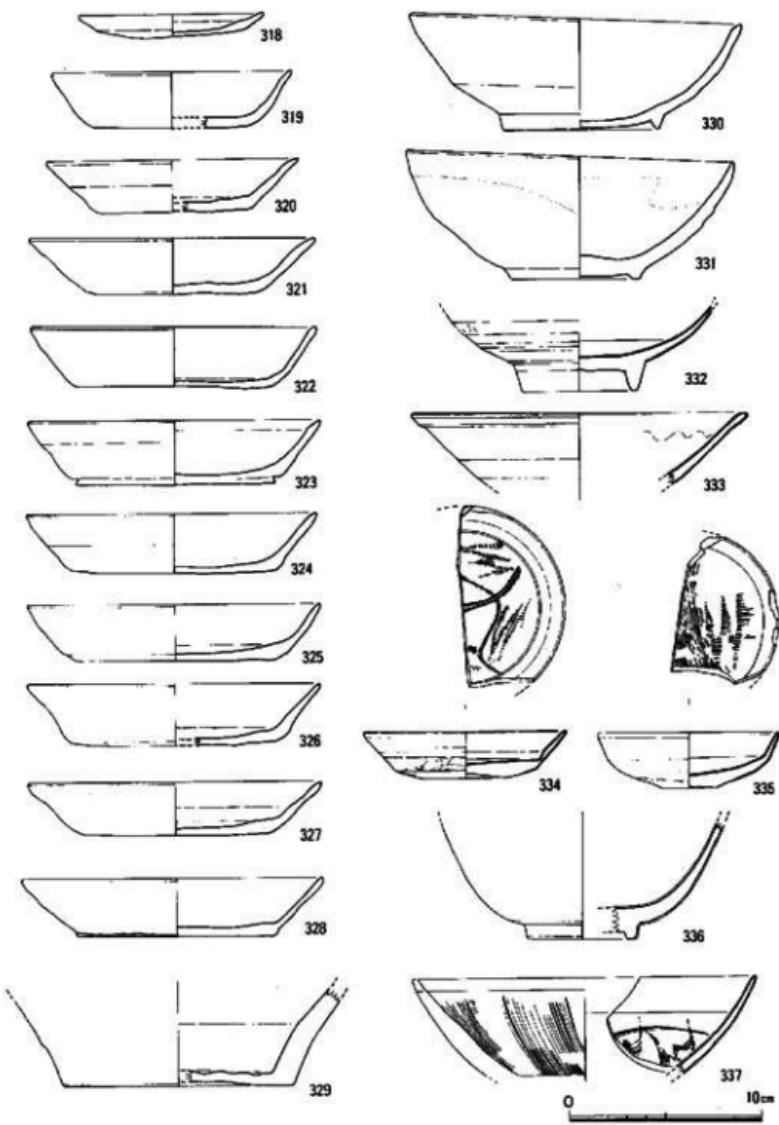
出土遺物 (第54図298) 土師器壺である。口径14.8cm、器高3cmを測る。外底部回転糸切りが残る。胎上に径2cmほどの白色砂粒・雲母を混える。色調褐色。

SK0341 (第53図) 調査区中央東側に位置する。布掘り建物SB1008を切る。長軸2.4m、短軸2m、深さ0.1m弱の長方形を呈する浅い土坑である。埋土は暗褐色土で土師器・陶磁器等の遺物が出土する。

出土遺物 (第54図299~308) 299~306は土師器壺である。口径14~15.8cmを測る。平均口径14.8cmである。色調は300が明赤褐色、その他が褐色を呈する。器面が磨耗しているものもあるが、いずれも外底部回転糸切り、板状圧痕を有する。307は外面濃オリーブ色を呈する陶器の壺である。内面は茶味をおびてオリーブ色である。底部は露胎で明赤褐色を呈する。308は龍泉窯系青磁碗である。口径15.4cm、器高6cmを測る。内面に片彫りの草花文を有す。高台外面まで施釉される。釉調は青味をおびた淡緑色。胎土は青灰色で密である。

SK0379 (第53図) 調査区中央東側に位置する。掘立柱建物SB1010を切る。長軸3.3m、短軸2.4mを測る不整の長方形土坑である。深さは20cm程度で断面浅皿状である。埋土は暗褐色土で出土遺物には土師器小皿・壺及び銅鏡が出土する。

出土遺物 (第54図309~317) 309~315は土師器小皿である。外底面は回転糸切り、板状圧



第56図 SK0950出土遺物実測図(1/3)

痕を有し、色調淡褐色～淡黄褐色を呈す。焼成は良好である。口径8～9.7cmを測り、平均8.7cmである。316は土師器環である。口径14.4cm、器高2.1cmを測る。外底面に回転糸切り、板状圧痕を残す。色調淡褐色を呈す。309～316は胎土にいずれも径1～2mmの白色粒及び雲母を多く含む。317は銅鏡である。1/4程の破片であり、復元口径11cm、器高2cmを測る。全体に非常に薄手であるが、もろい印象は与えない。平坦な底部より体部は内湾させながら伸び、口縁部を肥厚させる。残存部分の体部中位に1ヶ所径1mm程の孔が穿たれている。

S K090 (第55図) 濃査区南東隅に位置する。南側は濃査区外に伸びる土坑である。検出面での幅5.7mを測る。西側に一段平坦面をもち、その上層より拡大～人頭大の礫と共に多くの土器が出土した。また東側においても幅1.3m程の落ち込みがみられる。埋土は暗褐色粘質土で全体に遺物が多く出土した。

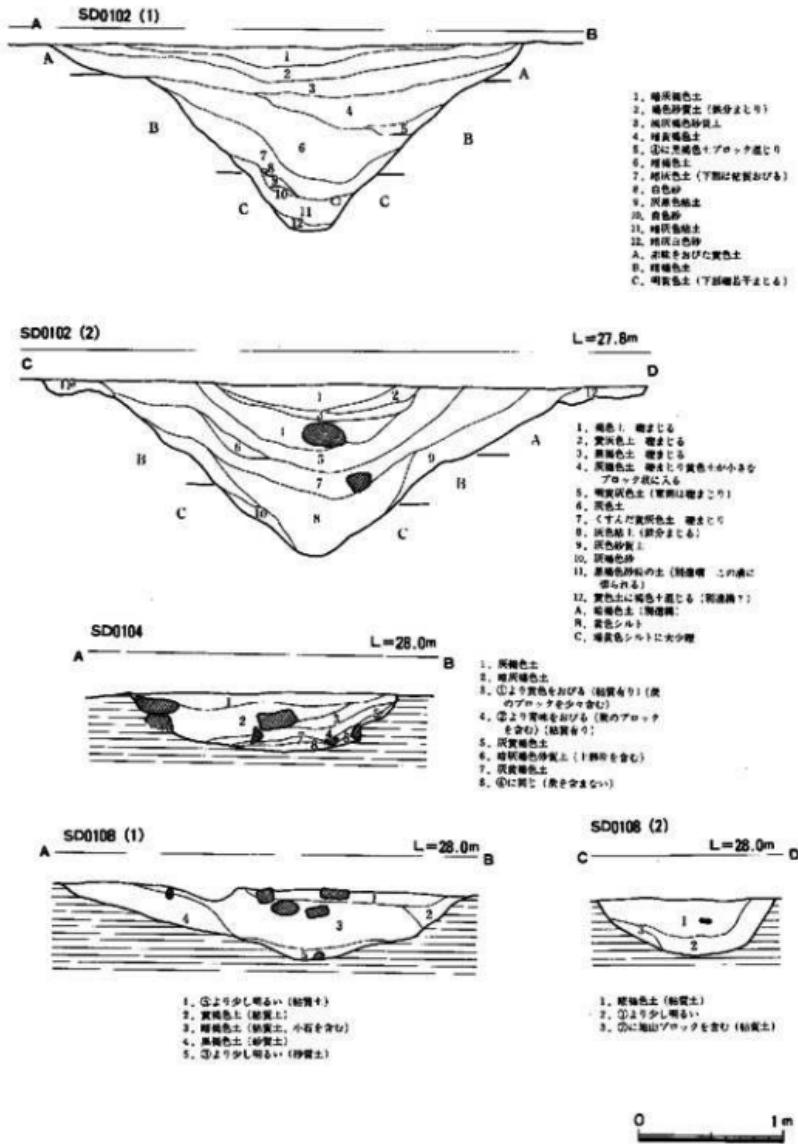
出土遺物 (第56図) 318は土師器小皿である。口径9.5cm、器高1.2cmを測る。丸みを持つ底部に口縁部は外方へ開く。外底面ヘラ切りで板状圧痕を有す。319～328は土師器環である。口径12.4cm～15.3cmを測る。平均口径14.5cmである。全て回転糸切りにより、322以外には板状圧痕が残る。色調は淡黄褐色を呈すものが多い。324は暗赤褐色を呈し、外面は一部明橙色に発色し煤が付着する。330・331は瓦器塊である。330は口径17cm、器高5.8cmを測る。体部は横ナデ調整による。色調は淡褐色を呈し、体外面は1/2程黒褐色を呈する。331は口径16.9cm、器高6.7cmを測る。体部内面にこてあて痕が残る。体部外面上半は横ナデ、下半には指頭痕を有す。色調は黄白色、口縁部外面の1/2は黒褐色を呈す。

329は陶器の壺底部である。残存部は全て露胎で明赤褐色を呈す。胎土には径1mm以下の砂粒をまじえやや粗い。

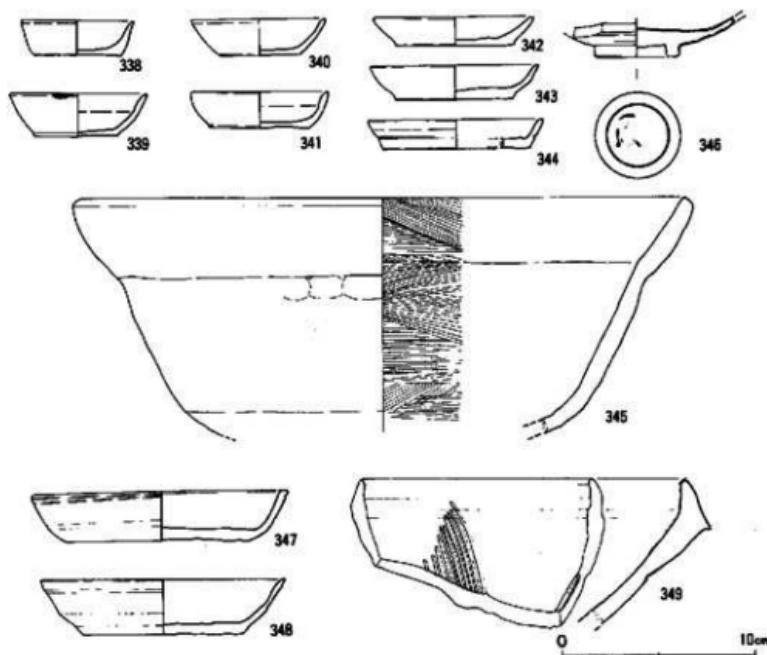
332・333は白磁である。332は内底見込みに浅い沈線を有し、高台胎まで灰白色釉を施す。胎土は灰白色でやや粗い、333は開き気味に伸びる碗口縁部。口径17.4cmを測る。胎は暗白色、胎土は白色を呈す。334～337は青磁である。334・335は皿であり、口径は10.4cm・9.4cmを測る。共に内面に花文を有する。334は白味の強い淡緑色を呈す。底部は露胎である。335は体部下半より露胎で鈍い緑色を呈する。336・337は碗である。336は龍泉窯系で、内面に飛雲文を有す。高台疊付まで明緑色釉が施される。337は同安窯系で体部外面に櫛目、内面に花文を有する。口径17.8cmを測る。釉調は淡白緑色。

(4) 溝

S D0102 (第57図) 3区より伸びるS D0060及び大型建物S B1003を切って掘削される。濃査区北西部で矩形に折れまがり、35m程東で急激に立ちあがる。区画を意識した溝と考えられ、居館的性格をもつものであろう。幅3m～5m、深さ1.3m程を測り、断面V字形を呈す。溝は疊層中も掘削されている。埋土は基本的にレンズ状に堆積する。最下層には黒色～暗灰色の粘土が20～40cm程堆積しており、溝水状態がうかがわれる。また中層に地山の黄褐色土のブ



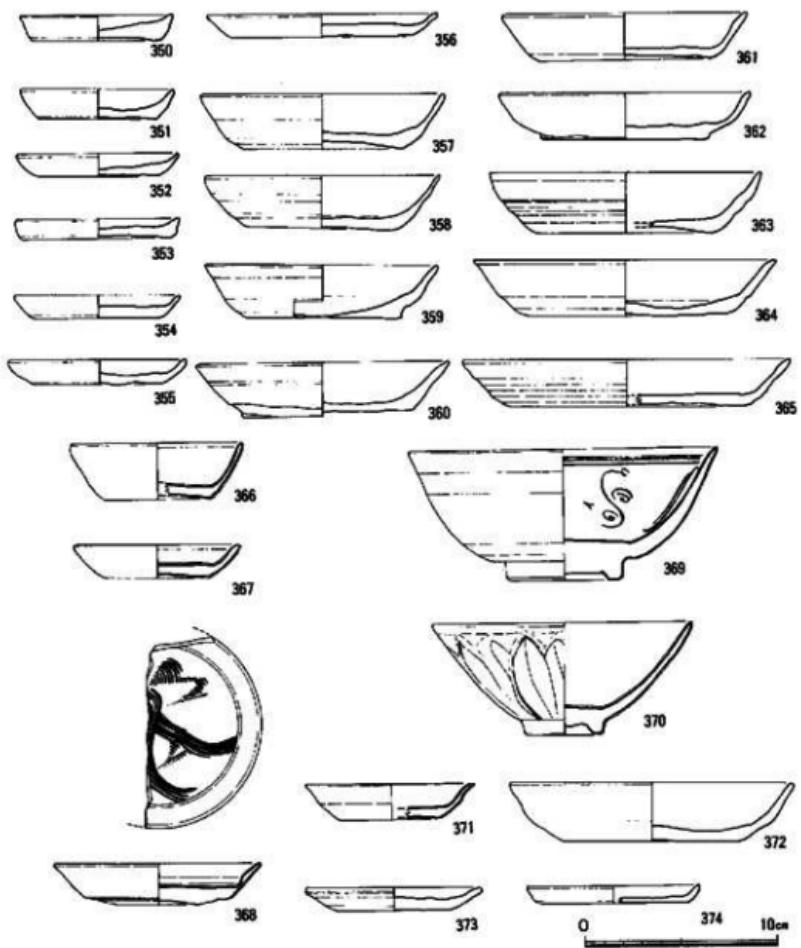
第57図 SD0102・0104・0108土層断面実測図(1/40)



第58図 SD0102・0104出土遺物実測図(1/3)

ロックを含む層が検出されており、土星の存在も考えられる。出土遺物には土師器、瓦器、陶磁器がある。陶磁器は破片が多いが青磁には龍泉窯系の輪廻弁をもつもの、白磁はV類のものが多くみられる。また口禿げのものも出土する。遺物の総量は少ない。

出土遺物（第58図338～346） 338～345は土師器である。338～341は小皿bである。口径は5.7cm、6.9cm、7cm、7.1cmを測る。338～340は外底回転糸切りが残り、色調淡褐色を呈す。341は回転糸切り、板状圧痕を有す、色調赤褐色。342～344は小皿a。口径は8.1cm、8.6cm、8.8cmを測る。外底面にはいずれも回転糸切り痕が残る。343のみ板状圧痕を有す。色調は342が赤味をおびた褐色、343・344が灰褐色を呈す。345は土鍋である。口径30.8cmを測る。口縁部は緩く外湾しながら立ちあがる。内面には横ハケが密にはどころされ、外面には横ハケが痕跡的に残り、屈曲部には指頭痕が残る。色調は淡赤褐色。体外面には全体に煤が付着する。346は白磁皿である。径4cmの輪状の高台を有し、疊付より露胎である。胎土白色、釉調やや黄味をおびた明白



第59図 SD0108・0109・0400出土遺物実測図(1/3)

外底面に墨書が認められる。

S D0104 (第57図) S D0102の立ちあがり部より、ほぼ直交して南北に伸びる溝である。幅1.8m、深さは0.4m程である。断面浅皿状であるが底面は凹凸が残る。埋土は灰褐色土が主

体であり、人頭大の碟を溝中に多量に含む。S D0102と共に回繞の溝とも考えられる。溝の規模・埋土は異なるが同一の区画溝であろう。また溝中より検出した碟より石垣の存在も考えられる。遺物は少量であり、土師器・青磁・口禿げを含む白磁が出土する。

出土遺物（第58図347～349） 347・348は上師器皿である。口径は13cm、12.5cmを測る。外底面は回転糸切りを施し、板状圧痕はない。349は備前すり鉢である。口縁端部は内傾し、外面にも若干突出する。IV期に属するものであろう。体外面は赤味をおびた暗紫色、内面は灰味をおびた暗褐色を呈す。

S D0108・0109（第57図） S D0102に3～5mの間隔をおいて南北に並走する溝である。共に幅1.5m、深さ0.4m程度を測る。埋土は暗褐色土である。S D0108はS D0109に先行すると思われるが、明瞭な切り合い関係、遺物からの時期差は認められない。溝の掘りなおし等が考えられる。遺物はS D0108より割合多く出土し土師器小皿・壺・陶磁器等が出土する。

出土遺物（第59図350～372） 350～370がS D0108、371・372がS D0109の出土遺物である。350～355は土師器小皿である。口径は7.7cm、7.7cm、8cm、8.3cm、8.5cm、9.2cmを測る。平均8.2cmである。いずれも外底面は回転糸切りを施す。350・351・353には板状圧痕が認められない。色調は354のみ淡黒褐色を呈し、その他は赤味をおびた淡褐色である。356～365は土師器壺である。口径は11.9cm～17cmを測り、平均13.6cmである。色調は淡褐色～褐色を呈す。外底面は回転糸切りで、361・362は板状圧痕が認められない。366・367は口禿げ白磁壺である。366は口径8.8cm、器高2.9cmを測る。体部外面下位より釉をかき取る。釉調はやや青味をおびた白色である。367は口径8.2cm、器高1.7cmを測る。全面に黒味をおびた灰白色釉をかける。368は同安窯系青磁壺である。内底面には櫛状工具による花文が施される。体部外面下位には回転ヘラケズリが施され、以下露胎である。釉はガラス質の淡青緑色である。369・370は龍泉窯系青磁碗である。369は口径15.9cm、器高8.7cmを測る。体部内面に飛雲文を施し、内底面は無文。外底面は釉をカキ落とす。釉調は青味をおびた淡緑色を呈す。370は口径13.5cm、器高5.7cmを測る。体外面に蓮瓣弁を浮彫りにする。外底面露胎で、釉調明青緑色を呈す。

371は口禿げ白磁壺である。口径8.7cmを測る。全面に暗白色釉を施す。372は土師器壺である。口径14.6cmを測る。板状圧痕を持たない。

S D0400 洪査区中央、東西10m、南北8mの範囲で区画する溝である。幅50cm、深さ10～20cmを測る。区画内の施設については明確にし得ないが、並列するS K0300、0309等と関連を持つことも考えられる。

出土遺物（第59図373・374） 土師器小皿である。373は口径9.2cm、器高1.3cm、374は口径9cm、器高0.9cmを測る。外底面は回転糸切りで板状圧痕を有する。

6 5区の調査

1) 概要

本区は道路・用水跡等構造物に伴う調査区である。調査面積は950m²で、標高は28.80m前後を測る。

遺構面は耕作土直下の黄褐色粘質土で、調査区全体に近・現代の擾乱が著しい。

調査区の中央南寄りからは近世の道路上の遺構を、南側からは縄文時代の溝状遺構1条、古墳時代の住居跡1軒、時期不明のピットを検出した。北側には中世のピット、土坑が散在していた。

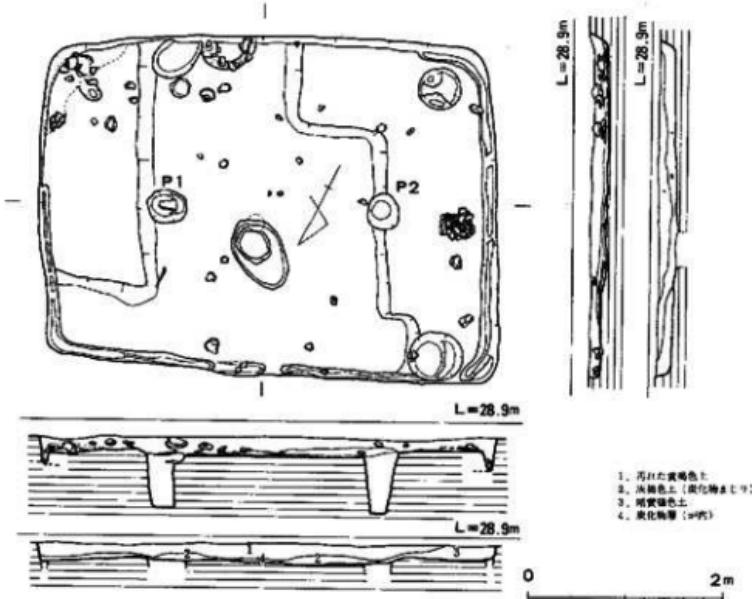
なお、4区において検出した居館を囲む矩形の溝の本調査区への延長が当初予想されていたが未検出に終わった。居館の範囲を把握する上での一助となろう。

2) 遺構と遺物

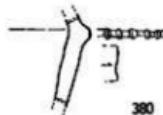
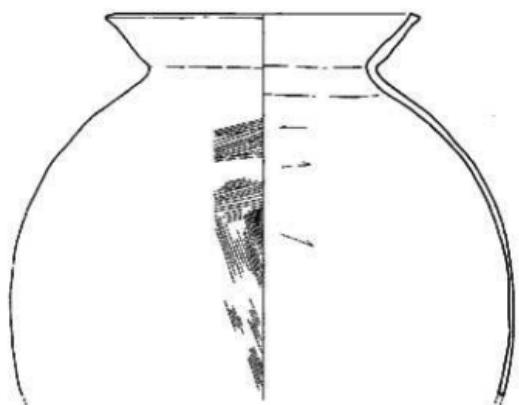
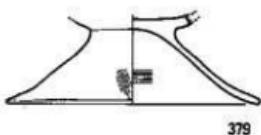
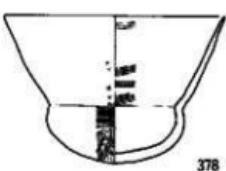
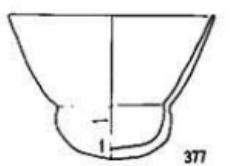
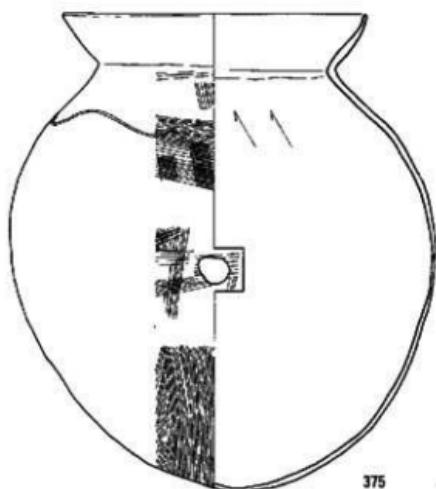
(1) 坪穴住居

S C0701(第60図) 本調査区の南端で検出された住居跡である。

北東壁長3.15m、南東壁長4.5m、北西壁長4.6m、南西壁長3.45mを割り、長軸を北東・南西にとる長方形プランを呈する。壁の残存高は約15cmである。壁に沿って幅10~15cm、深さ10~



第60図 清末遺跡群5区SC0701実測図(1/60)



0 10cm

第61図 SC0701、SD0742出土遺物実測図(1/3)

15cmの周溝が部分的に立ち上がりながら、北東壁の一部、北西壁の大半及び南西壁から南東壁のコーナーにかけて巡っている。

北東壁沿いと南西壁から南東壁の一部に沿ってL字状に作り付けのベッド状遺構が付設される。前者は幅約90cm、高さ約6cm、後者は幅80cm~95cm、高さ約4cmを測る。

かは床面の中央からやや北西寄りに位置し、75cm×50cmの楕円形で、深さ約10cmを測り、二段掘りを呈する。炉内は炭化物が充填しており、一段目の段上の一部には焼土が認められる。

柱穴は主軸上に対峙するP1とP2を検出した。2本柱の主柱穴と考えられる。柱間は約2.2mで、P1は径約40cmの二段掘りで、深さは52cmを測る。P2は径約35cmで、深さは55cmを測る。

南西壁の西隅及び、南東壁沿いの中央や北東寄りに計4基の土坑が検出された。前二者はベッド状遺構上に掘り込まれており、西隅の土坑は径約50cm、深さ33cmを測り、二段掘りで上面より土器が出土している。南隅の土坑は径約45cm、深さ9cmを測る。後二者は切り合っており、新しい土坑は径約40~50cmの楕円形で、深さ10cmを測る。古い土坑は径約25×55cmの半円形で、深さ14cmを測り、上面より土器が出土している。

なお、北東壁沿いのベッド状遺構の東隅に焼土が検出されている。

埋土はレンズ状の堆積を示す。

遺物は土師器の甕、小型丸底壺、高杯、鉄器などがあり、いずれも床面よりやや浮いた状態で出土している。出土土器より本遺構は古墳時代前期の所産と考えられる。

出土遺物(第61図375~379) 375・376は楕形土器である。375はほぼ完形に近く、口径15.4cm、器高24.4cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部内側はつまみ上げるがやや不明瞭に九く突出している。胴部はやや張りのある楕円形で、底部はやや尖り底となる。口縁部外面は横ナデ、胴部外面はハケを施すが、上半部と下半部では原体が異なる。上半部は下半部に比して条間の広い原体を用いており、縦方向のハケのち横方向のハケを行っている。下半部は縦及び斜め方向のハケを行う。口縁部内面は横方向のハケのちナデを行い、胴部内面は斜め方向のヘラ削りを施す。肩部にはヘラ描きの1条の波状文を施す。胴部最大径下に焼成後と思われる外側からの穿孔が一個認められる。色調は内外ともに暗茶褐色で外面には黒斑及び炭化物の付着が認められる。胎土には1mm前後の角ばった白い砂粒を含む。焼成は良好。

376は口径15.0cm、残存器高19.6cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、外面端部はゆるく外反する。内面端部は斜め上方につまみ上げる。胴部はあまり張らず、卵形を呈す。口縁部外面及び肩部は横方向のナデを行う。胴部は横方向及び縦方向のハケを施す。口縁部内面は横方向のナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りを行う。色調は内外ともに淡褐色で胴部外面には煤の付着が認められる。胎土には1mm程度の長石、石英粒を含み、焼成は良好である。

377・378は小型丸底壺である。377は口径10.6cm、器高7.3cmを測る。半球体の胴部から大きく開く口縁部をもち、端部は尖り気味である。口縁部外面は縦方向のハケのち、上半部では

横方向のナデ、下半部では粗いヘラミガキを行う。口縁部と胸部の屈曲部には細かい縱方向のハケが残る。胸部外面の上半部には横方向のヘラミガキ、下半部にはヘラ削りを行う。口縁部内面はハケののち横方向のナデ、胸部内面はヘラ削りののち、丁寧なナデを施す。色調は内外面ともに赤褐色で1mm前後の白っぽい砂粒を含む。焼成は良好。

378は口径11.4cm、器高7.5cmを測る。偏平な球体の胸部から大きく開く口縁部をもつ。口縁部外面は斜め方向のハケののち上半は横方向のナデ、下半部は横方向のヘラ削りを行う。胸部上半部は横方向の丁寧なヘラミガキ、下半部は縱及び斜め方向のヘラミガキを行う。色調は内外面ともに赤茶褐色で、胎土は1mm以下の砂粒を少量含み精良。外面の口縁部から胸部にかけて3分の1程度及び、口縁部内面に黒斑が認められる。焼成は良好。

379は杯部の大半を欠く高杯の脚部である。底径は12.8cm、残存高は4.5cmを測る。脚部は低く大きく開く。外面は斜め方向のハケののち横方向のナデを行う。内面の上方は指でナデ押さえる。下半部は横方向のハケを右回りに施すが、ナデ消している。色調は内外面ともに明黄灰褐色で、胎土には金雲母を含む。焼成は良好。

なお、図示していないが、北東壁沿いのベッド状遺構西隅の下端より鉄製刀子片が出土している。

(2) 溝

S D 742 本調査区の南側中央部で検出した。南西方向から北東方向に延びる溝状の遺構で長さ約9m、幅約60cm~80cm深さ約10数cmを測る。覆土は暗茶褐色の粘質土で、出土土器より繩文時代晚期後半以降の所産と考えられる。

出土遺物（第61図380~383） 380は胸部上半でくの字に屈曲する壺の屈曲部である。屈曲部には突帯を貼り付け、板状の工具による刻目を施す。外面には板による擦過痕が認められ、突帯の上下はナデする。内面は丁寧にナデしており、屈曲部には凹みが認められる。色調は淡い褐色で、胎土には長石・石英粒を多量に含む。

381・383は浅鉢である。381は胸部上半で屈曲し、低く短い立ち上がりの頸部から強く外反する口縁部をもつ。口縁部内面には浅い段状の凹みを有する。外面は横又は斜め方向の粗いミガキを施し、内面は横方向のナデを行う。色調は内外とも淡黒褐色で、胎土には金雲母、長石の細粒を多量に含む。焼成は良好。

383は傾きが不明確であるが、胸部上半で屈曲し、内傾しながらゆるく立ち上がる頸部と、ゆるやかに外反する口縁部をもつと思われる浅鉢の口縁部と考えられる。外面は丁寧なナデを行い、内面は横方向のミガキを施す。色調は淡黒褐色で胎土には長石、雲片を含む。焼成は良好。

382は黒色磨研の壺で、口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。内外面ともに横方向のミガキを行う。内面には赤色顔料が塗布される。色調は内外面ともに黒褐色で、胎土は精良。焼成は良好。

7 6区の調査

1) 概要

6区は遺跡群の東端付近にあたる。標高27.80m前後、排水路建設および田面の削りに伴い302m²を調査した。調査区内の東側には東南から西北に流れる中世の河川（S.D0092）があり、また南側も旧河川によると考えられる段落ちがある。試掘調査の所見でも、6区の東側と南側は河道が錯綜しており、近世以降の遺構しか見いだすことができなかった。

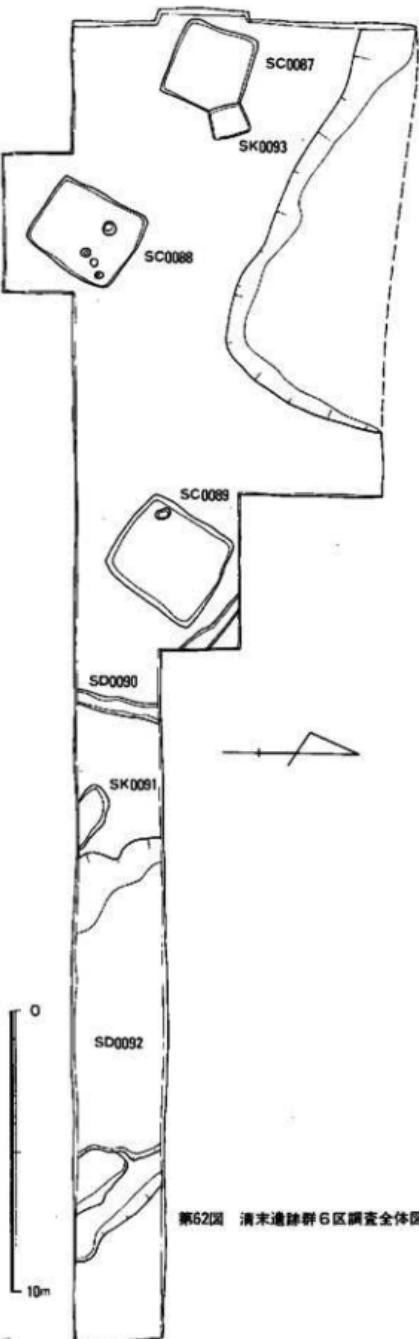
この区は耕作土・床土の下、深さ25cm前後が暗褐色土の遺構検出面となる。この検出面は不安定で、東側に行くと礫が露頭するようになる。狭い範囲であったが、堅穴住居3基、土坑2基、小溝などを検出した（第62図）。ただ遺構としてはピットなどを見ず、生活面として利用された期間が短かったことがうかがえる。

2) 遺構と遺物

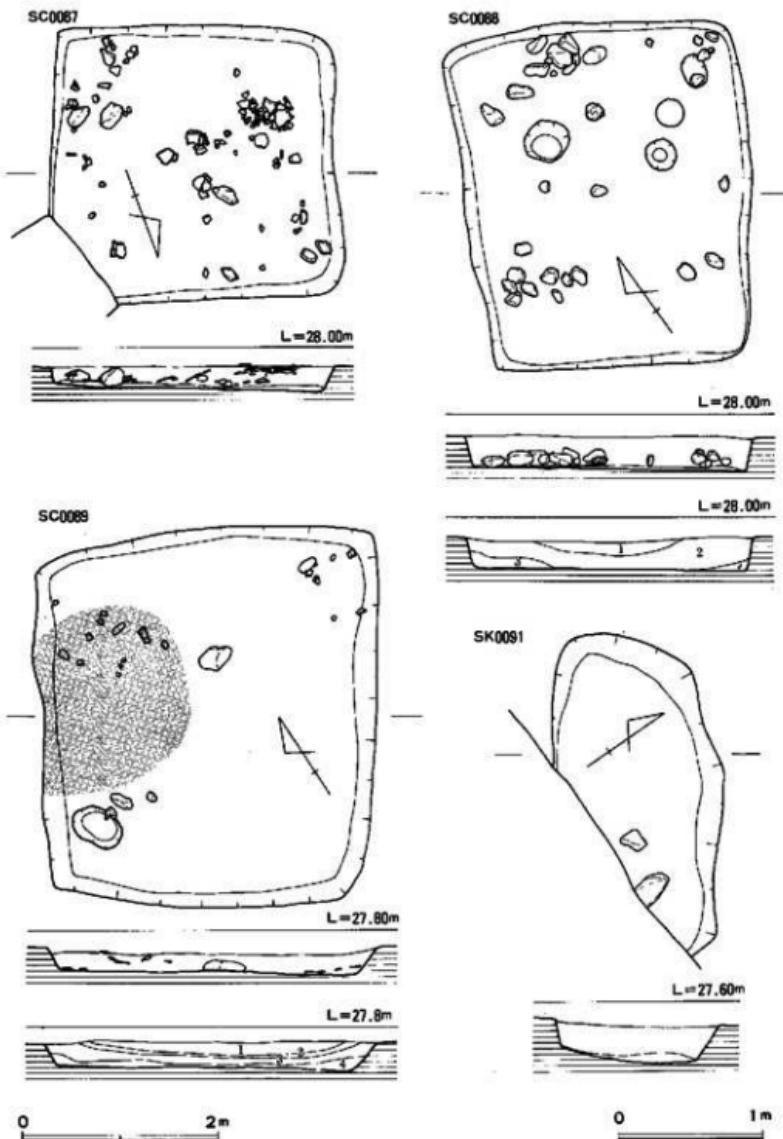
(1) 堅穴住居跡

S.C0087（第63図） 調査区西側で検出した。東北側をS.K0093に切られる。東西幅2.92m、南北幅2.84mの平面方形を呈する。西北および西南隅は丸みをもつ。深さ22cm。床面積は8.12m²。床面にピット、炉などは見あたらない。覆土は褐色土ブロックが混じった黒褐色土。遺物は床面から浮いた状態で出土した。

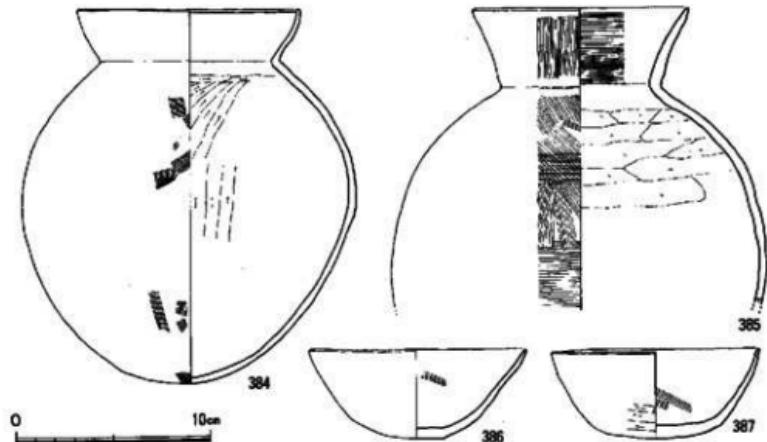
出土遺物（第64図） いずれも土器である。384は布留式系の甕。口径15.4cm、器高25.6cm。球形状の副部から口縁部が



第62図 清末遺跡群6区調査全体図(1/200)



第63図 SC0087・0088・0089・SK0091実測図(1/60,1/40)



第64図 SC0087出土遺物実測図(1/3)

内湾しながら外傾する。端部は直立気味で、口唇部はナデて平坦となる。胸部外面は細かい刷毛目調整を行う。口縁部はナデで仕上げる。胸部内面はヘラ削り。胎土には微砂粒を混え、焼成良好、外面赤褐色、内面暗赤褐色を呈する。外面の口縁部と肩部の2箇所に黒斑があり、また内底には炭化物が付着する。385は肩部から口縁部が直線的に外反する窓。外面は刷毛目調整で、肩部上半部は斜め、下半部は横、口縁部は縦方向に行う。内面は口縁部が細かい刷毛目調整、肩部がヘラ削り。胎土には砂粒を混え、焼成良好、黄灰色を呈する。復元口径14.8cm。386・387は鉢。丸みをもった底部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。端部は丸くおさめる。ともにナデ調整でしあげているが、内面には刷毛目が残存し、また387の外底には横方向のヘラ削りが認められる。砂粒を混えた胎土で、焼成良好、386が赤褐色、387が内面明赤褐色、外面黄褐色を呈する。386の口径14.4cm、器高6.2cm。387は復元口径14.2cm、器高6.1cm。

S C0088 (第63図) S C0087の東南側で検出した長軸をほぼ東北方向にとる長方形の住居である。長さ3.55m、幅3.00m、深さ32cmをかる。床面北側には並んだ2個のピットがあり、西側が深さ8cm、東側が深さ5cmと浅い。また床面には礫が多くみられた。図中の覆土は1青灰色砂質土、2暗褐色土、3褐色土、4黒褐色土。出土遺物は少なく、図示しなかったが、先のS C0087とほぼ同時期のものである。

S C0089 (第63図) S C0088の東北側で検出した長さ3.90m、幅3.42mの東北方向に主軸をとる長方形の住居である。深さ30cm。覆土は1暗褐色土、2褐色土、3暗褐色粘質土、4暗灰褐色砂質土。床面西壁側には焼土、炭化物が半円状の広がりで認められた。出土遺物はいず

れも細片で図示しなかったが、時期的には S C 0087・0088と同じである。

(2) 土坑

S K 0091 (第63図) S D 0092の西側で検出した土坑で、西南隅は調査区外となる。現況ですれば梢円形形状を呈し、幅1.20m、深さ25cm、長さ2.30m程度であろう。白磁片、土師器片が出土しており12世紀の遺構と考えられる。

S K 0093 S C 0087の東北隅を切った長方形の土坑である。長さ1.3m、幅1.1m、深さ7cm、出土遺物はないが、暗褐色土の覆土で、中世まではさがらない遺構と考えられる。

(3) 溝

S D 0090 S D 0092とS C 0089の間を南北方向に走る小溝である。幅0.3m、深さ15cm。覆土は暗褐色砂。弥生土器及び土師器の細片が少量出土した。

8 まとめ

前述までの様に清末遺跡群の調査においては官衙的配置をみせる大型建物、条里に沿う大溝、居館址と思われる建物群など中世の水田開発に伴うとみられる大規模な造構が検出された。まとめてして3区・4-1区・4-2区を中心としてこれらの遺構について若干述べてみたい。

1) 遺構の時期

本文中でも述べた様に清末遺跡群3・4区においては、回転糸切りを施す土師器小皿、壺、龍泉窯系・同安窯系青磁が出土遺物の主体を占め、一部小皿b類、口禿げの白磁も出土する。これ以前の遺物は古墳時代に遡り、古代に属するものとしては石幣を除いてほとんどみられない。時期的には12世紀中頃～14世紀前半に属する遺物が総量の大半を占めており、検出遺構もこれらの時期内に納まるものと考えられる。

4区検出の遺構は出土遺物・切り合い関係より大きく3時期に分類できる。

①大型建物群 (S B1003-S B1008) + S E0115 (12世紀中頃)

②S D0060、S E0274+掘立柱建物 (12世紀後半～14世紀初頭)

③S D0102、0104+掘立柱建物 (14世紀初頭～前半)

大型建物群は柱穴掘方からの出土遺物がほとんどなく、回転糸切り、板状压痕を有する土師器小皿片が出土している。小片のために口径等の復元は行っていないが、前述の様にこれにさかのばる資料も認められず、また建物がS E0274に切られることから12世紀中頃に比定される。S E0115では土師器小皿、壺、瓦器壺などと共に白磁が一定量を占めており、同安窯系の青磁が出土しており、大型建物群とはほぼ同時期のものと考えられる。

S E0274では多量の土師器小皿、壺及び若干の青磁が出土している。法量より12世紀後半～13世紀初頭が考えられる。S E0290もS E0274に並んで作られており、構造の類似点からも同様の時期に属するものであろうか。これらの井戸は当然住居に付属するものと考えられるが建物の特定は行い得なかった。

S D0060は土師器小皿、壺、瓦質こね鉢、白磁、同安窯系・龍泉窯系の青磁が出土している。遺物の主体となる時期は13世紀中頃～後半にかけてである。上層より小皿b類、口禿げ白磁片が出土しており14世紀の初め頃に埋没したものと考えられる。開削時期については明確ではないが、本調査区で最も古い中世遺構の一つであるS B1004と主軸方位を異にし、また出土遺物中白磁が一定量を占めていることから考えて、消極的根拠ながら12世紀中頃～後半にかけての開削と考える。

S D0102・0104は出土遺物が少量であるが、小皿b類、口禿げ白磁の出土より14世紀初頭～前半が考えられる。

掘立柱建物については、方位によって分類すると、



第65図 条里製造構(大溝)配圖図(1/16000)

④主軸をN-16°-Wにとるもの（大型建物群）

⑤主軸をN-8°-Wにとるもの（SB1009～SB1019）

⑥主軸を磁北にとるもの（SB1020～SB1022）

以上の3群に大きく分類できる。切り合いかから④→⑤・⑥の関係はおさえることが可能であったが、⑤・⑥間の関係については検討し得なかった。また検出したピット数に比べ抽出できた建物は少なく図示した以外にも更に多くの建物の存在が考えられ課題を残した。大型建物同様掘方からの出土遺物は少なく時期比定は困難である。

2) 大型建物について

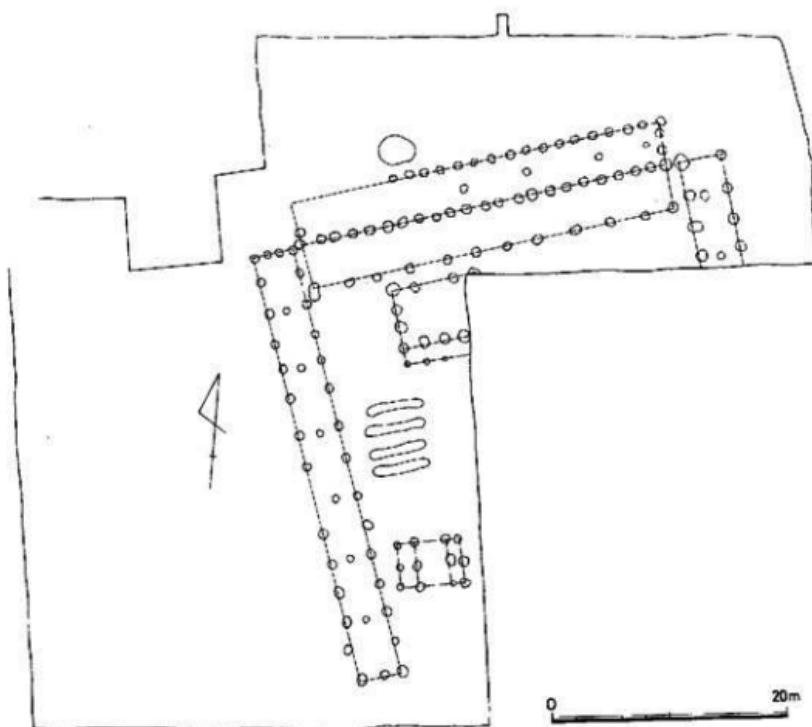
SB1003～SB1008で構成され、SB1015もこれに付属するものと思われる、建物一棟づつの規模が非常に大きく、配闇も官衙的構成である。またSB1008については布壙りの建物であり、古代的様相の強いものである。しかし前述した様に出土遺物などから中世前半期に属するものとして考えられ、同時期では類例もなく近いものとしては初期莊園における屋敷地等があるが建物の規模が大きく異なっている。

建物の構成としてはSB1003～SB1005で三方を区画し南側を正面とする。SB1006が主屋の建物、SB1010が付属屋、SB1008が倉庫としての役割がそれぞれ考えられるが東半部が未調査のため全容は明らかではない。また北辺のSB1003についても本文中に述べた様に構造的に不明な点が多く大型建物群については、今後の類例の増加が待たれる。

3) 大溝について

SD0060は早良平野に現存する条里地割に添う大溝である。この溝は蛇行しながら、おおよそN-5°-Wの方位を取り北流する。また3区中央では東西方向の溝と合流する。同様の溝は田村遺跡5次・7次・8次・11次調査、岩本遺跡1次調査、四箇船石1次調査、重留2・3次調査でそれぞれ検出している。田村遺跡5次調査では開削時期を12世紀前半に比定されており、また溝中からは13世紀代の遺物を含んでいる。5次調査検出の溝より1町西に位置する7次調査地点においては12世紀～13世紀の遺物が出土する。未報告であるが、8次・11次調査地点では5次調査地点の北側延長部分が、検出されこれからも12世紀～13世紀の遺物が出土している。また四箇船石遺跡1次調査地点では下層の砂礫層中より白磁のみが出土しており、11世紀代にその開削年代が求められる。これらはいずれも現在遺存する条里地割に沿うものであり、現状道路・水路が多く、現在に至るまで何らかの形で地割に影響を及ぼしている。これらの大溝は相当の力をもった開発主体者が、荒地開発を行い私有地化を進めていく上で治水・灌漑を行うために必要不可欠な施設であり、工事規模の大きさから考えて相当の力を持たなければ行い得ない事業であろう。

時期的には岩本遺跡検出の溝が田村例・清永例に先行している。岩本遺跡は完新世段丘1面に立地しており、河川の被害が比較的少なく安定していたため、早く手がつけられたものであ

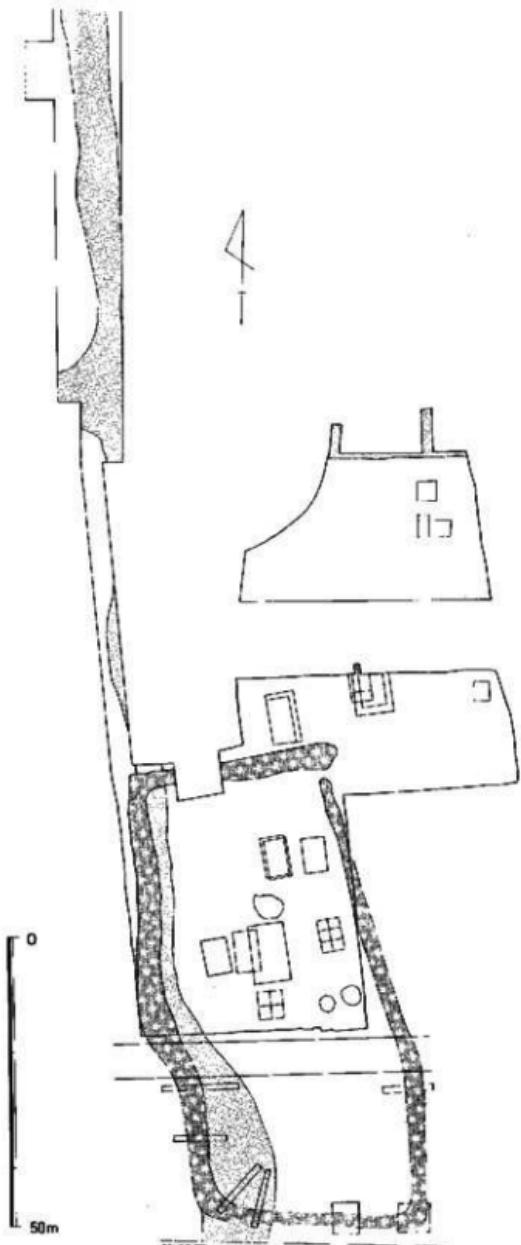


第56図 I期造構配図(1/500)

ろう。また田村・清末遺跡は氾濫原面に立地し、室見川の氾濫による被害を度々受けたものと考えられる。清末遺跡において古墳時代以降12世紀頃迄の遺物が非常に少ないと考えると、長期間にわたって開発が妨げられ、荒地化を繰り返していたものと思われる。室見川以東の早良平野南部においては古代末～中世にかけて平野東部より新田開発が進められ、氾濫原面に大溝が掘削されるに至って平野南部全体に新田開発が行われ人々が安定的に居住していったものと思われる。

4) 居館址について

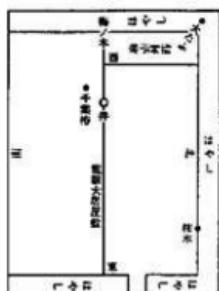
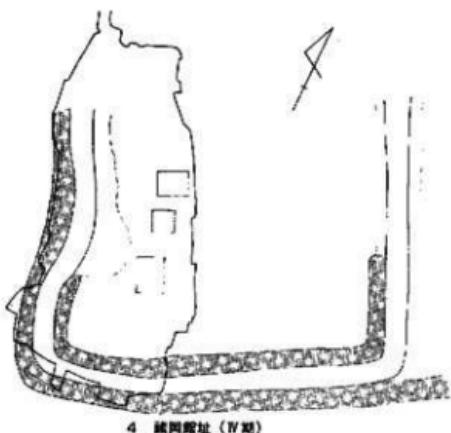
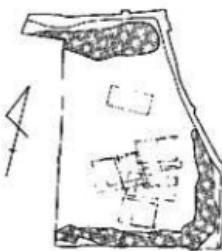
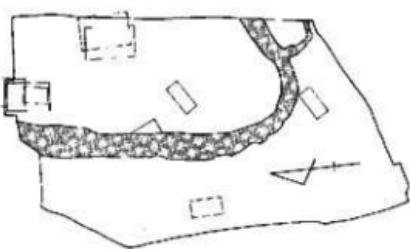
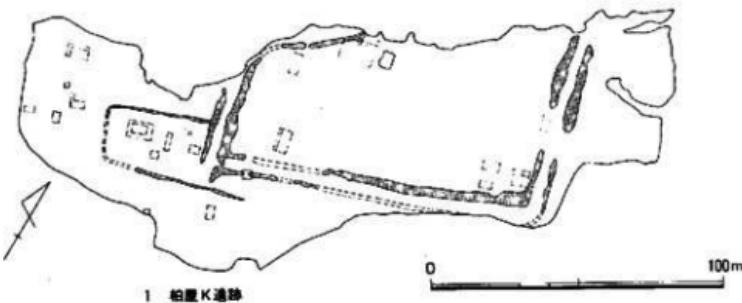
S D0102、0104で囲繞される。平成3年度の調査に伴い4・1区の南側田面を試掘した結果 S D0104とS D0102がつながり溝が四回することが判明した。(第67図)。現道路部分から東へ



第67図 II・III期遺構配置図(1/1000)

-95-

ひずんでいる。これは S D0060 の蛇行に平行しておりこれに 規制されていると思われる。 館址規模は内法で南北75m、 東西35mを測る。S D0102と 0104は形態が異なっており、 南東コーナーで接合している と思われる。北・西・南の3 方は断面V字形を呈し最低層 には粘質土の堆積が認められ 滞水状況をうかがうことができる。また埋土中に地山ブロックが含まれており土塁の存在が考えられ、東側のS D0104には埋土中に人頭大の礫が多量に入り込んでいて東側について石垣がそれぞれ溝の内側に構築されていたのであろうか。溝で区画された内部には調査区南側に集中して多く ピットが検出されたがこれまで述べた様に建物としては8棟を抽出したにすぎない。S B1010とS B1013の間などにも柱筋の通るものがあり更に多くの建物が復元可能であるが今回は果たせなかった。また個々の建物の時期についても厳密に溝に伴うものの抽出はできていない。溝の掘削以前、以後の建物も多く含まれていると思われる。現段階では居館内の建物構成など不明



第68図 居館跡例 (1/1000, 2000)

な点を多く残している。

出土遺物は少量であり存続時期は明確にはし得ないが新しい段階の遺物はみられず14世紀の後半代には廃絶したものと思われる。

以上が本遺跡検出の居館についてであるが周辺でも調査例が報告されている。

諸岡館址（註1）は三方を溝と土塁で囲まれ一方を自然の高まりによって面すと復原されている。外溝は幅2.5m、深さ0.8mを測り、断面V字形を呈す。館内規模は50m×55m程に復原されており、14世紀後半～16世紀中頃までの時期幅を持つ。館内では10回程度の建て替えが考えられ、1時期に4～6棟の建物で構成されている。

柏原K遺跡（註2）では河岸段丘上に13世紀中頃～14世紀中頃に位置づけられる二つの居館址が検出されている。居館を用む溝は30m×20mのものと120m×65mの規模に復原されている。K遺跡の東側に位置する遺跡では中世の水田址が検出されており、K遺跡検出の溝は居館を構成すると共に水田經營のための水路としての役割を果たしていたものと考えられる。ここは文献資料との対比によって御家人渋谷氏への元恩賞地と推定されている。文献資料と考古学的資料の合致する好例である。

原遺跡（註3）では矩形に巡る溝内に合計5棟の掘立柱建物が検出されており、最低3回の建て替えが想定される。溝東側では2重になり出入り口とも考えられる。15世紀～16世紀中頃に位置づけられる。

有田遺跡59次・60次（註4）調査地点では台地縁辺に、30m×80mに復原される居館址を検出している。時期的には13世紀～15世紀に位置づけられる。

清末遺跡で検出された居館は規模としては諸岡例・有田例に似ている。また構造的にも、諸岡館址では内側に土塁が検出されており清末例においても同様の施設が存在する可能性が大きい。また溝の役割については、この居館がSD0060が埋没した後に造営されたことを考えると、防御的意味合いもさることながら、周辺水田への灌漑の意味合いの強いものと考えられる。溜池の機能を兼ねた農業用水としての役割が大きなウエイトを占めていたものであろう。

5)まとめ

本調査区でみられた現象をまとめて、移り変りを推定してみたい。古墳時代以降氾濫等が原因で安定的な土地開発が行われにくかった地点に、12世紀の中頃に撲滅的な大型建物群が造営された。これはかなり広い範囲を含めて周辺開発の中心的役割を果たしたものと思われる。その後12世紀の後半代に田村等で検出したものと一連の大溝が掘削され、これを契機に室見川以東早良平野南部の水田開発が急速に進展していったであろう。それに伴い人々の居住も多くみられる様になるが、集落は散村的な状態を呈していたのではないであろうか。清末においては3区北辺の井戸跡、4区の建物⑤・⑥にもそれに対応するものが含まれていると思われる。その後開発が進行し大溝が埋没した14世紀の初頭に“領主”的支配を示す居館が出現したもの

と思われる。そしてそれに伴い一般農民は集村化を進めていったのではないであろうか。田村遺跡の調査においても11世紀代より集落が成立し14世紀にかけて集村化していく状況が認められており、同様の変化をたどっている。

以上清末遺跡で検出した遺構について大雑把な検討を行った。細かい時期区分の検討や不完全な建物の抽出など問題点を多く残している。今後大型建物・居館等の内部構造、機能などについて具体的な姿を見いだしていくと共に広い視野で中世における開発行為などを含めて社会構造を考えていくことの必要性を痛感した。今後更に検討を行っていきたい。

- (註1) 福岡市教育委員会「諸岡遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984
(註2) 福岡市教育委員会「柏原遺跡群」III 福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集 1987
(註3) 福岡市教育委員会「原遺跡」2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集 1986
(註4) 福岡市教育委員会「有田・小田部」第3集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集 1982
福岡市教育委員会「有田・小田部」第7集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986

参考文献

- 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
福岡市教育委員会「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』IV
1984
山本信夫「統計上の土器」『乙益重隆先生古稀記念論文集』 1991
石井 進「中世武士とは何か」「鎌倉武士の実像」 1987
橋口定志「方形館はいかに成立するのか」「争点日本の歴史』4 1991
広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6 1986
日野尚志「筑前國早良郡の条里」「史学研究」第99号 1967

図 版



1 岩本遺跡全景（上空から）

2 東入部遺跡全景（東から）



1 四箇古川遺跡全景（西から）

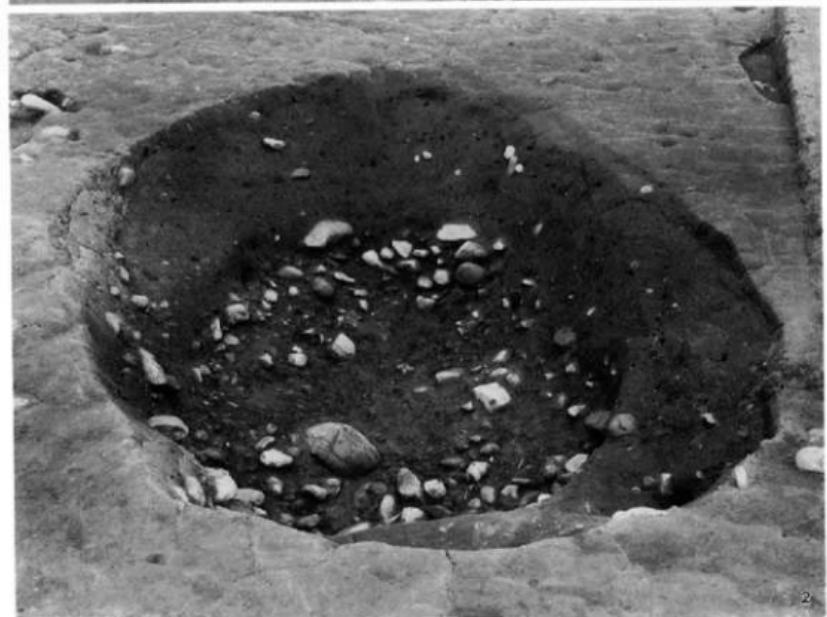


2 四箇船石遺跡1区全景（南から）



1 四箇船石遺跡2区全景（北から）

2 四箇船石遺跡3区全景（東から）



四菌船石道路

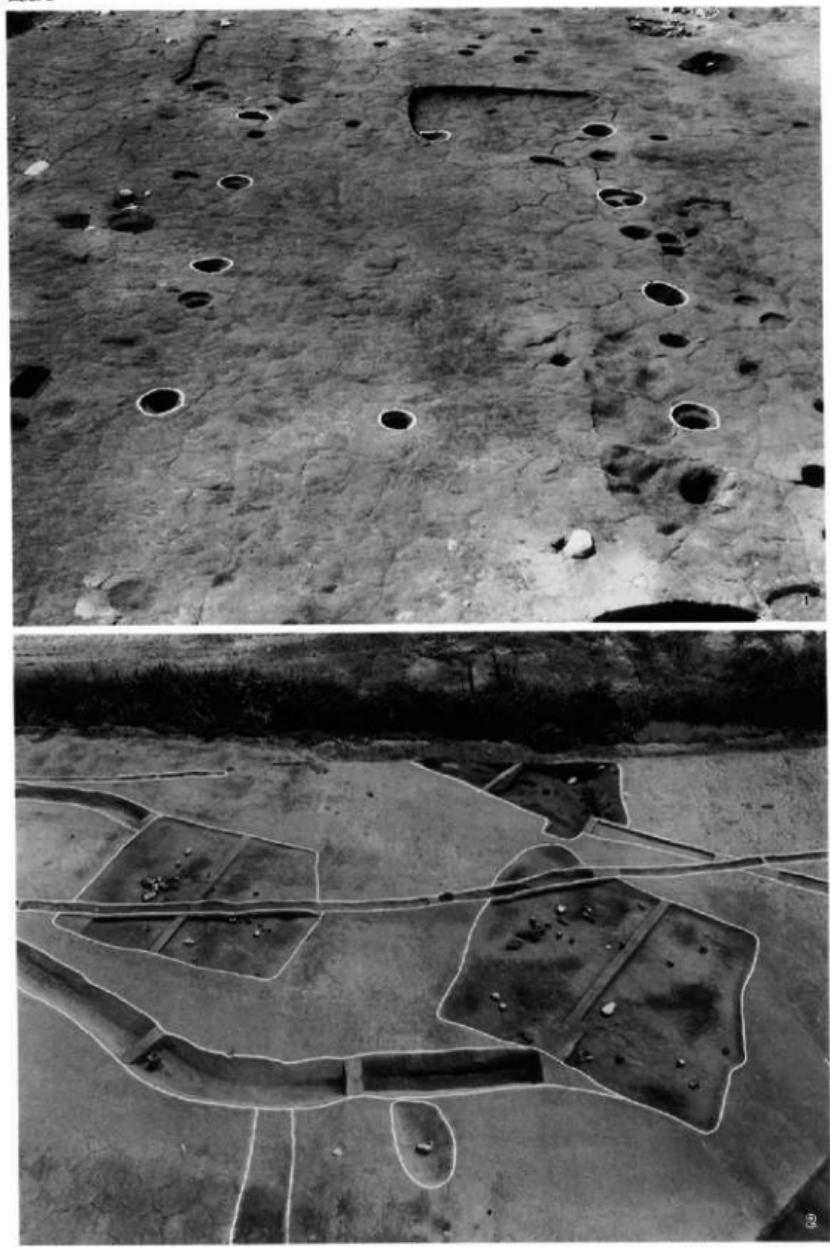
1 1区SE0002

2 2区SE0011



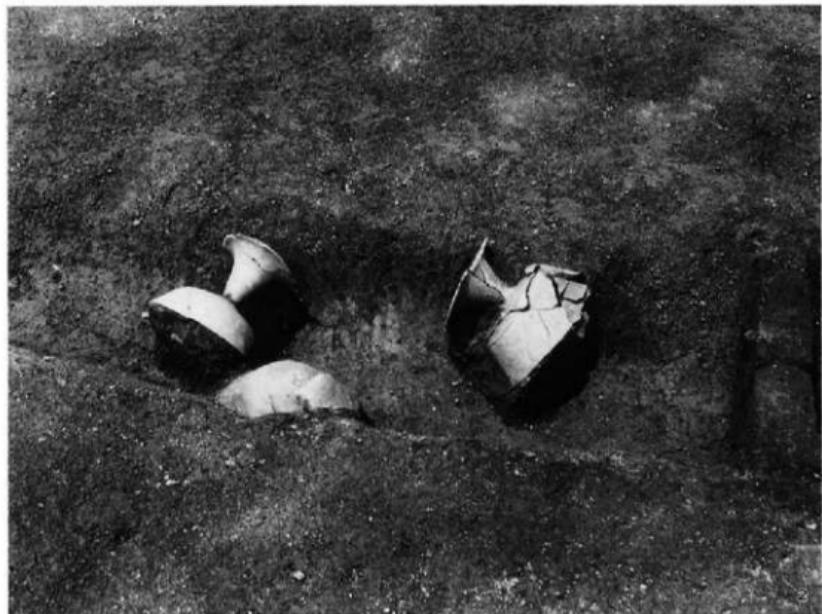
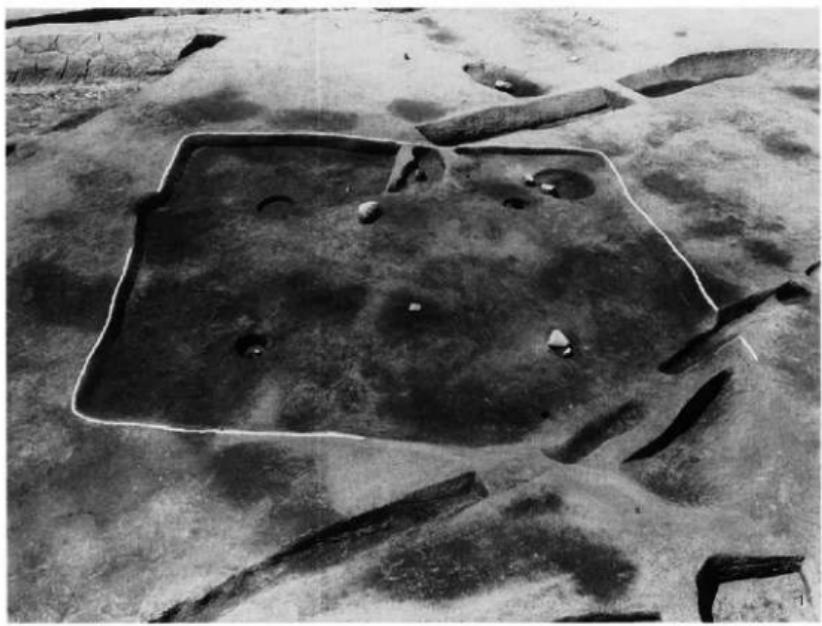
1 清末遺跡1区全景（北から）

2 清末遺跡1・2区全景（南から）



清末遺跡1区

1 SB1001 (北から) 2 SC0010・0011 (西から)



清末遺跡 1区

1 SC0010

2 SD0019遺物出土状況



清末遺跡3区

1 全景（北から）

2 全景（南から）



清末遺跡 3区

1 西側調査区全景（東から）

2 SD0060大溝（北から）





清末遺跡3区

1 SE0067・0068

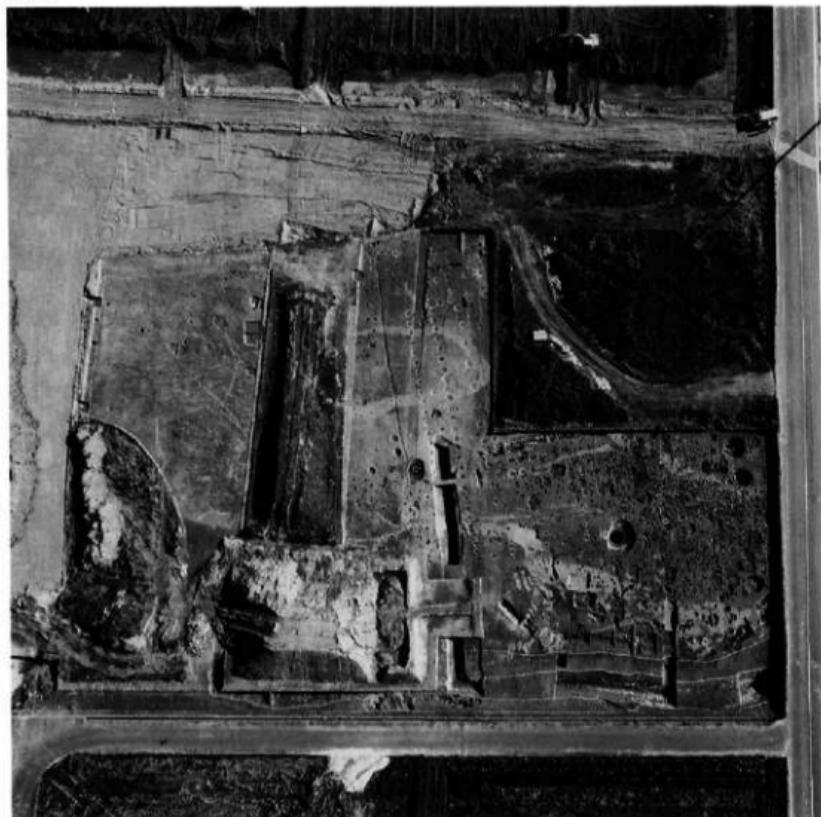
2 SE0601



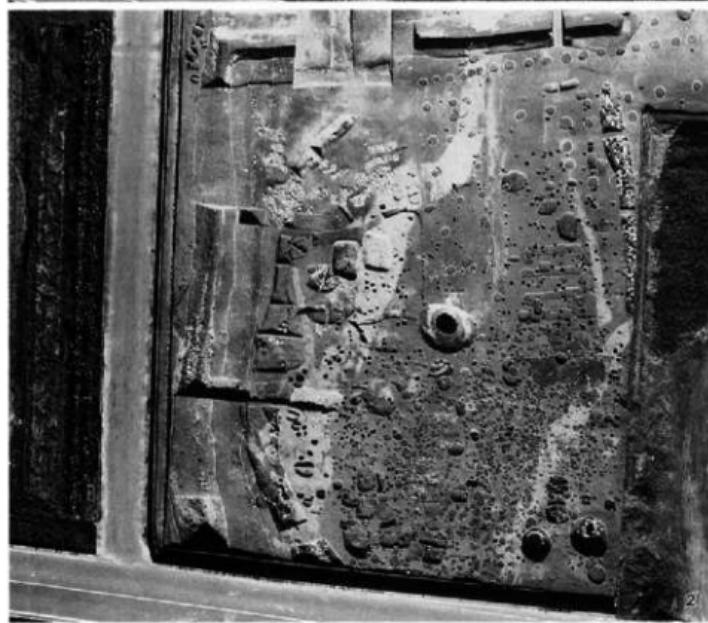
清末遺跡3区

1 SE0062

2 SE0066



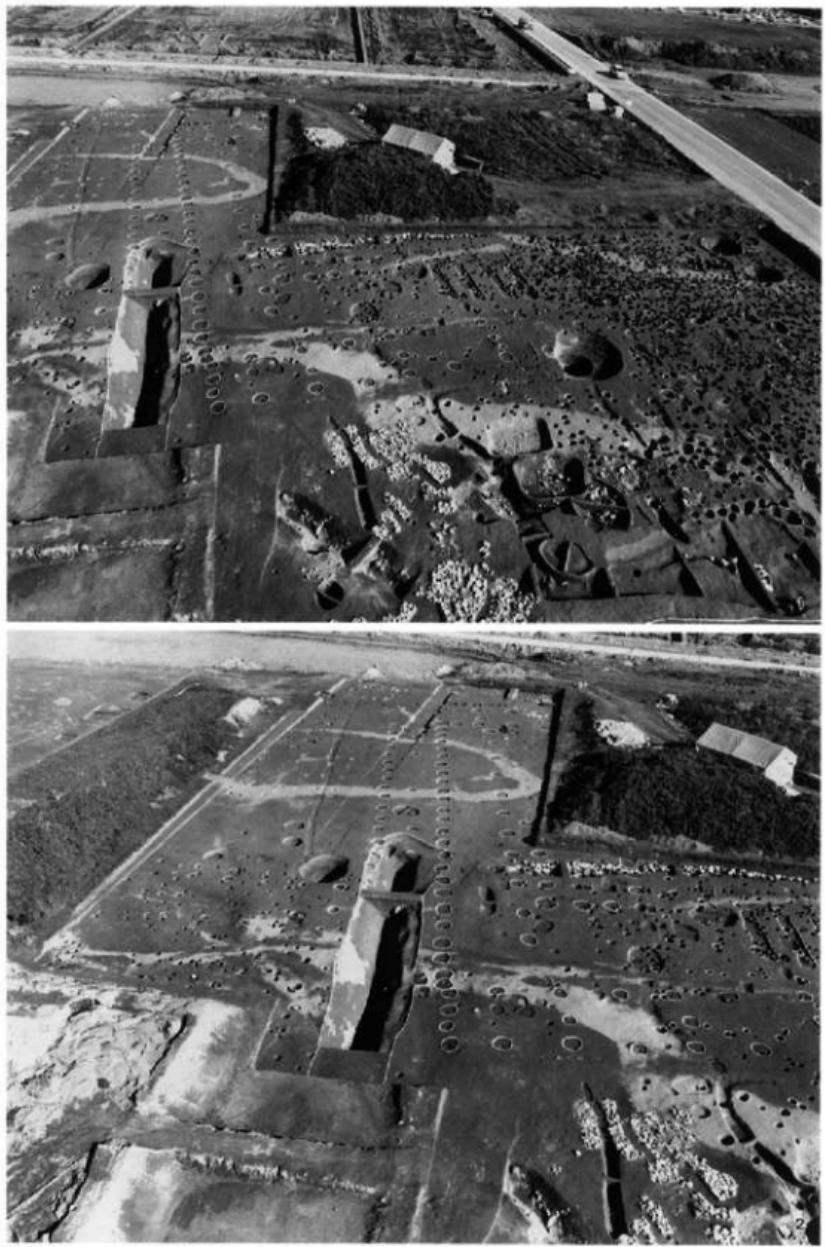
清末道路 4 区全景 (上空から)



清末遺跡4区

1 大型建物群（上空から）

2 居館（上空から）



清末遺跡 4区

1 大型建物群 (西から)

2 SB1003 (西から)



清末遺跡4区

1 SB1003 (東から)

2 SB1004 (南から)



清末遺跡4区

1 SB1005 (北から)

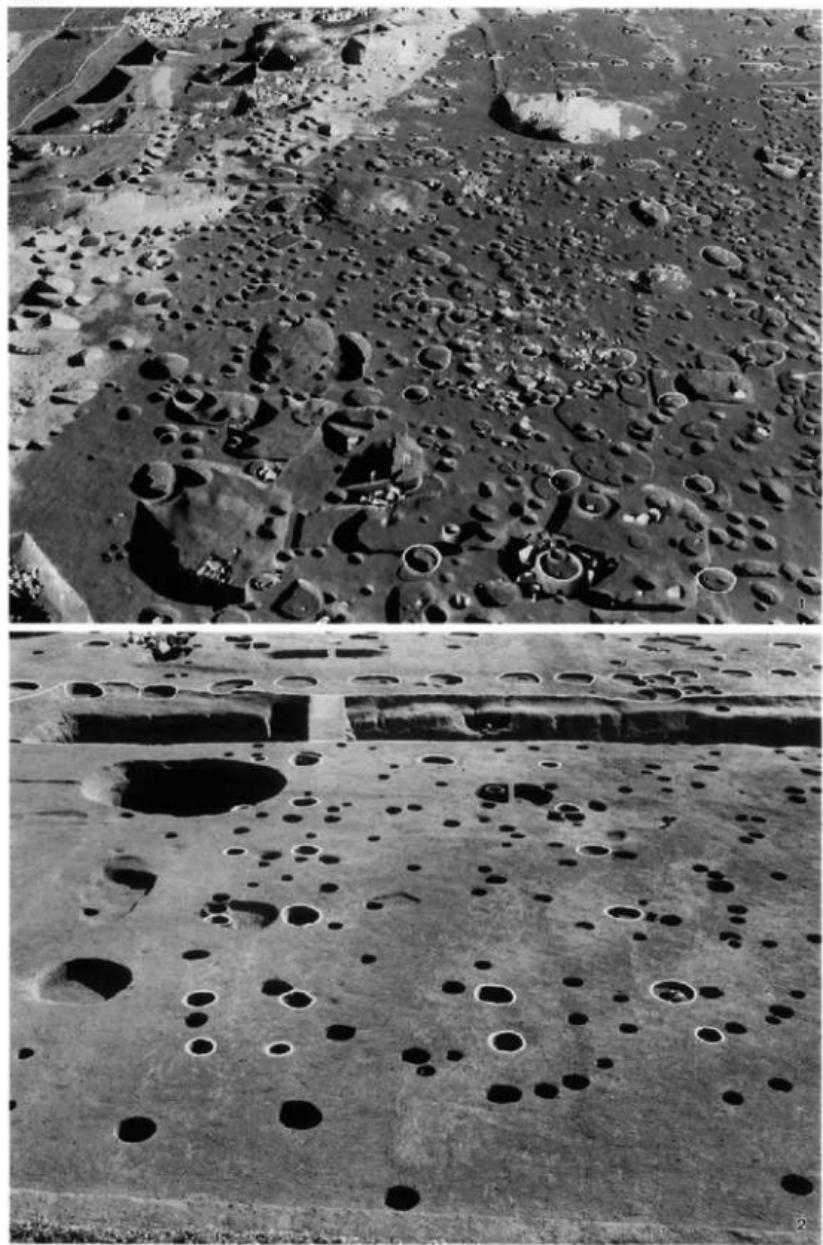
2 SB1006 (西から)



清末遺跡4区

1 SB1008 (西から)

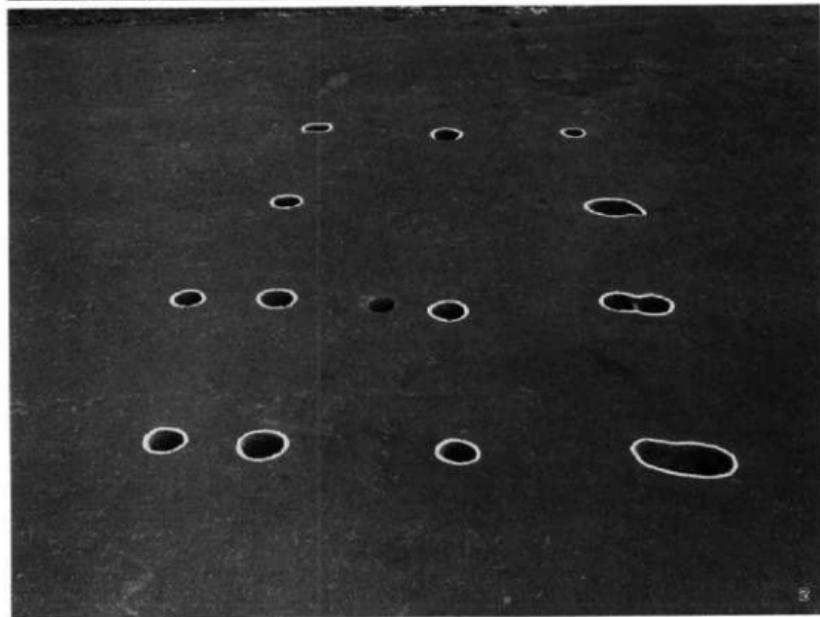
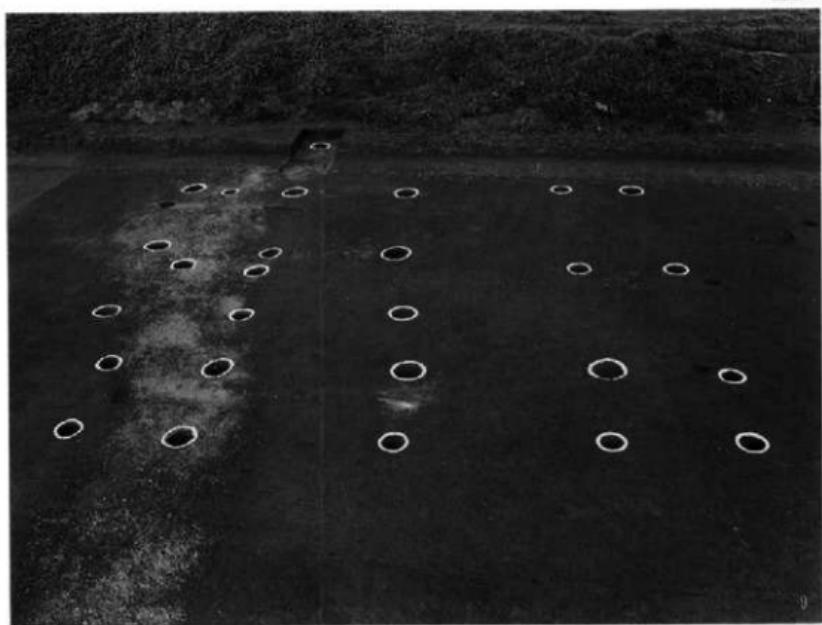
2 SB1011・1012 (北から)



清末遺跡 4区

1 SB1013周辺（南から）

2 SB1017（北から）



清末道路4区

1 SB1018・1019(南から)

2 SB1021(西から)



清末道路 4 区

1 SD0102

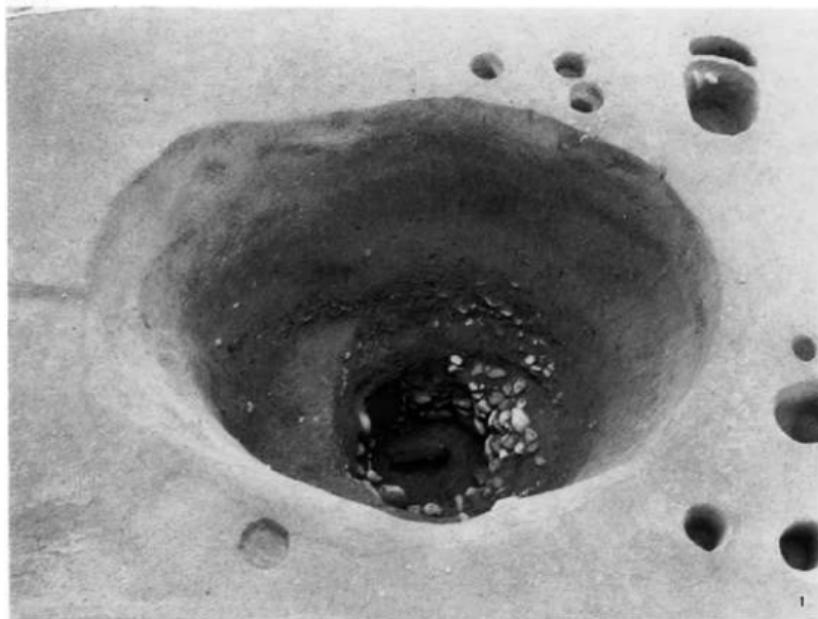
2 SD0108・0109



清末遺跡4区

1 SD0104

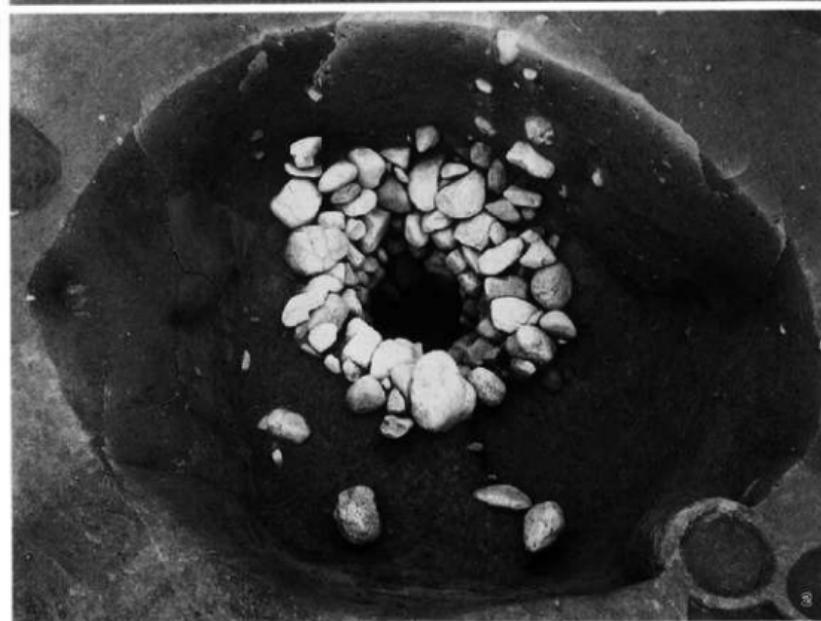
2 SD0104土層



清末遺跡 4区

1 SE0115

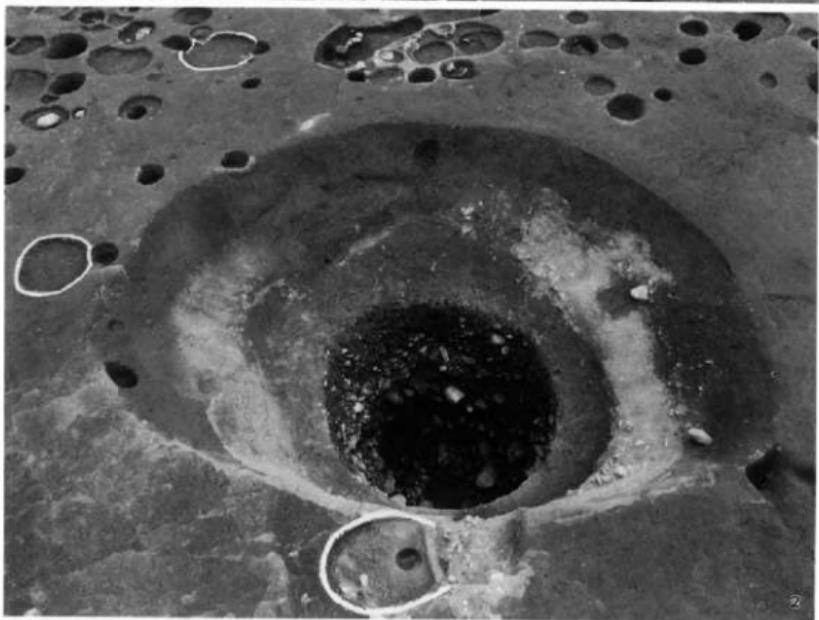
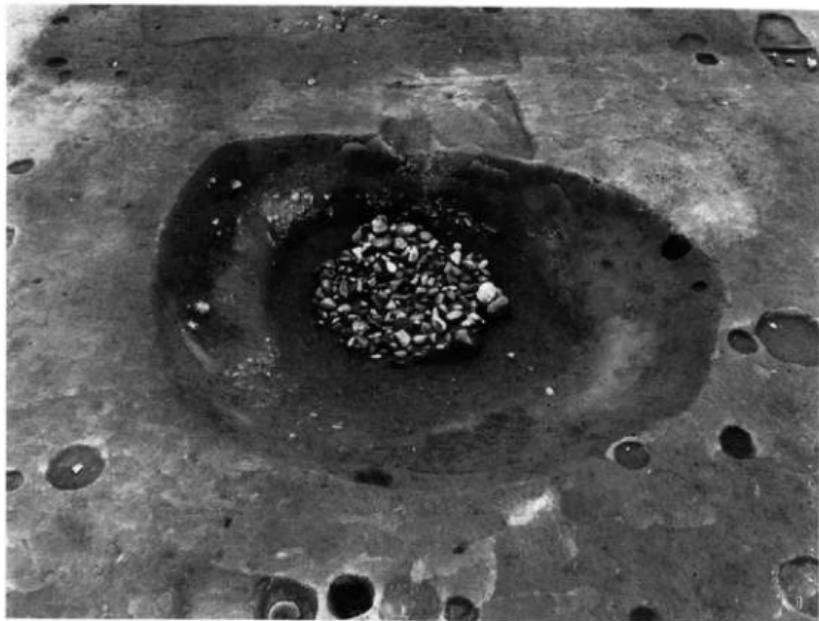
2 SE0274・0290



清末遗物 4区

1 SE0274

2 SE0290



清末遗迹 4 区

1 SE0276一段目状况

2 SE0276完掘状况



清末道路 4 区

1 SK0300・0309・0312周辺

2 SK0112



清末遗址 4区

1 SK0266

2 SK0271・0272



清末遺跡5区

1 全景（北から）

2 SC 0701



清末遺跡6区

1 全景（西から）

2 SC0089

福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集
入 部 III

1992年3月13日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 康和印刷株式会社
福岡市博多区東郷町1丁目15番1号
